

532

242



始



36.12.15

21093

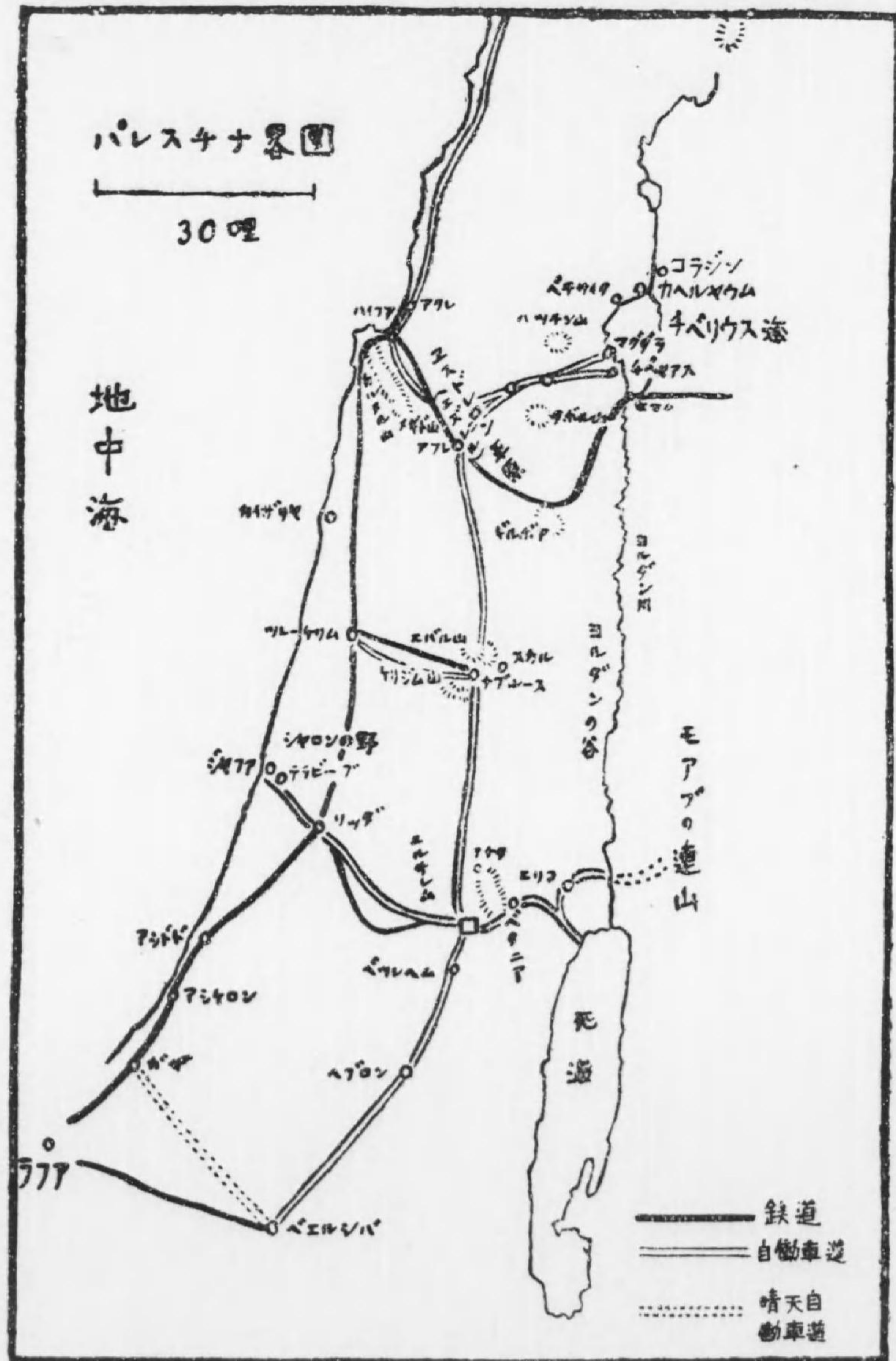


黒崎幸吉著

パレヌ  
チナの面影

東京 向山堂書房發行

大正  
14. 12. 11  
内交



## はしがき

「言、肉體となりて我らの中に宿りたまへり」。是れ古今に亘れる唯一の事實であつた。基督教の全真理は此の事實の上に立ち、人類の救は此の事實に基いて居るのである。

「我らの中に宿りたまへり」、何處に宿りたまひしか、それはバレスチナであつた。「我を愛し我が爲めに生命をすて給へる」主イエスを愛する者は、此のバレスチナに對して憧憬なきを得ない。彼の目に觸れし山河、彼の聲をきゝたる草木、此の祝福せられし山川草木を目のあたり見る事が出来る機會を與へられん事は予の多年の願であつた。此度此の願が許され充さるゝに至つた事は予に取つての非常なるよろこびである。

此の紀行文は此のよろこびの叙述である。夢の如くに楽しく又有益であつ

た巡禮の一日一日に経験した此の心得を、其まゝに記載したのが此の書の内容である。

故に本書の内容としては誇るべき何物も無いけれども唯是が著者の活きた實感の記録であると云ふ點に於て讀者に訴へる何物かある事と思ふ、尙此の紀行文をものするに際して著者の力を用いた點は、聖書との聯絡を出来るだけ多くつけ、又一々引照の箇所なども掲げた點である。是れ恐らく讀者をして、聖書を読む際に、其の背景に關する一種の印象を與へ得る事であらうと思ふ。又此の書中に自然にあらはれた事實であり、且つ同種類の他の書に見出し得ざる點は、ユダヤ人の殖民其他ユダヤ人關係の事項であらう。是は大戦後の出來事であつて、其以前に著はされし聖地の旅行記には之が記されて居ない事は勿論である。

本書は日記であつて地理書でも又歴史でも無い、従つて多くの部分に於て

聖地の地理や歴史に觸れて居るにしても、地理や歴史の参考書として之れを見る場合には勿論不完全である。此の點に於ては、英語では George Adam

Smith : — Historical Geography of the Holy Land 獨逸語では Dalmann : —

Orte und Wege Jesu 等を参照していただきたい。

挿入の寫眞は多くは著者の撮影せるもので、中には然らざるものも混合して居る。割合に多數の寫眞を掲げた事は目にも訴へて此の記事の理解を助けたいとの考へからである、幾分でも讀者を益する事を得ば幸である。

尙本書の發行に際して多大の援助を與へられし津村義忠兄に對し著者の深い感謝を茲に表明して置く。

一九二五年十月末日

著者識す

はしがき

目次

第一篇 パレスチナ

一、マルセーユよりポートサイドまで	一
二、聖地に入る(エルサレムの印象)	一七
三、ベツレヘムと其の附近	三三
四、ヨルダン行き(死海、エリコ、ベタニア、善きサマリア人の旅舎)	四三
五、橄欖山に登る	五〇
六、ジャファ(ヨツバ)及びテラザイザ	五七
七、リシオン・ル・シラン(ユダヤ人最初の植民地)	六三
八、ハイファとカルメル山	六九
九、アフルレの猶太人植民地	七三
十、ガリラヤの海(チベリアス)	八四

十一、タブカの三日（カベルナウム）……………二三

十二、ナザレ及カナ……………二三

十三、タボール山（キリスト變貌の山）……………二四

十四、ナブルース（シケム）（サマリヤ人、ゲリジム山、エバル山、ヤコブの井戸等）……………二五

十五、再びエルサレムに入る……………二六

十六、カヤバの家の跡、アナトテの村……………二七

十七、神殿地域と其附近……………二八

十八、キリスト受難の道程（ウキア・ドロロサ）……………二九

十九、聖墳寺、考古學校……………三〇

二十、橄欖山（猶太大學、昇天寺其他、ゲツセマネの園）……………三一

二十一、キドロロン（ケペロン）の谷……………三二

二十二、ヘブロン（マクベラの洞穴、マムレの櫛の木）……………三三

二十三、猶太人慟哭の場所……………三四

二十四、エルサレムの概観……………三四

第二篇 エジプト

二十五、エルサレムよりカイロ迄……………三五

二十六、ギザのピラミッド……………三六

二十七、回々教寺院、アラビヤ市場、ヘリオポリス……………三七

二十八、博物館、圖書館……………三八

二十九、サツカラ……………三九

三十、鹿嶋丸……………四〇

目次（終り）



挿 繪 目 次

一 香取丸上の餅搗き……………二六頁  
 二 ポートサイドに於ける英國軍艦……………二六  
 三 シヤファア門……………二七  
 四 エルサレムの市街を駱駝が通行す  
 處……………二七  
 五 博士の井戸……………二七  
 六 ラケルの墓……………二七  
 七 ベツレヘムの町……………二七  
 八 誕生寺の一部……………二七  
 九 エルサレムよりエリコに到る道……………二七  
 一〇 死海を其の北端より望みせる處……………二七  
 一一 ヨルダン川……………二七  
 一二 舊エリコの發掘跡……………二七  
 一三 ベタニアの邑……………二七  
 一四 マリヤとマルタの家……………二七  
 一五 ステパノ門……………二七

一六 橄欖山よりエルサレムを望む……………二六頁  
 一七 シヤファアの港……………二七  
 一八 タビタの墓……………二七  
 一九 カルメル山……………二七  
 二〇 カルメル山より望みせるハイファ……………二七  
 二一 カルメル山上のエリヤの僧院……………二七  
 二二 アフレ附近の猶太人殖民地……………二七  
 二三 ガリラヤの海……………二七  
 二四 ベドゥン井サンの生活……………二七  
 二五 ガリラヤの魚……………二七  
 二六 ガリラヤ湖上の漁夫……………二七  
 二七 カヘルナウムのシナゴク發掘跡……………二七  
 二八 タブカ附近のガリラヤ湖……………二七  
 二九 ナザレを後方の山上より見下した  
 る光景……………二七  
 三〇 マリヤの井戸……………二七

三一 カナの邑……………二七  
 三二 ナザレに至る途上にある無花果の  
 木……………二七  
 三三 タボール山上に新築せられし寺院……………二七  
 三四 タボール山……………二七  
 三五 ヤコブの井戸の側に新築中の寺院……………二七  
 三六 ゲリシム山の中腹よりナブルース  
 及びエバル山を望む……………二七  
 三七 アナタの村……………二七  
 三八 アナタの村民とK氏……………二七  
 三九 神殿地域……………二七  
 四〇 美しい門……………二七  
 四一 ギイア、フロロサ……………二七  
 四二 聖墳寺入口……………二七  
 四三 ゴルドンのカルバリ山……………二七  
 四四 ユダヤ大學……………二七  
 四五 ゲツセマネの園……………二七  
 四六 神殿地域よりゲツセマネの園橄欖  
 山及びスコプス山を望む……………二七

四七 發掘せられしダビデの櫓……………二七  
 四八 水汲少女とK氏……………二七  
 四九 シロアムの池……………二七  
 五〇 神殿地域より見たるアサロムの  
 墓、ヨサバテの墓、聖ヤコブの墓……………二七  
 五一 ヘアロンに在るマレムの櫓の木……………二七  
 五二 ヘアロンの町……………二七  
 五三 羊の草藁にて水を運ぶ光景……………二七  
 五四 ユダヤ人勸哭の場所……………二七  
 五五 パン賣り……………二七  
 五六 雨管屋……………二七  
 五七 ギザのピラミッド及びスフィンク  
 スと著者……………二七  
 五八 ヘリチポリスの新市街……………二七  
 五九 サルタンハツサンノモスク……………二七  
 六〇 サルタンハツサンノモスクの内庭……………二七  
 六一 カイロにあるイスマイルパシヤの  
 銅像……………二七  
 六二 カイロの歌劇場……………二七

挿 繪 目 次

パレスチナの面影

六三 カイロ博物館……………二五

六四 メンフィスのスフィンクス……………二五

挿繪目次 (終)

パレスチナの面影

黒崎 幸吉 著

第一篇 パレスチナ



マルセイユよりポートサイドまで

香取丸

美しいパレスチナの都、人類を歡樂と滅亡に引き入れんが爲めの設備が完全に具備して居る。パリから夜行でマルセイユにつき、直に自動車で日本郵船の香取丸についた、法律上船舶が領土の延長であるといふ事を知ると知らざるとに關らず、日本船を外國に於て見る事はなつかしいものであり、殊にそれに乗る事は何となし日本に一步足をふみ入れた様な心地がするもの。

マルセイユよりポートサイドまで

である。船には多数の黄褐色の日本人船員が働いて居り、忙しそうに右往左往に驅せ廻つて居る。目と口と頬骨とが飛び出し、鼻は引込み、中には口が開いたままに締まらない顔などが澤山に見ゆるのは正直の處決して見榮えがする光景では無い、色の白い、鼻筋の通つた、鋭い目、引締つた口を持つて居る歐洲人の間に此の日本人を見るのは決して誇らしい氣分になれないものである。乍併日本及日本人の將來は此の皮膚の色や、鼻や目を以て限定せらる可きではない、若し日本人の智識が進み、其の徳性が養はれ、内に人道の焰が燃える様になるならば、此の一見見劣りがする顔から光を放つて何人種何國人に對しても恥かしくない風貌を呈する様になる事は疑ふ事が出来ない。此事を考へて見れば別にそう悲觀するにも及ばないであらう。

大正十三年十二月廿八日早朝船はマルセイユを出帆した、船は日本に向つて居るけれども、予は年來の宿望であつたパレスチナ行きを計畫し、ポート

サイドで下船する事にして居るのである。二等船客の半數は外人半數は日本人で、日本人は官吏、醫士、學生、實業家等であり、婦人子供も交つて居る。船中の日常生活は大抵何時も全じ事で、食ふ事と飲む事と、カード、デツキゴルフ、デツキビリヤード、輪投げ、甲板上の晝寝、議論、談話等で一日を過すのである、全じ位の年輩の人間が、全じ様な船室に詰め込まれ、全じ時間に全じ食事を取り全じ遊戯をやり所謂吳越同船を實現して居り乍ら、而も名々が皆違つた性格を持つて居り、異つた心持や感情やを持つて全じ方向に進んで行く事を考へると、何とはなしに、人性の複雑さを目の前に見せられる様な心持がして、恐ろしい様な悲しい様な心持に打たれざるを得なかつた、全じ様に見えて皆ちがつて居る、ちがつて居る様に見えて皆全じである、是が神の創造し給へる人間の實際であらう。單調は神の本質では無い、神の性質を持つて生れた人間に單調は禁物である。出来るだけ多くの變化を實現す

る事が人類の目的であらう、乍、佛之と全時に人間は皆神に創造せられた點に於て一つであり、神の目的に向つて進むべきものである點に於て一つである。神をはなれて人生は何處にも其の歸着點、終極點を見出す事が出来ない。此の點に於て人生は吳越同船皆全一の方向に向つて進む可きであらうなど考へて居る間に船は荒浪を蹴立て乍らコルシカ島を指して進んで居る。

十二月廿九日の夜九時過ぎ船はストロンボリ火山の側を通過した。赤い焰が其の噴火口から吐き出されて居るのが手に取る様に見え、時々別に火の柱が高く空中に吹き出るのが見える。シシリイの海峡は午前三時頃に通過し、朝起きた時にはエトナの山が眞白に雪を戴いて遙に後方水平線の上に聳え白煙を吐きつゝあるのを見る事が出来るのみであつた。

卅一日。船はクリート島の傍を通過した。高さ四五千尺もありそらな連山が白雪をいたゞき日光を反射して居るのが非常に美しく見え、嘗てパウロが

ストロンボリ火山

クリート島

捕はれてローマに行く途中此の島の彼方で難船した事などを思ひ起し(使徒行傳二十章七)一層のなつかしみを覺えた。飽かず眺めて居る間に船は休まずポルトサイドに向つて進んで行く。

大晦日

今日は大晦日なので船客の中に何か祝ひをしようと思ふ案が出て日本人と外人の委員が自然に出来上り、一同で相談の結果、假裝會やら其他の遊戯をやる事に一決したらしい。一番遊戯が好きで且つ其の材料を豊富に持つて居るのはアングロサクソン人種である。是迄度々船旅行をやつた経験によれば遊戯や運動を熱心にやり、上手で且つ澤山の種類を知つて居るのは何時も英人か米人であつた。無邪氣で可愛いゝとも云へよう、併し他人種を排斥し壓迫する點などを見れば彼等もあまり無邪氣では無い。要するに深く考へる事がきらいな彼等の性質と、植民地より絞り上げた富によつて得た金と時間とそれから一時彼等の間に勢力が強かつた基督教の信仰とが結び付いて此結果

マルセイユよりポルトサイドまで

を來したるものらしいと予は觀察した。尙詳しく之を説明すればアングロサクソン人種は黑人を奴隸にしたり印度や亞弗利加を掠奪したり、支那までも手を延ばす事によつて其の現在の富を獲得した、從て金と時間が有り餘つて居る、夫故に之を消費する事を考へなければならぬ。然るに十七八世紀より十九世紀に亘つて英國の内政は基督教主義の支配の下に在つた、夫故に此の時間と金とを甚しく不徳道な享樂に使用する事は社會が之を許さない。さらばとて沈思黙考と云ふ様な事を好まない此の人種は、其の時間を深い哲學や文學や音樂に費す事を知らない。其處で無數の小供らしい、下らない、馬鹿さはざとも稱すべき遊戯が發明せられ、實行せられて居るのではあるまいかと考へざるを得ない。スポーツの如きも矢張り全じ原因から來て居ると思はれる。時々無邪氣に愉快に時間を過す事は至極結構である。日本人もあまり始終鹿爪らしい顔ばかりして居るよりも時々かゝる小供らしい騒ぎをする事

も悪くは有るまい。

大晦日の舞踏假裝會も矢張り英人が大多數であつた。日本人も數名之に加はつて大に東洋人種の旗頭たるの名譽を保持した、佛人夫婦と一獨逸青年とは姿を消してしまつた、「嫌いだ」と云つて居つた。

其後もダンスやらトリストやらカードやらがにぎやかに行はれた様であつたが早く御免を蒙つてケビンに引込み、過ぎし一年の間を顧み將來を思ふて感謝と懺悔と祈願とを愛の神の御前にさしげ希望を以て新年を迎ふべく寢についた。

一月元旦

一月元旦早朝起き出でて水平線より昇る初日の出を見た、何とも云へぬ壯觀である、中には之を拜んで居る人も有つた無理もない心持である。東天に點點して居る黒雲の縁を眞紅に染めつゝ鏡の様にギラ／＼光つた太陽が刻々水平線から上つて來るのが見えた。是こそ力と熱との源であり生命を養ふエネ

マルセーユよりボートサイドまで

ギルデーである。此の太陽が昇らなかつたならば萬物は枯死するであらう。人間は存在しないであらう。實に偉大なる力では無いか。古來多くの人種が太陽を拜する事を其の宗教とした事も極めて自然であるとなづかれた。今日の文明人の船客の中にすら眞面目に此の太陽を拜して居る人があるのを見て其の偉大なる力が自然に人類の心に深く感ぜられて居る事を見る事が出来る。乍併更に之よりも深く其の源に遡り此の太陽を創造し給へる神のみ拜し唯之にのみ従つたユダヤ人がある事を忘れてはならない。大古草味の時代に既に此の信仰を固持し之を以て終始したユダヤ人の事を考ふる時、彼等の宗教心の非常に卓越せる事を知り其の中よりイエス・キリストが生まれ出づる事の極めて自然である事を思はざるを得ない、普通人が普通に考へ、又感ずる以上の事を考へ又感ずる事を得しユダヤ人は卓越せる人種であらねばならぬ。

食堂には正面に鏡餅と伊勢海老、それにベ細等が飾り立てられ、天井には萬國旗が張り廻されて如何にも正月らしい気分になつて居る。同船の日本人だけが少し早く起きて御屠蘇に雑煮で新年を祝つた。數ノ子、ゴマメ、煮豆等見るだけで如何にも日本の新年らしい氣持がする。外國に出てからは三度目の正月で、三度目に始めて日本式の新年を祝ふ事が出来たので何となし昔に返つた様な落付いたらしい心持がした。獨逸人や英人がクリスマスを祝ふ時は如何にも嬉しそうな顔をして居るのを思ひ出した。我々が其處に招かれても勿論楽しいには楽しいとしても先づ彼等の習慣を観察しようとする努力が先に立つので心が平靜になる事が出来ない、好奇心やら批評心やらがしきりに心の中に活動して居るので心が忙しいのであらう。久し振りで日本流の新年を祝ひ何となし心の落付きを覺えた。

船客中の日本人は實業家、官吏、教授、醫師等で皆一年以上數年間外國に居

マルセーユよりポートサイドまで

つて勉強をしたり遊んだりした人々である。船客の外國人は近いのはエジプト其他は新嘉坡や香港に行く商人連中である。若い佛國人夫婦で香港に行くと言つて居るのがあつた。妻君は船に非常に弱いらしく少し浪があれば食堂に出て来ない、そして香港に行くのもいや／＼乍ら行くらしく數年居つて金でも溜まれば又佛國に歸ると云つて居つた。此の點は英國人などに比べると著しく違つて居るのに氣が付く。英人は外國に移住する時には其處に一生暮す事を覺悟して行くのが常で、たとひ五年や、十年毎に休暇を得て故國に歸るにしても、又出て行つて遂には其の國の土と消える事を當然の事の様になる。佛人には一般に此の移住心が無い。日本人にも是が少い。此の點は兩國人に共通の様である。此の夫婦と三人で雑談をして居る間に今一人の獨逸の青年が一寸自分の帽子を吾々の居つた机の上に置いて行つた、それから其の佛人は肱でゴリ／＼其の鳥打帽を摺り乍ら「ボツシの奴め」と云つて居

つた。どこまで兩國民が憎み合ふつもりか殆んど涯しが無いのであらう。愚かな事である。

ボートサイド

議論やら戯談やら、經驗談やら、デツキゴルフ、デツキピリアード等で時の移るのを忘れて居る間に一日も過ぎ其の眞夜中に船はボートサイドについた。朝起きて甲板に出て見ると大きい英國の軍艦が香取丸の前にノソリと浮んで居る。エジプト問題の牽制の爲であらう。自國に軍艦らしい軍艦も無く軍隊らしい軍隊も無いエジプトは如何に切齒扼腕した處で要するにゴマメの齒ぎしりに過ぎず、此の大きい軍艦に向つて何事をもなす事が出来ないであらう。エジプトも可哀そうである。そして力づくで弱いものを壓迫して居る英國が、つら憎い様に思はれてならなかつた。そして而も英國人は世界の道徳的指導者 Moral leader of the world を以て任じて居るに至つては言語道斷の沙汰である。

マルセーユよりボートサイドまで

九時頃ボートサイドに上陸した、上陸しない先から苦しめられ出したのは金銭のユスリである。上陸しても一刻も此のユスリや乞食から脱する事が出来ない。是ほど不愉快なものは又とは有るまい。先づハシケで本船から陸まです五六分の處を渡して貰つた。始めに二志ときめて乗つたのに下船する時にはもう四志を請求する、丸で泥棒商賣である。巡査の助けでやうやく其の厄を脱れた。上陸してボーターに荷物を持たせて税關まで行くと、全然顔も見なかつた男が出て来て自分はボーターの統領だから五志くれと云ふ。止むを得ず念を押して他のボーターには直接に拂はない事を再三繰り返し、それで宜しいと云ふ事にきめて二志半を拂つて其の場は脱れた。併し荷物を運んで来た男はそれを知りつゝ承知しない。宿までついて来て金をやるまで門口を去らなかつた。實に圖々しいうるさい人間である。是等のアラビヤ人も相當の顔をして居り、そう馬鹿でも無さそうであるにかゝはらず、かゝる乞食根

性ユスリ根性を出すと云ふ事は悲しい事である。

而もユスリ根性は小供にまでも及んで居る。ボートサイドには十歳位に見える小供が道路の傍でクツ磨きをやつて居る。靴磨きの道具を肩にかけて道を歩き客を逐つて歩くのである。汽車の時間迄間があるので街路を散歩して居つた處此の小さい靴磨きが二人やつて来た。五錢白銅貨を一つ出して見せそれで磨かしてくれと云ふ合圖をして居る。経験の爲めと思つて磨かせて見ると年が若いにも關らず中々器用に磨くので感心して居ると間もなく磨き終つた。約束通り五錢をやると思つた様な顔をしてそれをば取らずに五錢を四つくれと云ふ。未だ小學も終らない位の子供から大人と全じ様にユスル事を覺えると云ふのは何たるニガムしい事だらうと思ひ、可哀そうにもなり、癪にも障り乍ら面倒なので五錢を二つ出してやつた。けれども彼はそれでも尙承知しない。丁度其時道傍に遊んで居つた七ツ八ツ位の少し身なりの綺麗



な子供が走つて来て何かアラビヤ語で、そのクツ磨きの子供と争論をして居る。予は其の意味が分らなかつた。それから子供とは云へあまりに下劣であると思つて「十銭ならばやるけれどももしあまりシツコクゆするならば五銭しかやらない」と云つてドシ／＼道を歩き出した。乍併彼は一向平氣である。今一人の靴磨きの小供と二人で何處迄も予の跡について来てシツコク付き纏つて居る。其處に先の可愛い子供が又出て来て予に向つて指一本を出して合圖をして居る。其の意味は十銭やればそれでよいと云ふ意味らしい、そしたら靴磨きは怒つて其の子供を逐ひかけ石を拾つて投げて居つたけれども子供は逸早く何處かに逃げてしまひ靴磨きは又予について来た。何と云ふ汚い不快な現象であらう、獨逸に居つた時は其の憎敵心の強いのに多大の不快を興へられ、英國に行つては其の外交政策のづるいのに憤慨して英國を嫌ひになつたけれども、今朝からポートサイドに上陸して到る處で

ユスリと泥坊の世界の様な處に入つて見ると、始めて獨逸や英國の事を思ひ出して又夫等の國に歸り度い様に思つた。アラブ人と雖もそう劣等な人種では無い、唯國家の存在が不確實であり。教育が行き届かず、政治が統一せられない爲めに、かゝる悪い性質を發達せしむる様になつたのであらう。

其以後も全様の事の連続である。停車場へ往復の自動車や馬車、赤帽、案内者、皆同一の方法で同一の要求を持つて来る。殊に甚だしかつたのはエルサレム行の汽車が動き出してから一人の癩病患者が足の先が腐りかけたのをつき出して、居ざり乍ら二等列車の客室を廻つて金をねだつて歩いて居つた事である。かゝる不潔な病人乞食を汽車の中に入れて居るのは世界中で始めて出逢つた現象である。全室のイタリヤ人はイムシ、と云つて居つた、「其方へ行け」と云ふアラビヤ語である。此の單語は予の習つた最初のアラビヤ語である。英國に行く人は何より先きに第一にサンキューを覺える必要



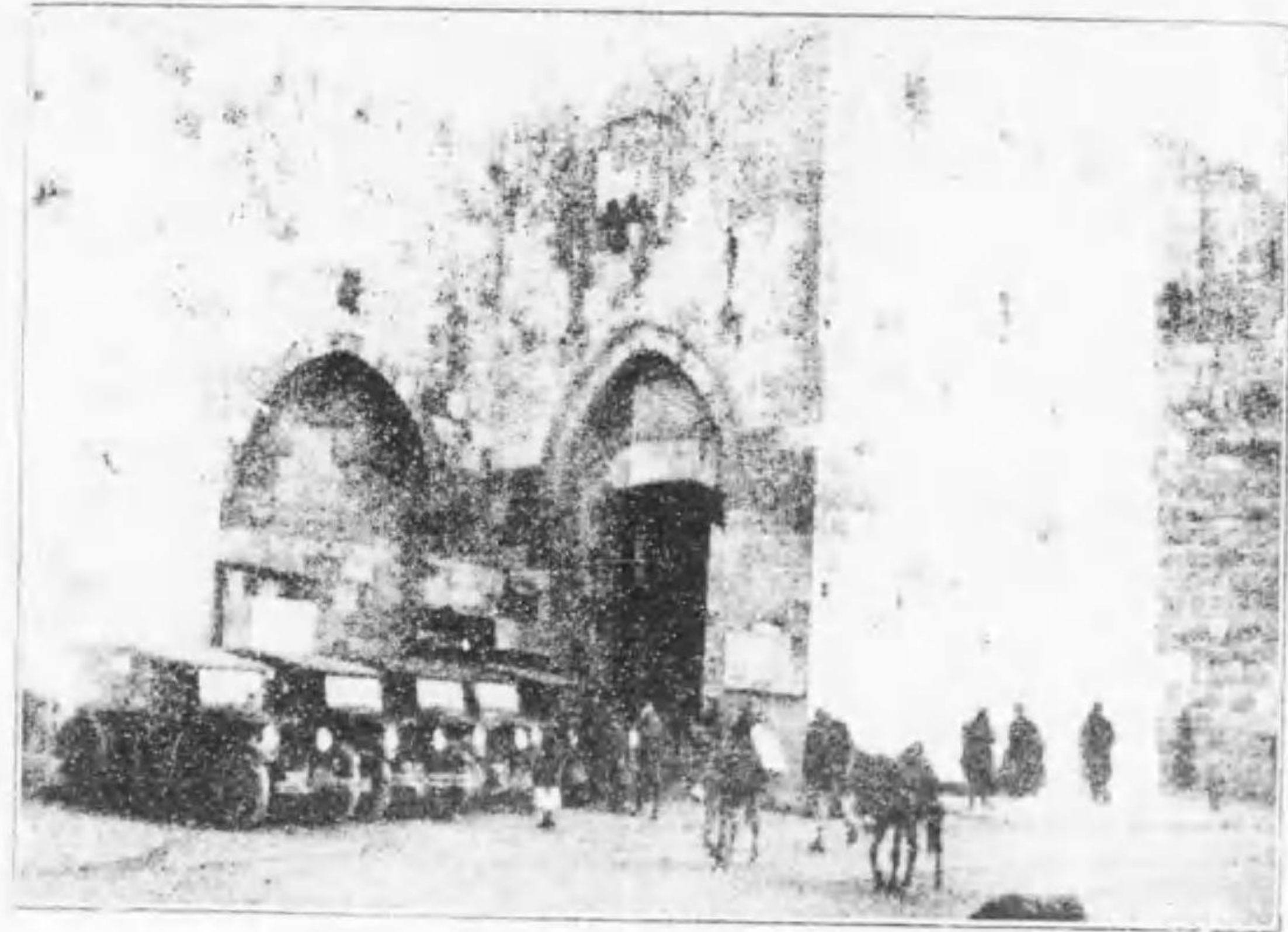
香取丸の上元餅搗き



ボートに於ける英海軍艦艇の  
威嚇あつる處

パレスチナの面影

がある。パレスチンに來る人は第一にイムシを覺える必要がある。



ガザシティの東門のミサカエの門アサト  
 處の此はアサト城入てら登る第一の門



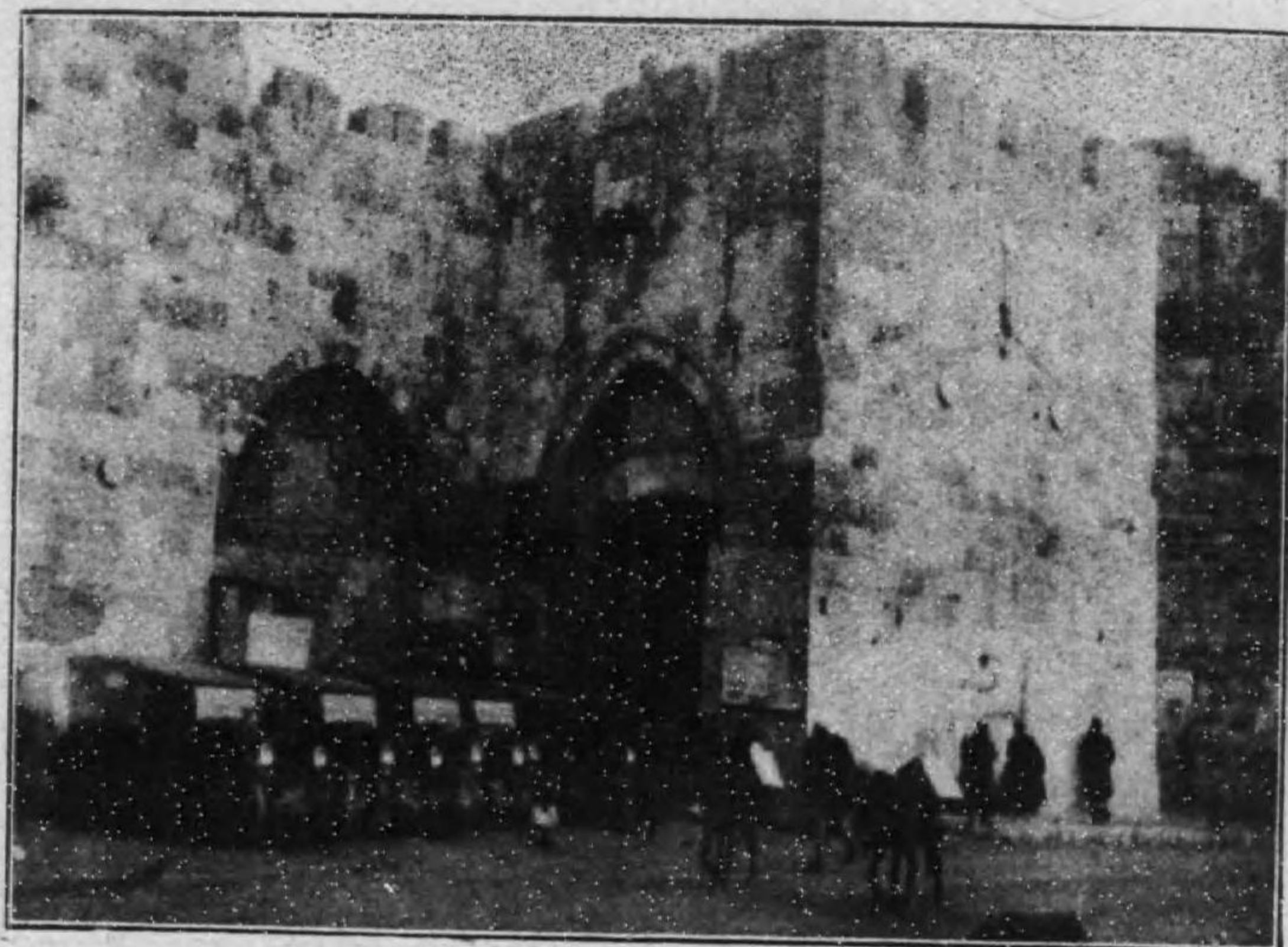
處のす行通が駝騎を街市のミサカエ

二 聖地に入る。(エルサレムの印象)

四カ  
 タ  
 ラ  
 東  
 カ  
 タ  
 ラ

夜の六時に汽車はポートサイドを出發し西カクタラで下車しスエズ運河を東に渡つて東カクタラで又汽車に乗り込んだ、此の汽車の出發迄は五時間汽車の中で待つて居るのである。丁度眞夜中に此汽車が動き出した。いよゝゝ是からパレスチナに行くのであると思ふと予が心躍るを覺えずには居られな  
 い。エホバの神がアブラハムに約束し給へる地、アブラハムが来てエホバに壇を築き信仰を以て其の一生を送つた地、イスラエルの十二の族が住んだ土地、士師、ダビデ、ソロモン等が其の勢力を振つた土地、多くの預言者を生み終りにキリスト・イエスを生んだ土地、イエスが其の一生を送り給ひ、其のバプテスマより荒野の誘を経て十字架の死を嘗め給ふ迄、普く其足跡を印し給へる地、其の復活し給へる後にも其の弟子等に顯はれ給へる地、十二の弟

聖地に入る



ガルゼイカ(喉咽のムレサルエ)門アアヤジ  
處の此はるたし城入てち毀を部一の門



處るす行通が駝駱を街市のムレサルエ

ラ四  
カカン  
タ  
ウ東  
カ  
ン  
タ

二 聖地に入る。(エルサレムの印象)

夜の六時に汽車はポートサイドを出發し西カンタラで下車しスエズ運河を東に渡つて東カンタラで又汽車に乗り込んだ、此の汽車の出發迄は五時間汽車の中で待つて居るのである。丁度真夜中に此汽車が動き出した。いよゝゝ是からパレスチナに行くのであると思ふと予が心躍るを覺えずには居られない。エホバの神がアブラハムに約束し給へる地、アブラハムが來てエホバに壇を築き信仰を以て其の一生を送つた地、イスラエルの十二の族が住んだ土地、士師、ダビデ、ソロモン等が其の勢力を振つた土地、多くの預言者を生み終りにキリスト・イエスを生んだ土地、イエスが其の一生を送り給ひ、其のバプテスマより荒野の誘を経て十字架の死を嘗め給ふ迄、普く其足跡を印し給へる地、其の復活し給へる後にも其の弟子等に顯はれ給へる地、十二の弟

聖地に入る

子並に其他の弟子等が生れ又働いた土地、此のパレスチナに今自分は入らんとして居るのである。自分乍ら夢の様な心地がする。自分の身をツネつて見れば矢張り傷い、自分は夢見て居るのでは無い事が解る。汽車は暗の中を動いて居るので外を見ても何も見えず、丁度、乗客が少いので寢臺代りに腰掛の上に横になつて朝迄安眠する事が出来た。

ガザ  
アシドド

リツダ

夜の間汽車はガザ(創世紀十〇九、ヨシユア十)アシドド(ヨシユア十一〇廿二、イザヤ廿一)アシケロン(士師記一〇一八、セバニヤ)等の聖書で馴染みのある土地を過ぎてしまひ、早朝リツダについた。茲でエルサレム行き(ヨシユア十一〇廿二、イザヤ廿一)の汽車はガザ(創世紀十〇九、ヨシユア十)アシドド(ヨシユア十一〇廿二、イザヤ廿一)アシケロン(士師記一〇一八、セバニヤ)等の聖書で馴染みのある土地を過ぎた。リツダ迄の汽車は歐洲大戦の際英國が布設したのだそうである。歐洲戦争で佛國が自分の國を守る事の爲めに死にももの狂ひになつて居る間に、英國はあちらこちらに手を出して世界中の殖民地を皆其手中に收めてしまつた。茲でも英國は土耳其の勢力を驅逐して目下はパレスチナは英國の委任統

不毛の山

治國となつて居るのである。是も英國が外交上に狡猾で伶俐である事(例)である。兎に角英國の御蔭か戦争の御蔭かで汽車でパレスチナに入る事が出来る様になり、時と金の少い予は少からず便宜を受けて居るのは事實である。リツダからエルサレムに行く汽車は土耳其領時代からの汽車で戦争後に英國は之を廣軌に換えたのである。リツダには初代基督者の團體が存在した事はベテロがアイネアの中風を醫した事の記事を見ても明かである(徒九〇三五)。ポンヤリと其の當時の事を考へて居る間にエルサレム行きの列車は又動き出した。

汽車の窓から左右の野山を眺めて第一に誰しも感ずる事は木が殆んど無いと云ふ事である。村落やコロニーのある處には草木が繁つて居る處が無いでも無いけれども、大體に於て、山は石灰石の様な石が大小となく表面に露出して居り、土壤は殆んど見る事すら出来ない様な有様である。是が「乳と密

藪地に入る

のしたる地」で有ろうかと云ふ疑が當然に起つて來るのである。かゝる落葉たる景色を見なければならぬ一理由は丁度冬であつて青草すら見ること出來ないからでもある。併しアブラハムの時代には少くとも今の有様よりはよかつたのでは無いかと思はれる。イエスの御在世の頃もかゝる有様で有つた様には思はれない。恐らく回々教徒が聖地を占領し支配する様になつてから、かく荒廢に歸したのである。彼等は沙漠の住民で有つた。故に樹木の無い處に生活する事に慣れて居る。其結果パレスチナの樹木を皆採伐して之を燃料等に用ゐ盡して後、之に代る可き植栽をしなかつた結果、此の有様になつたのでは無からうか。英國人が上海や香港に來、獨逸人が青島に來、露國人が大連に來れば皆其の本國の様な立派な市街を造營する。反對に支那人が外國に行き、日本人が布哇に行けば其處に支那流の汚い支那街や、日本式の木造家屋を造つて浴衣に駒下駄で歩く様になる。之と全じ様にアラ

ビヤ人がパレスチナを占領してから、此の土地を沙漠の様にしてしまつたのであろう。樹木が無くなれば雨毎に土壤が洗ひ去られて石が露出するのは自然である。又樹木が無くなれば雨が少くなり土地が益々瘦せて行く事も自然である。かくしてパレスチナの南部は曠野となつて居るのでは無からうか。又一方エダヤ人の先祖アブラハムは東方沙漠多き地方から移住して來た。又モーゼに引率されてアラビヤの沙漠を通つて來たイスラエル人は四十年の間沙漠の生活を経験して來た。夫故に此のパレスチナが今日より稍優つて居る状態に在つたならば、是を見て「乳と蜜のしたる地」と認る事もあるであらう。夫故にパレスチナの南部が事實上乳と蜜の流るる樂園で有つたのか、又は辛うじて樹木も茂り五穀も産する程度の地であるに過ぎなかつたのかは容易に決定する事が出來ないであらう。兎に角汽車の窓より兩側の野山を眺めて其の全然荒蕪たる土地であるのに少からず驚かされた。

汽車はエルラムレーを通過した、此の地には傳説によればアリマタヤのヨセフの家があつたと云ふ事である。(馬太廿七〇) 汽車は更にエクロン(約五二一、五〇一、四五四、四六)ゲゼル(約五一六〇十、其他参照)等の近くを通りサムソンの寵妓(土師記一〇一八等)ペリシテ人が神の櫃を恐れてエクロンより移したと云ふベテシメシの遺跡(サムエル前書六章)等を通過しタビデヤソロモンに縁故のある村や谷の跡と稱せらるゝ土地を経て汽車はエルサレムについた。

エルサレム——凡の基督者に取つて特に親しみのある響を持つて居るエルサレムは是だつたのかと自分で問ひ自分で答へつゝしばらく之を眺めた。エルサレムの第一の印象は代楮色の町である。と云ふ事である。町の周囲を繞つて居る城壁、家の壁や屋根、土地の色、皆薄赤色に近い色彩を呈して居る。そして樹木は極めて少く英國に見る様な芝草などは全然之を見る事が出来な

い、従つて市全體としては極めて赤い色彩を呈して居る。倫敦、巴里、柏林、の様では無い、勿論東京や紐育の様でも無い、羅馬やヴェニスの様でも無い。世界の他の凡ての市邑と全然趣を異にして見えるのが此上も無くうれしかつた。飽かず眺めて居る中にエルサレムは恰も屢氣樓の中にあらはれた町の様な感じがして來た。現實の世界から全然懸け離れた一の物語の町として予の眼前に顯はれて居るのを覺えた。

如何なる點から考へてもエルサレムは、世界中最も不思議な邑の一つである。殊に其の歴史を考へて見るならば恐らく斯程に多くの變遷を嘗めて居る邑は他に是を見る事が出来ないであろう。西曆紀元前千四百年代にエルサレムは既にパレスチナに於ける主要の都市の一つで有つた。エルサレムはダビデ王の時にユダとイスラエル國の首府となり、之をダビデの邑と稱し、其の子ソロモン王の時になつて茲に壯麗なる宮殿と神殿とを造營した。是れ紀

元前九百年代より八百年代に至る迄の出来事である。「ソロモンの榮華の極みの時にだに其の裝此の花の一つに如かざりき」と云ひ給ひしイエスの語は、此の時代のエルサレムの榮華を示して餘ある。其後此の邑は、或はエジプト王に降り、或はアラビヤ人に掠奪され、或は地震の爲めに破壊され、或はアッシリヤ人に攻められて之に貢を拂ふに至つた。其後バビロンの王ネブカデネザルは遂にエルサレムを攻略して其の寺院の金銀財寶を掠奪し、ジエホヤキン王以下八千人のユダヤ人を捕虜として連れ歸つた。其後殘餘のユダヤ人が頑固に抵抗した爲めにネブカデネザルは遂に全市を攻め落しソロモンの寺院を破壊してしまつた。(紀元前)其後五十年を経てペルシャのクロス王によりユダヤ人はエルサレムに歸る事を許され、ネヘミヤの力によつて邑の城壁を修繕した。而も其後紀元前四世紀にはアレキサンダーに降り又ブトレミートの手中に歸し二世紀にはアンチオクスエビファネスが此の邑と寺院とを掠奪

した。紀元前三十七年にヘロデがローマ人の援を得て王となり、エルサレムを羅馬式の都市にした。其後ユダヤ人がローマの支配に強く反抗した爲めに、紀元七十年に遂にローマ軍の手中に歸し遂にエルサレムは全く焼かれて灰燼に歸してしまつた。其後基督教が羅馬帝國の國教となると共に、エルサレムは多くの巡禮の訪問地となり、多くの寺院が設立せられ、半猶太的半基督教の邑と化した。然るに第七世紀の始めに至つてエルサレムは引續きベルシヤ人及回々教徒によつて占領せられ、十一世紀より十三世紀に亘つて此の邑は十字軍と回々教徒其他との争奪の中心地となり、十六世紀には此の邑は遂に土耳其の領に歸して歐洲大戰以前に及んで居る。土耳其は獨逸の傀儡であつた。従つて英國は印度及亞細亞に對する政策上パレスチナに勢力を有する事が非常な必要で有つた。夫故に大戰の勃發と共に軍隊を茲に送り、遂にパレスチナを占領しエルサレムをも其の治下に置くに至つて居る。



何故此の邑が三千餘年に亘つてかくも激しく又屢々争奪の中心となつたのであろうか。是れエルサレムが重要な邑であるからである。即ち此邑はパレスチナの中心であり、パレスチナを支配せんとする者は是非とも此の邑を領有するの必要があり、此の邑に寄つて全パレスチナを左右する事が出来るからである。交通の點よりすると東北のダマスコ、西北のハイファ、西方のジャファ(ヨツバ)、南のヘブロン東のトランスヨルダニア地方からの道路が集まつて来る中心であり、海拔二千五百尺の高地に位して天下を睥睨し得る形勝の地位を占めて居る。而のみならずバビロン、アッシリヤ、エジプト、ギリシヤ、ローマ等の諸文明國が其の周圍に築えて居つた時にはパレスチナは其の中心地であり、各種文明の影響を受け得る地位にあるのみならず、各強國が此の地に勢力を有する事によつて他の強國を制する事が出来たのである。是がパレスチナ及其の中心のエルサレムをして常に争奪の目的地、兵燹

の巷と化してしまつた所以である。而してパレスチナの重要な地置を占むる事は今後と雖も變りは無く益々其の重要な度を増しつゝある事を感じるのである。

乍併 屢氣樓の様目の前に浮び出て居るエルサレムの趣味は單にそれだけでは無い、茲でキリスト・イエスが十字架に懸けられ又復活し給へる事實が、エルサレムをして其の歴史的地理的の凡ての特徴以上に實に永久の邑として無限の價値あらしむる所以である。基督者に取つては其の救主神の獨子キリスト、基督者以外の人に取つても世界最大の偉人の一人なるイエス、彼茲に人類の罪を負ふて十字架にかゝり給ふた。其の血は爾來幾千萬の靈を悔改めしめ之を洗ひ潔めて今日に及び、其の靈は今尚我等の中に働いて我等を導いて居る。エルサレムの政治的權力は甲より乙へ乙より丙へと轉々するであらう。乍併 靈界の王イエスの支配權は昨日も今日も永遠も變る事

無く我等の靈を支配し、將來も永遠に人類の靈を支配するであろう。此の神の獨子イエスの足跡を印し、其の十字架を見、其の屍を埋め其の復活を仰ぎ見たエルサレムは福である。

此のエルサレムに今自分は着いたのである。停車場から馬車でダマスコ門まで行き、それからエルサレムの邑に入つた。邑の中は車が通る事が出来ない。それは一は道が非常に狭いのと、一は至る處急勾配で階段になつて居るからである。道路は極めて狭く、荷をつけた駱駝が一疋通る時には道が一杯になつてしまふ程である。道路は煉瓦大の白い石で舗きつめてあるけれども、凸凹多く、雨後には非常に不汚になつてしまふ。兩側の家は古く小さく汚なく殆んど支那街を思ひ出す程である。店舗は道路に向つて開放してあり。商品も不體裁に羅列してある。日本の田舎の農村の店舗とあまり大したちがひを認める事が出来ない。道路の上は往々兩側の家を連結する建築物で掩は

れて居り、街路と云つても恰もトンネルの中を通る様な箇所も澤山にある。此の中に動いて居る人間は大體皆汚い着物を着て居り服装は極めて種々雑多である。男には土耳其帽を被つて洋服の汚いのを着た者が可なり多く、其他白布で頭を被ひ其上に毛の繩で造つた輪を二つ戴いて居るのも澤山に居る。是等は皆永に着物を着て居り、時には打掛けの様なものを引掛けて居る者もある。是等は大抵アラビヤ人種である。女の方にも普通の洋服を着て居る者、上から下まで皆眞黒な衣服を着黒布を頭から被つて顔を全體隠して居る者、額から鼻及口へかけて澤山の金貨や銀貨を珠數つなぎにしてぶら下げて居る者、赤や青の種々の色のパレスチナ特有の衣服を着て居る者、又聖母マリアの様に青い布を頭から被つて居る者等を見受ける。清潔な着物を着て居る者はあまり多く見當らない。

かゝる街路とかゝる群集の中を縫つて歩く事數分にして町の中央に近い獨

聖地に入る

逸人經營の小ホテルについた。其主人は八歳の時からパレスチナに住み今は七十四歳だと云つて居る。獨逸語はやはり忘れないと見えて自由に話して居る。歐洲戦争の際英軍に捕虜となつてエジプトに送られたとの事である、八十幾歳かになり、もう耄祿した婆さんも其の捕虜の中にあつたそうである。其の婆さんは氣が狂つたのか耄祿したのか「自分はハイファに行くハイファに行く」と云つてさけびつゞけ、途中人が氣がつかない中に汽車から下りて砂漠の中に迷ひ出し商隊に助けられてハイファに送られ、其處から又エジプトに捕虜になつて行つたそうである。英軍の殘酷な例としてこんな事を述懐談として話して居つた。

直に宿を出て地圖をたよりにエルサレム城内の市街を歩き始めた。見る物皆新奇であり二千年前と少しも變らない様な生活状態を示して居る。中に近代歐洲式の店舗や人間も居るけれども大體に於て最も原始的な生活を送つて

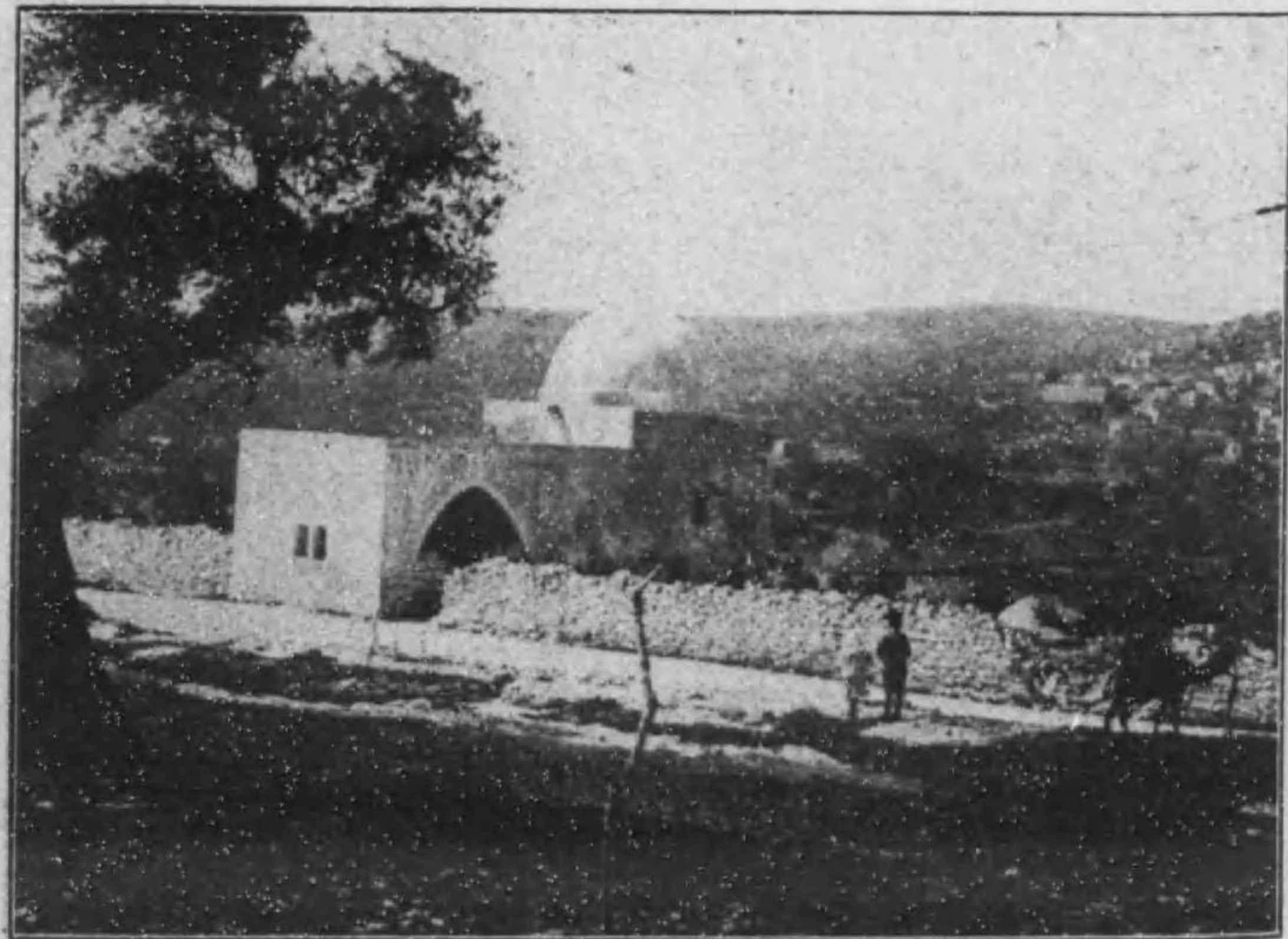
居るものと云ふ事が出来る。そろ／＼歩いて居る間に澤山の案内人がやつて来てエルサレムの案内をしてやると申出で何處迄もついて来るので五月蠅い事限り無い。夫故其中の小供一人を撰んで午後二時から驢馬に乗つてベツレヘムに行く事にきめた。

三 ベツレヘムと其附近

ジャファア門から驢馬二頭を仕立て予と案内の小僧とが之に騎つてエルサレムを出かけた。此邊では驢馬を澤山に用ゐて居る、乗用のみならず荷物の運搬にも澤山に使用する。普通の馬は極めて少い。恐らく道路の關係上小さい驢馬の方が便利であり、又は氣の荒くないノソノソとした駱駝の方が普通の馬より危険が無いからであろう。普通の馬は多く市外の辻待の馬車にのみ用ゐられて居る。マリアがヨセフと共にベツレヘムの方に旅立ちした時も、三人の博士が東方から星をたよりに來た時も矢張り此の様な驢馬に乗つた事であらう。イエスが最後にエルサレムに入り給ひし時も此の様な驢馬に乗られたのであらう。パレスチナと驢馬とは離れる事が出来ない歴史的聯想を持つて居る。



之てし出見な星が士博の方東、戸井の士博  
所場るあ説傳のさ處たれッ導に



ムレサルエくじ全と戸井の士博、墓のレケラ  
りあに上途のムヘレツベリよ

博士の井

但し驢馬に騎つた格好はあまり立派なものではない、馬に騎つた姿とは雲泥の差がある。殊に小さい驢馬に大きい人が騎つて居るのを見ると其人の足は將に地に觸れんばかりになつて居り、唯の人が歩いて居るのか人を乗せた驢馬が歩いて居るのか分らない様な事もある。

一月はバレスチナ旅行に取つて最も悪い時であるに關らず折良く空も晴れて四方の眺望を悉にする事が出来た。殊に左方にはヨルダンの谷を越して彼方のモアブの連山が手に取る如くに見える、右方には比較的耕作の行き届いた野原が広がって居る。途中に二つの井戸がある其の一つは東方の學者がヘロデに逢つてからベツレヘムに向ふ途中に、此の井戸の傍で星を見つけたと云ふ傳説のある處、他の一つはヨセフとマリアが休んで水を飲んだと云ふ傳説のある處である。井戸と云つても日本の井戸の様な井戸では無く大きい洞穴の様なもので、それに水がたゞえて居る一種の泉で、其土を適宜に石で圍

ベツレヘムと其附近



を名の此來年千數、景全の町のムヘレツベ  
く高名てしと邑のデビダ邑のツルリ居ち保  
りな名有てしと地生誕のスイ主に殊



いまの昔く如す示の圖の此、部一の寺生誕  
す得なところむ認め之然全は影面の

つて汲取る事が出来る様にして居るのである。大體パレスチナには水が少い夫故にかゝる泉は殆んど有史以前から存在したものであり得るのみならず、イエスの一家族がかゝる泉から水を飲んだと云ふ事も決して不可能でなく事最も必然の事であろう。

ラケルの墓

ベツレヘムに近い處、途の右側の野原の中に獨り淋しくラケルの墓がある。其形は圓形の屋根に方形の壁で丁度回々教の寺院によく似て居る（創世紀三五〇〇ニエレミヤ三一）馬太傳にヘロデがベツレヘムにある二歳以下の小兒を虐殺した記事を記す場合に、馬太がエレミヤの言葉を引用して「歎き悲み甚く憂ふる聲ラマに聞ゆ、ラケルその兒子を歎き其兒子の無きによりて慰めを得ずと云ひしに應へり」と云つて居るのは強て舊約の文章を引用して無關係なものに關係をつけたのではなく、實際此の邊の地理を知りベツレヘムの近くにあるラケルの墓を知つて居る人に取つては、ヘロデの殺戮によつて悲しんで居る

ベツレヘム

多くの母の泣き聲が此のラケルの墓迄達しラケルは是等の兒無き母に同情して泣いたであろうと想像する事は決して困難な事柄では無い様に思はれた。

ベツレヘムはダビデの生れた土地であり（撒前十六及）モアブの娘ルツが其の姑に従つて歸つて來た美しい物語の本場であり。そして誰しも知つて居る如く救主イエス・キリストの生れ給ひし土地である。ダビデの時代より既にベツレヘム（バンの家）の名を以て稱えられて今日に至り、そして今日も尙同じ場所に存在して居る事は如何にも愉快な真に思ひ出多き事實である。併約千九百三十年前茲に此の村に孤々の聲を擧げた一人の男の子が誠に人類の救主神の獨子である事を誰が考へたろうか。村は普通の小さい村であつても異つた處が無い。兩親ヨセフとマリアとは人の目には何等異つて見えた點が無かつたらう。此の平凡な一寒村に生れ給へるイエスをキリスト神の子なりと信する事が出来るのは、血肉は我等に之を示す事が出来ず、唯天の父が我

ベツレヘムと其附近

等の靈に之を示し給ふ時のみである（馬太十六〇）。夫故に如何に歴史的に思ひ出多き此の村であるとしても之を訪ふ事によつて我等はイエスを神の子なりと信する事は出来ない。乍併イエスが神の獨子我等の教主に在し給ふ事を知つて其の孤々の聲を聴く事が出来た此の村を訪ふ時、其處に云ひ知れぬ追憶と、そして此の土地に附着した幸福とを感ぜずには居る事が出来ない。誠に「ユダヤの地ベツレヘムよ汝はユダヤの長等の中にていと小さきものならず汝の中より一人の君出で、我が民イスラエルを牧せん」と云はれた此のベツレヘムは幸福な町である。

「御使いよマリアよ懼るゝな汝は神の御前に恵を得たり」慶たし恵まるゝ者よ主なんちと共に在せり」マリア曰ひけるは「我心主を崇め我靈はわが救主なる神を喜び奉るその婢女の卑しきをも顧みたまへばなり今より後萬世の人我を福とせん……………」此の喜びと希望とを持つたマリアはヨセフに伴

はれて此の道を通り戸籍に登録せん爲めに其の故邑なるダビデの邑ベツレヘムについたのである。此の邑の住民の中誰が其の事を知つたらうか。恐らく他の小供が生れた場合と何の異つた處も無く、其の事實のある事をすら知らなかつた人が多し事であらう。唯此近郊に羊を牧つて居つた小數の牧羊者にのみ「萬民に關はりたる大なる喜の音」が傳へられ、そして彼等は此の事を邑の住民に言ひ傳へ聞く者みな之を奇んだとの事が聖書に記されてある。乍併誰が此の誕生の事實を其の本當の意味に於て解する事が出来たであらうか、エルサレム郊外の一寒村ベツレヘムに久遠のロゴスが肉體となつて顯はれ給ふ事を誰が豫期したろうか。併し乍ら神の爲し給ふ事は人の思に異つて居る。一見何等の奇なきベツレヘムが誠に救主を最初に拜するの祝福を恣にする事が出来た邑となつたのである。

イエスが生れ給ひしと云ふ場所の上には誕生寺が立つて居る其の本堂には

ベツレヘムと其附近

三つの祭壇があり一は羅馬舊教會一は希臘正教會一はアルメニヤ教會に屬して居る。かゝる宗派的争闘が世界に唯一の誕生寺にまであらはれて居る事は如何にも不快と云はなければならぬ。全じ唯一の神と唯一の救主イエスとを靈と眞とを以て拜するのに何で祭壇を要しようか。一の祭壇すら必要で無い處に其祭壇が三つも無ければならぬ理由は何處にも存在しない。多分賽銭の分配等から問題が起つてかゝる醜態を呈して居るのであらう、人類の中の最も靈的なるイエスの誕生を記念するが爲めにかゝる下劣な肉争奪と黨派的分烈の證據とを呈供する事は基督教の辱恥と云はなければならぬ。祭壇の下にはイエスが馬槽に入れて置かれたと云ふ場所がある。一の小さい洞窟であり今は小さい箱に臘製の嬰兒を入れて其の場所を示して居る。又イエスが生れ給ひし場所には大理石をしきつめ、其の中央に眞鍮の星を象眼し「茲にイエス處女マリヤより生る」とラテン語で記してある。其上に吊してある十五の

燈籠の中、六箇は希臘教會五箇はアルメニヤ教會四箇は羅馬教會に屬して居る。其他此の誕生寺の中に、東方の博士がイエスを拜した場所、ヘロデに殺された小供を祭つて居る祭壇、夢の中に埃及に下る様にヨセフに告げられた記念の場所、教父聖ユウゼビウス（教會史の元祖）の墓、聖ジエロームが聖書のラテン譯（ヴァルガタ）を草した室等がある。此の寺院は最も古い建物の一つであり、其一部分は今も尙原形の儘に存在して居るので、此の方面から見ても充分に興味があるものに相異ないけれども、之は建築學者や美術家に讓るとして予の感想としてはかゝる大袈裟な寺院を見る事は其の當時を追懐する材料としてはあまりに懸け離れて居る事を感じずには居られなかつた。若し其の當時のまゝの茅屋が其の通りに残つて居つたならば如何に感慨が深い事であらう。場所其自身は實際イエスの生れ給へる場所であるかも知れない、乍併其の外観が全然一變して居り堂々たる伽藍が建てられ、燈籠や燈



明で一杯になつて居るのを見ては、其の當時を追憶するのに非常な困難を覺えざるを得ない。何を好んでかゝる愚な事をしたのであろうか。勿論それは四世紀以後の基督者が其の信心から爲した仕業であらう。併し如何にも遺憾である事を感ぜざるを得ない。

併し翻て考へて見ると、若しかゝる建物が無かつたならば二千年に亘る歴史の變遷の爲めに或はかゝる故跡は全然消滅してしまつたかも知れない。羅馬人や土耳其人はイエスの誕生について格別の趣味も無いであらう。此の邑がかゝる人々の手に歸した時に若しかゝる建物が無かつた場合には、恐らくイエスの誕生の場所は跡方だになくなつたであらう。それを思ふとかゝる寺院が存在したと云ふ事もあながち之を責める譯には行かない事を覺つた。單に此の誕生寺のみならず、エルサレム其他パレスチナ全體を通じて、聖書に因みのある場所には必ず教會堂か又は僧院が立つて居る。其の本來の姿を破壊

した點に於て是等は非常に不愉快を與へるけれども、其の歴史的の遺跡を示す標札の代りとして存在した點に於て其の功を認むべきであらう。

誕生寺の近くに「乳窟」と云ふのがある。矢張り一の寺院になつて居る。聖家族が一時茲に隠れて居つた時に、マリアの乳の一滴が茲に落ちた處であると云ふ、そして乳に困難して居る婦人が茲に參詣すれば乳が出る様になるとの事である。乳色の砂を少し紙につんで恰も佛寺のオマジナイや御護符の様にして人々に與へて居る。此の種の迷信が澤山舊教の寺院や聖地に附着して居る事はおどろく可き程であり。一々之を擧げたならば非常な數に達するであらう。中には稍事實らしく見えるものもあるけれども、中には又非常に荒唐無稽なものもある。現に誕生寺の中に小さい泉(井戸)があり其の石の蓋に小さい穴があいて居る。ヨセフ、マリヤの一家が此の水を飲んだと云ふ傳説迄は之を信じ得るであらうけれども傳説は更に之に是をかけ東方の博士

を導いた星が此の井戸の中に落ちてマリヤだけにしか見えなかつたなど云ふ傳説も傳はつて居る。新教が起つて舊教から凡て是等の傳説を除き去つた事は偉大なる改革であり基督教を其の外來の不純分子より潔めたものと云はなければならぬ。乍併是等の傳説は強い信仰の結果として起つた雜分子であり、此中に美はしい詩的、宗教的分子を含んで居る事を否む事が出来ない。我等は是等美はしい傳説を詩的に考へ且つ其の背後に潜んで居る信仰を見る可きであらう。

ベツレヘムの近くに「牧羊者の野」と云ふのがある。茲で牧羊者が天の使より「萬民に關する喜しき言」を言したのである。福音は自ら智ありとする學者や、自ら略ありとする政治家や、自ら徳ありとするバリサイ人には示されず常に心の單純な偽らざる嬰兒の如き人にのみ示さるゝ事は歴史の示す事實であり、又キリスト自ら之を教へて居る。我等も亦此の牧羊者の野に羊を

牧羊者の野

牧羊者となり度い。永いガウンの如きものを肩よりかけ、頭に小さい布を巻きつけ長き杖を持つて徐々として羊の群を導いて歩いて居る牧羊者を見る時、我等は其の羊に對する愛と羊が彼に對する信頼とを羨ましく思ふと共に、其の單純なる心が神の嘉し給ふ處であり、天使の聲を聞き分くるに最も適した靈魂である事を思はされる。此の牧羊者の野に天使が顯はれて其の天來の響を傳へた時の事を追懐する時、其の光景が美はしい詩となり繪となつて我等の心に響き我等の眼前に浮び出づるのを覺えずには居られない。

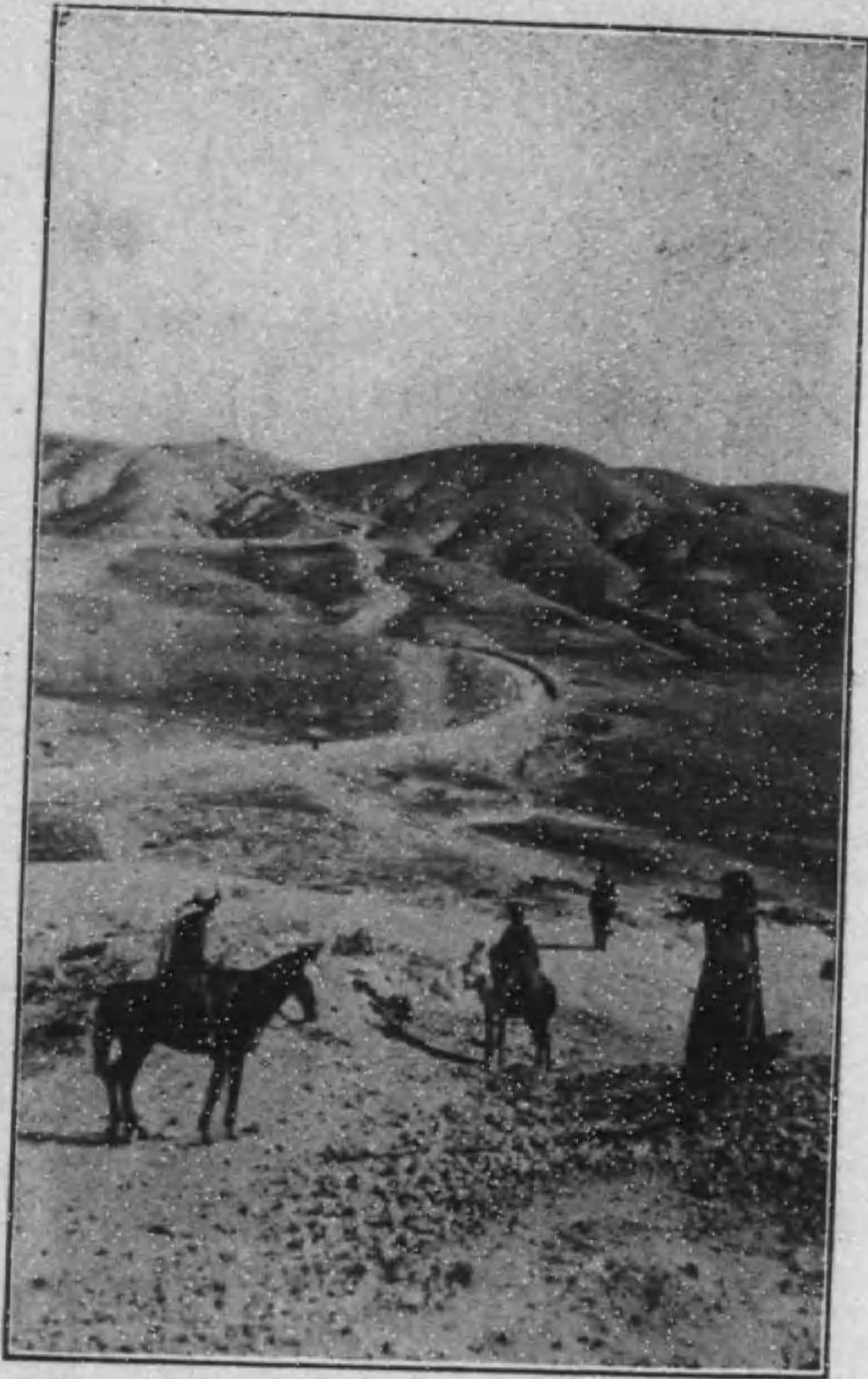
歸途に一寸エハガキ記念品等を販賣する小い店に立ち寄つた。具細工の十字架等を澤山に賣つて居る。其主人が日本の具細工屋と取引したいが名前を知らないかと云つて尋ねて居つた。他日日本の具細工がベツレヘムの土産になつて又日本に持ち歸るる様な滑稽も起る事であらう。かくしてベツレヘムの訪問を終えて夕刻エルサレムに歸つた。夢幻の世界

パレスチナの面影  
を彷彿した様な心持である。

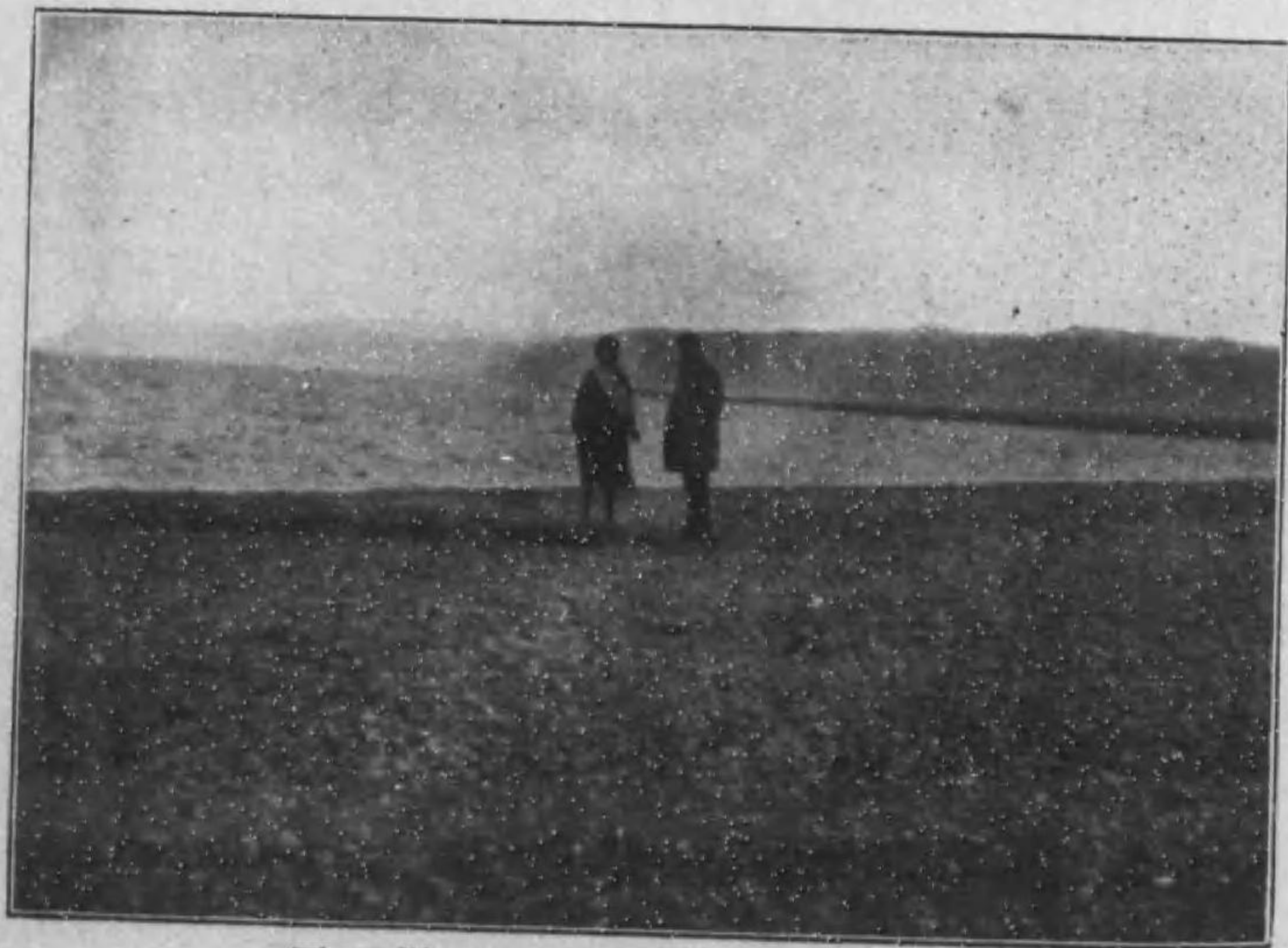
パレスチナは、地中海の東岸に位置する、歴史的に重要な地域である。この地域は、古くから文明の交差点として知られており、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地として尊ばれる。その地形は多岐にわたり、肥沃な平原、険しい山地、そして乾燥した砂漠地帯が存在する。この多様な地形は、その歴史と文化に深く影響を与えている。

パレスチナの歴史は、古くから人類の足跡が刻まれている。その土地は、さまざまな帝国と文化の支配を受けた。現代のパレスチナ問題は、この長い歴史の結核として、国際社会の注目を集めている。この地域の人々は、自らの土地と文化を守りたいという強い意志を持っている。

パレスチナの風景は、その独特の美しさを放っている。その土地は、自然の恵みを受け、豊かな文化を育んできた。その土地の風景は、人々の心を癒し、希望を与える。パレスチナの未来は、平和と発展を望む人々の手で描かれる。



エルサレムよりエリコに到る道(ルカ傳十章参照)山の姿はパレスチナの何處も略此の類なり。



下以面海處るせ見望りよ端北の其な海死  
尺十九百二千



ヨルダン川、兩岸に樹木あざ少く  
川岸距離全部砂地なり

四 ヨルダン行き（死海、エリコ、ベタニア、善きサマリヤ人の旅舎。）

四日の早朝エルサレムの西北隅にある新門より自動車でヨルダンに向ふ。自動車でバレスチナの旅行をする事は興味を大部分を殺ぐ事であり、出来るだけ之を避けたいと思つて居るのである。けれども時間の関係や金銭の関係や距離の関係上餘儀なくせられる場合がある。今日も其の例の一である。同行は二人の米國人で其の一人はベルシヤの宣教師である。自動車はエルサレムの外壁を廻りヨサバタの谷（キドロンの谷）を下つてゲツセマネの園の側を過ぎ、橄欖山の南側を登りつめ、是より下り一方の坂道を下つて行く。そして此道には可なりの急勾配の箇所もある。マリヤとマルタの住んだベタニアの村の側を過ぎ、其の見物は歸路に譲り、それより善きサマリヤ人の譬にある旅舎であると稱せられて居る小屋の側を通つて自動車は走りつゞけ

ヨルダン行き

死海

パレスチナの面影  
て居る。双方の山は全然樹木が無い秃山で、見渡した處少しも美はしくは無い。春になると種々の草が生えて花が咲き非常にパレスチナが美しくなると云ふ事である、けれども今は丁度冬の最中である爲めに氣候は左程寒く無いに關らず殆んど草らしい草すら無く落漠たる光景である。途中に標札があつて地中海の水平線を示して居り、是より自動車は水平線以下に進んで行きつゝあるのである。エルサレムは海拔二千五百尺以上であり殊に冬である爲めに割合に寒い風が吹いて居つた。然るに自動車が水平線以下に下ると共に、生ぬるい風が頬を打つ様になり、茲に著しい氣候の變化を感受する事が出来た。走る事一時間餘にして自動車は死海の岸についた。死海は海面以下千二百九十尺、世界中最低の水面である。長さ四十七哩、幅は最も廣い處十哩、深さは最大千三百十尺であると案内書に記されてある。水は極めて強い鹽分を含み魚類は生息する事が出来ない。唯小さい宿借り様の貝類の殻が岸に

ヨルダンの谷

モアブ

ネボ山

澤山に落ちて居るのを見た。かゝる種類の動物は生存する事が出来るらしい。  
今予は此の死海の岸即ち世界中最低の陸地のの上に立つて四方を眺めて居る。北チベリアスの湖から此の死海に至る迄約六十哩の間は大きいヨルダンの谷である。そして有名なヨルダン川は略一直線に此の谷間を流れて死海に注いで居る。東はモアブの一聯山が殆んど高低のない高原の如くに聳え立ち西はパレスチナの山々が高低をなして連つて居る。モアブの山々の中に一つの稍小高い峯が見えて居る。是れネボ山であつて、モーゼが四十年間アラビヤの沙漠の中にイスラエルを導いた後に達したのは此の山である。  
「斯てモーゼモアブの平野よりネボ山に登り、エリコに對するピスガの嶺にいたりければ、エホバ之にギレアデの全地をダンまで示し、ナフタリの全部エフライムとマナセの地及びユダの全地を西の海まで示し、南の地と

ヨルダン行き

棕櫚の邑なるエリコの谷の原をゾアルまで示し給へり。而してエホバ彼に言ひ給ひけるは、我がアブラハム、イサク、ヤコブにむかひ之を汝の子孫にあたへんと言ひて誓ひたりし地は是なり。我汝をして之を汝の目に観る事を得せしむ然れど汝は彼處に渡りゆく事を得ず」と。

かくしてモーゼの四十年の努力は唯希望の地、約束の國を見たゞけて終りとなり、モーゼは茲に死んで葬られたのである。(申命記三四〇一以下)

又此の死海の北端、予の立つて居る處に極めて近くエリコの邑が見えて居る。今見えて居るエリコは新しい邑であり。古いエリコの邑は其の少しく北に當り目下發掘せられて居る。我等は是から其の地を訪はんとして居るのである。其の西方に高い峯が一つ聳えて居る。傳説によれば是がイエスがサタンに導かれて登り世界の諸國を示された山だと云ふ事になつて居る(馬太)。遙か北にヨルダンの谷の終る處にヘルモンの高峯(約九千尺)が白雪をいたゞい

エリコ

ヘルモン

て聳えて居るのが見える。天氣の關係上死海からヘルモン山を望む事が出来るのは極めて稀であり我等は此の好運に際會したのである。

ヨルダン川

此ヨルダンの谷は一面に砂地であり小さい高低があるのみで殆んど道らしい道もなく半熱帯植物が處々に生えて居り、駱駝や馬や羊が野畜ひにされて居るのを見るのである。我等は再び自動車に入りヨルダンの川岸に行つた。ヨルダン川の水、ヨハネがバプテスマを施した水、又イエスがバプテスマを受けられた水、寫眞では迄度々見て居つたヨルダンの水が今自分の目の前に流れて居る。暫く瞑目して其の當時を回想した。「イエス・バプテスマを受けて水より上れるとき、天忽ち之が爲めにひらけ神の靈鳩の如く降りて其上に止るを見る。又天より聲あつて此は我心に適ふわが愛子なりと云へり」(馬太十六・七)南北六十哩、東西十哩に亘るヨダンの谷、天廣く開け地は一面の曠野である此のヨルダンの谷、天開け神の靈が鳩の如く下るのには是に優つて適

ヨルダン行き

當なる場所を他に考へる事が出来ない。此のヨルダンの谷の真中に立ちヨルダン川の岸邊に在つて其の當時の光景を追想した時には恰も此の鳩の如くに下れる靈の光が世界の隅々にまで輝き、天より響く神の聲が世界の涯にまで及びそうな心持がした。そしてこれが事實となつて來て居るのである。

ヨルダンの水は定めし鏡の如く、水晶の如くに清淨でありそうに想像して居つた。然るに豫期と異りそれが可なりの濁水であるのには少からず失望した。地質の關係上是が當然なのであらう。兩岸には柳の様な樹が茂つて居る。水の流れは急では無い。海面以下六百八十二尺のチベリアス湖(ガリラヤ湖)より流れ出で、約六百尺流下して死海に注ぐのである。川としては小さい。取るに足らない流れである。而もイエスのパプテスマによつて此の川の名は永遠に人類によつて記憶せらるゝであらう。

自動車は更に方向を變じて走つて行く。其の音におどろかされて二三の狐

が走つて己が穴に逃げて行くのを見た。「狐は穴あり」と云はれしイエスは度々是等を見て居られ自然に口の上つて來たのであらうと思ふ。暫くして新エリコに至り茲にアラブ人の生活状態を一見し名産のオレンヂを味つて更に舊エリコの發掘跡に着いた。此處は獨逸碩學ゼラン氏の監督の下に發掘せられ舊エリコ城外壁の一部が發見せられたのである。

モーセはモアブの地に死し、ヨシユア彼に代つてイスラエルを率ゐた。そしてヨルダンを渡つてエリコに攻入つたのである。神の櫃がヨルダンを渡る時に、ヨルダンの水が途中から流れずに止まつて居つてイスラエルを渡した事、エリコの遊女ラハブが信仰によつてイスラエルの間者を救ひ、そしてエリコの滅亡から免れた事、イスラエルの軍隊が六日間嗷吠を吹いてエリコの邑の外郭を回り、第七日目に七回城外を回つた時其の城郭崩れてエリコの邑が陥つた事等は舊約聖書約書亞記に面白く記されて居る。此のイスラエル

の歴史上の最も重要な一事實が此の場所に於て行はれたのである。發掘せられた石垣の跡に家らしいものが露はれて居る。そしてラハブの家は「邑の石垣の上」にあつた事が約書亞記(二五)に記されてあるが爲めに此の場所がラハブの家に相違なく茲からラハブがイスラエルの間者を縛り下したのだと云つて喜んで居る學者もあるけれども、石垣答へず之を證明するよしも無い。乍併其の詳細は之を歴史の神秘の中に葬るとしても大體に於て此の附近に此の歴史的出來事が起つた事は確實である。茲で暫く腰を下して約書亞記を読んで見た。言々句々生きて眼前に展開して來るのを覺え、三千餘年前の歴史の出來事が今目前に展開して來るのを覺えて無限の愉快を感じた。舊エリコは山の中腹と麓との中間位にある。夫故茲からは更によく死海を見下し又ヨルダンの谷を瞰下する事が出来る。此邊は一帶の沙漠であり曠野である。イエスが四十日四十夜サタンに試みられ給ひしは此の附近である。

## 曠野の山

う。バブテスマのヨハネが野蜜と蝗とを食物とし駱駝の皮衣を着て萬民に悔改を叫んだのも此曠野であつた。後方には前述せるイエスの試誘の山がある。かくして此の一體の曠野は人類の歴史に一大時機を劃する出來事の起つた處である。イエスがバブテスマによりて聖靈に滿され、そしてサタンの試誘に勝ち給ふた此事實、是れ彼一人の私事では無い。是が人類歴史上の唯一の出來事であり人類全體に關する大事實であり彼により彼の靈の力によつてのみ人類が全じ試誘に打勝つ事が出来る事の證據となつて居るのである。此の曠野は神とサタンとの戰場であつた。そしてサタンは永久に神の前に敗れたのである。打眺めた處耶馬溪の如き奇もなければ近江八景の様な美も存在しない。而も神の靈の光が今も尙此のヨルダンの谷に充ち滿ちて居る事を感ぜずには居られなかつた。

此の沙漠の中にしては不思議にも舊エリコの前に一の泉が湧き出て、多量



の水を供して居る。此泉は二つの大きい池に一杯になつて居り是が更に溢れて流れ出し小さい流れをなして居る。此の泉はエリシヤが鹽を入れて潔めた泉であると稱して居る(列王下二二〇) 此附近には別に泉らしいものが無いのを見れば此の傳説は事實であると見る可きであらう。又山の中腹には希臘舊教の僧院がある、其處にイエスが試誘に逢ひ乍ら四十日四十夜の間居られたと云ふ洞窟があるそうであるけれども其の眞偽は素より不明であり其處を訪ふ事は見合せた。又此附近にエリヤが其水を飲んだと云ふケリテ川があると云はれて居るけれども事實相違であらうとの事である。

ヨルダンの谷の景色と歴史とを飽くばかり味つた後我等の自動車は歸路についた。途中道傍の岩角に一疋の羊が迷ひ子になつて群をはなれて居つた。半は恐怖と半は絶望とを示した顔付を以てさみしく立つて居る其姿は實に憫然其ものであるのを感じた。イエスの愛が九十九疋の柵の中の羊をすて、此

の一疋の迷へる羊を求め給ふ事の深い意味について考へざるを得なかつた。やがて善きサマリア人の譬にある旅舎についた。其の美しい物語を茲に引用しよう。

みよある教法師起てイエスを試み云ふ「師よ我永遠の生命を嗣ぐためにはなにを爲す可きや」イエス曰ひたまふ「律法に何と録したるか汝如何に讀むか、答へて曰ふ「爾心を盡し精神を盡し力を盡し思ひを盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし」。イエス曰ひ給ふ「爾の答は正し之を行へさらば生くべし」。彼おのれを義とせんとしてイエスに曰ふ「我が隣とは誰なる乎」、イエス答へて曰ひ給ふ「ある人エルサレムよりエリコに下るとき強盜に遇ひしが強盜どもその衣を剥ぎ傷を負はせ半死半生にして棄て去りぬ。或祭司たまふ「この路より下り、之を見てかなたを過ぎ行けり。又レビ人も茲に至り之を見て全しく彼方を過ぎ行けり。然るに或サマリア

の人(ユダヤ人と仲)旅して其許に來り、之を見て憫み、近よりて油と葡萄酒とを注ぎ傷をつゝみて己が畜に乗せ旅舎に携往て介抱し次の日デナリ二つを出し主人に預へて「此人を介抱せよ費もし増さば我がへり來る時に償はん」と曰へり。爾如何に意ふや、此三人の中孰が強盜に遇し者の隣となりしぞ。彼云ひけるは其人に矜恤を施したる者なり。イエス曰ひけるは「爾も往て其のごとく爲よ」。(路加十〇二)

茲にある旅舎はイエスが此の譬を語つて居る間に頭に浮んだ家であると云ふ事は事實であろう。エルサレムとエリコとの間は二日路には短か過ぎ、一日路には永過ぎる程である。昔の旅人や商人は丁度途中の此邊で一休みをし又は一泊をした事であろう。夫故に此の場所以外に旅舎がある必要も無く、又有つた筈もない。従つて此旅館がイエスの時代にも存在して居つたと云ふ事は謬ない事實であろう。かゝるサマリヤ人が事實有つたかどうかは知らな

い。併しかゝる人は如何なる世にも如何なる場所にも有つて欲しい。かゝる人は其の國籍如何を問はず敵でも味方でも何であつても眞の隣人である。

エルサレムに近い處にベタニヤの邑がある。イエスが最後にエルサレムに來り將に十字架につかんとして居らるゝ頃は何時も此のベタニヤを本據として茲に住んで居られた事、そして殊にラザロと其姉妹マルタとマリヤを愛し給ひし事は約翰傳十一章を見て之を知る事が出来る。夫故に此の地は「狐は穴あり空の鳥は巢ありされど人の子は枕する處なし」と云つて居られしイエスに取りても例外的に暖かい心持を以て生まれた場所と見る事が出来る。聖書に「イエス涙を流したまへり」とあるのは唯一箇所であり、そしてそれはラザロが死んだ當時である。以てイエスが彼の一家を愛し給へる事を知る事が出来る。イエスは溢るゝばかりの愛と無限の力とを以て此ラザロを復活せしめ、其の墓より取出したまふた。此のラザロの墓が今も尙存して居る。そ

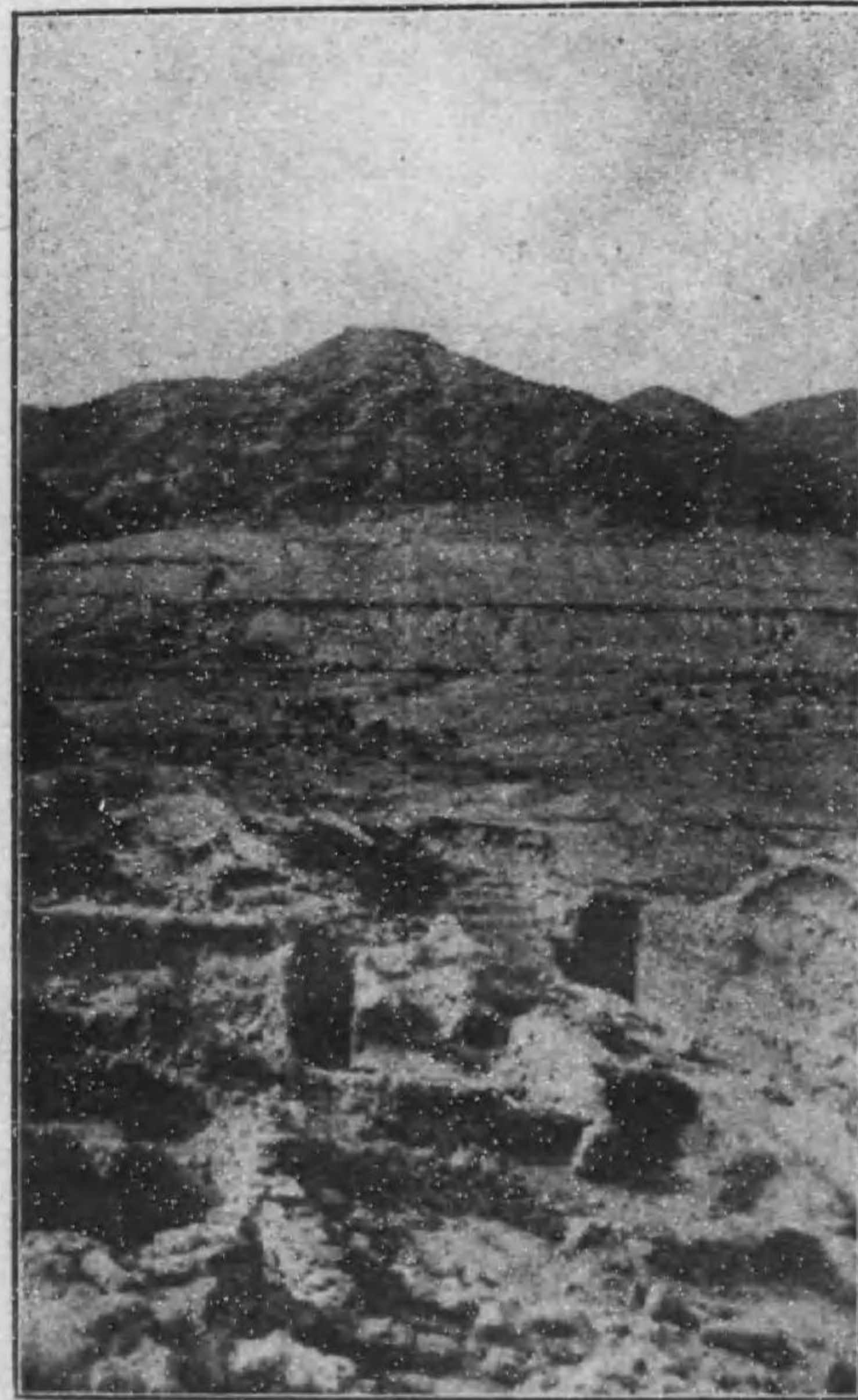
ヨルダン行き

マ●マル●タ●の●家●  
マ●マリ●ヤ●の●家●  
モ●ン●の●家●

パレスチナの面影

●れ●から●マル●タ●と●マリ●ヤ●の●家●の●跡●と●云●ふ●場●所●も●残●つ●て●居●る●。●又●癩●病●人●シ●モ●ン●の●家●も●此●の●ベ●タ●ニ●ヤ●に●あ●る●。●茲●で●マリ●ヤ●が●ナ●ル●ダ●の●香●油●を●主●の●首●に●ぬ●り●主●の●死●を●弔●つ●た●場●所●で●あ●る●。●か●ゝ●る●逸●話●を●有●す●る●ベ●タ●ニ●ヤ●は●今●は●荒●れ●た●一●寒●村●に●過●ぎ●す●。●旅●人●が●其●處●を●訪●れ●る●の●を●見●て●子●供●が●群●り●來●つ●て●金●錢●を●強●請●す●る●の●を●見●る●の●み●で●あ●る●け●れ●ど●も●、●イ●エ●ス●の●一●生●を●通●じ●て●彼●に●取●り●て●最●も●親●し●み●あ●る●邑●と●し●て●之●を●見●る●時●は●、●我●等●に●取●つ●て●も●此●の●邑●は●何●と●は●な●し●に●暖●か●い●心●地●が●し●て●來●る●の●を●覺●え●、●今●に●も●マリ●ヤ●や●マル●タ●が●出●て●來●て●旅●人●な●る●我●等●を●歡●迎●し●て●く●れ●そ●う●な●心●持●が●し●た●。●至●る●處●に●バ●リ●サ●イ●人●や●サ●ド●カ●イ●人●に●排●斥●せ●ら●れ●追●害●せ●ら●れ●し●イ●エ●ス●の●唯●一●の●休●息●所●な●り●し●此●の●邑●は●眞●に●幸●運●な●る●邑●で●あ●つ●た●。●マ●リ●ヤ●の●名●が●人●類●歴●史●の●存●在●す●る●限●り●傳●へ●ら●る●と●同●じ●く●ベ●タ●ニ●ヤ●の●邑●の●名●も●永●遠●に●消●滅●す●る●事●な●し●に●傳●へ●ら●る●と●あ●ろ●う●。

一見し終つて我等の自動車は再びエルサレムに來た。午後基督教青年會の



記アユシヨ) 跡掘發のコレエ舊は面前  
と山の誘試のスエイは山の方後(照參  
のいゝるらせ稱

禮拜祈禱會に出席した、考古學學校のオルブライト氏に逢はん事も其の目的の一つであつた。此の禮拜に於てアラビヤ語やヘブル語で祈禱するのを聞く事が出来てうれしかつた。意味が分らなくとも誠の心を以て祈禱する聲をきけば、それだけで我々の心は動かされる。之に反し意味が解る言葉で祈るのをきく時でも、若し其の祈りが心の底から出て来たので無い場合には我々の心は動かされない。靈の言葉と肉の言葉とは天地の差がある事が分る。此の集會で偶然日本人K氏と出逢つた。エルサレムで永く考古學の方面から舊約聖書を研究して居らるゝ人である。將來日本の舊約學者の重鎮となる人であらう。K氏の智識を借り其の助言を受けてパレスチナ旅行の案を立てる事が出来又全氏の紹介によつてオルブライト博士にも逢ふ事が出来た。



へ給り宿に常のスエイ、邑のアニタベ  
墓のロザラ、家のンモシ人病癩、處る  
りあに中の此等

五 橄欖山に登る

橄欖山

四日朝天氣極めて清朗空に一點の雲も無く旅行者に取つて最も幸運な天候であつた。夫故に橄欖山に登る事を思ひ立ち、一人でポツ／＼ダマスコ門を抜けて橄欖山の方に足を運んだ。途中にある種々の遺跡や寺院の見物は之を後日に譲り唯橄欖山よりエルサレムを臨む事と其の頂上より死海及ヨルダンの方面を眺望する事を唯一の目的として歩を運んだ。夫故に道傍にあるマリアの墓、ゲツセマネの園等は後日に譲つて山を上り始めた。ダマスコ門から橄欖山の頂上までは約三十分位で達する事が出来る、夫故にエルサレムからは極めて近い距離にあるのである。エルサレムと橄欖山との間にヨサバテの谷がありエルサレムは其の谷の西の高みに建つて居り橄欖山は其の東の高みを形成して居る夫故に橄欖山からは頂上からでも中腹からでも又は麓からで

ヨサバテの谷



多るあに書音福、家のタルマとヤリマ  
す有を想聯と所場の此は事記のく



に山攬橄、東のムレサルエ、門ノパテス  
所場ノ教殉のノパテスリあに處るへ向  
き如の圖の此體大は壁城のムレサルエ  
す呈を觀外

もエルサレムは指掌の間に見え、其の種々の有名な建物は一々之を指示する  
事が出来、エルサレム全體のスカイラインは美はしいパノラマを爲して展開  
して居る。南にはヒンノムの谷が見え、それより右の方にダビデの塔、シオン  
門、アクサのモスク、シナゴグ、岩堂、ジャフハ門、美しの門、イエスの墳  
墓寺、ステファノ門、其他希臘、羅馬、アルメニヤ諸教會の寺院、各種の病  
院、ホスヒス等の建物は一々之を指摘する事が出来る。

イエスが其の弟子達にエルサレムの滅亡と世の終末について語り給ひしは  
「橄欖山にて殿に對ひて坐し給ひし」(馬可傳十)時であつた。エルサレムの全  
體を眼前に展開せしめ、將に破壊せられ終らんとするエホバの宮に相對して  
座し給ひ、諄々として其の弟子等を訓へ給へる此の時に於けるイエスの雄姿  
を想像して見るならば、誰か其の光景の壯嚴と其の場所と時との相應しさを  
感じない者があるか。ベタニヤに於けるイエスの休息は大なる感動の前の

橄欖山に登る

小休息に過ぎなかつた、エルサレムに於けるイエスは義憤と悲痛のイエスであつた。祈の家と稱えらる可き神の殿が、兩換屋や其他の商人に穢され居るを見ては、憤激の餘り其の兩換屋の案を倒し商賈の輩を殿より逐ひ出したまふた(馬太二一〇)。(十・二三)。無花果(イスラエルの標徴)の果實を結ばないのを發見しては之を咀つて即刻に枯死せしめ給ふた。パリサイ人サドカイ人等と論議して激しく彼等を言ひ伏せ給ひしは此の時であつた。「噫汝等禍なる哉偽善なる學者とパリサイの人よ」を七度まで繰り返し給ひ、終りに「噫エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し、爾に遺はさるゝ者を石にて撃つものよ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我なんちの子供を集めんとせしこと幾次ぞや、然れど爾曹は好まざりき、視よ爾曹の家は荒地となりて遺されん、われ爾曹に告ん、主の名によりて來る者は福なりと云はん時至る迄は今より我を見ざるべし」(馬太二三〇)との悲痛なる叫びを發し給ひしは此の山であつた。橄欖山より眼

前にエルサレムの全市を望んでイエスの心は如何に義憤と悲痛とに充たされた事であらう。預言者を殺し遺はされし者を石にて撃つものなるエルサレムは將にイエスを十字架に釘けんとして居る、之を思ふてイエスの心は燃えたであらう。ゲッセマネの園の祈りに於けるイエスの心の痛みは如何ばかりであつたらう。橄欖山よりエルサレムを望みつゝイエスの心の痛みを今亦新に感ずる事が出来る。

橄欖山の頂上よりは死海及ヨルダンの谷を見下す事が出来る。死海は箱庭の池の如く眼下に横はり一躍して之に達する事が出来そうに思はれ、ヨルダン川は白い砂の間に青く細い紐の様に谷の中央を縫つて居る。モアブの山は一横線をなして靜に東天に横はり、南は遙にヘブロンを望み、北はサマリヤの山々を望み、又遙にヘルモン山の白雪を仰ぎ見る事が出来る。約束の國、カナンの土地、イスラエルの歴史と密接の關係ある地方の全體を一目の間に

收め、あまりに美はしくは無いパレスチナの自然も此の山の頂より望む時は一の美はしい畫幅となつて我等の眼前に展開されて來るのである。

昇天寺(チヨルチ、オブ、アツセンシヨン)露西亞寺の塔等の見物は之を後日に譲つて獨逸カイゼル及皇后の寄進によつて建てられた新しい建物の方に歩を進めた。此の建物は目下パレスチナの政廳になつて居り橄欖山の北の方の高見に位して居る、案内乞食がうるさくつきまとつて追ひ拂ふのに骨が折れた。聖地に於ける静かな散策を彼等によつて妨げられる事の如何に大きいかは殆んど想像以上である。何とか政府なり又は有志なりが彼等を取締りパレスチナ巡回の旅行者をして今少し静に愉快に巡禮する事が出来る様には爲し得ないものだらうか。

やがてパレスチナ政廳についた。守衛の様なアラブ人の案内によりて之を一巡した。其建物の中には一の大きい禮拜堂がある。伯林の建築家が獨逸の

材料を以て建てたのであると案内者は話して居つた。獨逸式にゴツ／＼しては居るけれども中々立派な建築である。其禮拜堂の天井は皆モザイクで出来て居り中央に大きくキリスト昇天の繪があり。周圍にはダビデ、メルキゼデク、其他預言者等の貌を表はし、之と並べてカイゼルと皇后との顔が入つて居る。此の建物は一九一〇年前後に竣工したらしくカイゼル全盛の時代の産物である。自分等を聖書の預言者等と並べて見た邊にカイゼルの雅氣と愆氣と高慢とが明かに顯はれて居り之に對照して春の夜の夢の如くに短かつた彼の一生を思ひ、當然とは云ひ乍ら所謂英雄の末路何となし可哀そうにも思はれた。彼が自分の顔をキリスト及預言者の顔と並べて此の禮拜堂の天井を飾らしめた時には、十數年後に彼の運命に取り返しつかない打撃が來る事などは全く考へて居なかつたのであろう。恐らく彼の名はダビデやイザヤの如くに永久である事を考へた事であらう。乍併今日此の堂を見て其の天

橄欖山に登る





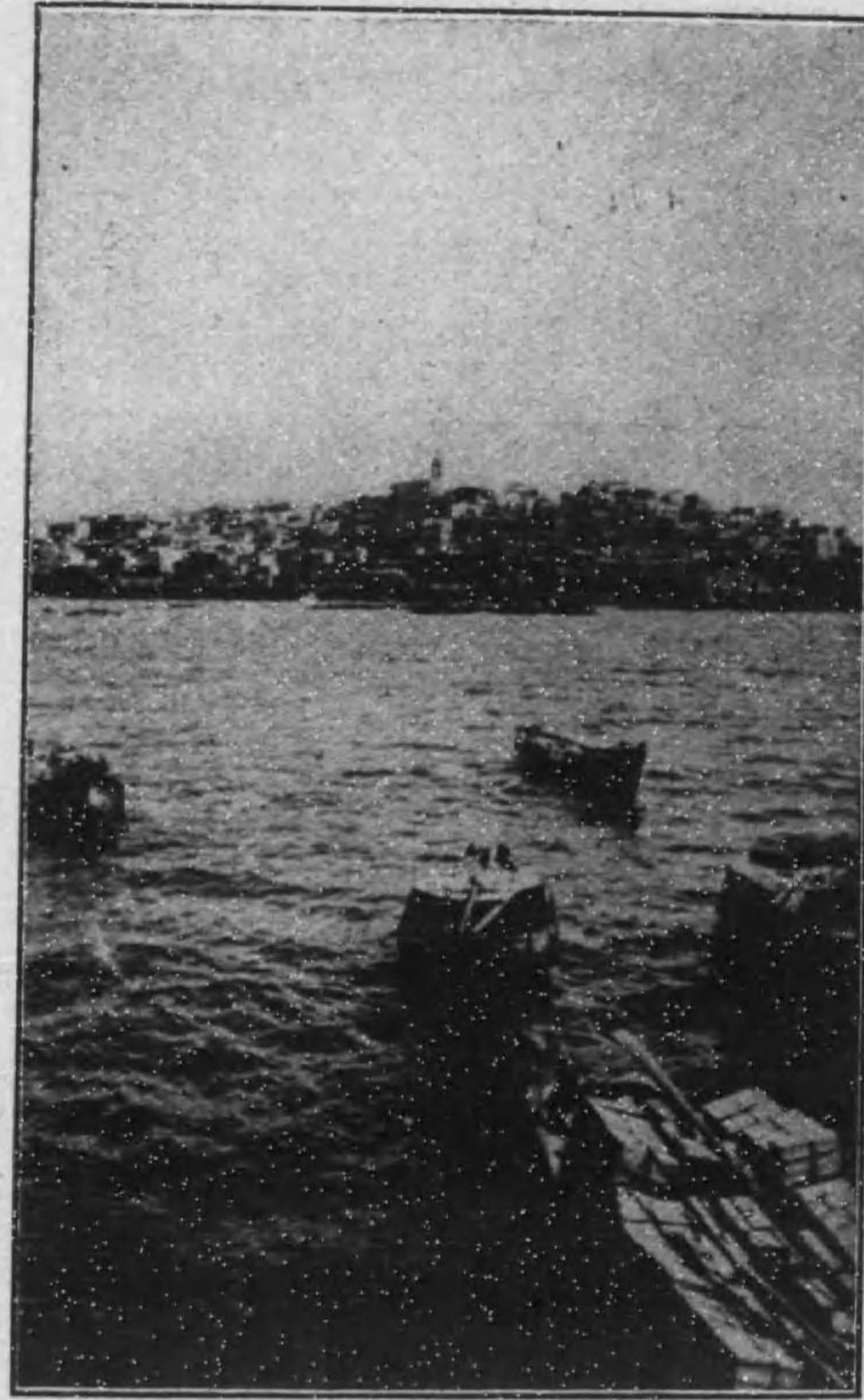
せ見望をムレサルエリよ腹中の山概橄  
サルエ呼鳴」りに申の望一市全、處る  
むしさ起ひ想を「よムレサルエよムレ

パレスチナの面影

井を眺める者には茲に恐ろし諧嘘を見せられるのである。

此の禮拜堂の鐘樓に登つて更に高處よりパレスチナの眺望を恣にし、山を下つて再びエルサレムに歸つた。橄欖山は其の名の如く多くの橄欖の木が生えて居る。併しそれは實に山腹の一部に過ぎず山全體は矢張り禿山である。イエスの時代にはもつと澤山に橄欖が有つたのではないかと思はれるけれども要するに之れ想像に過ぎない何人も之を證明する事が出来ない。

ジャファ(ヨツバ)の港ソロモンの時  
既にパレスチナの良港なりき



(りあに處の餘哩一る距をパツヨ)墓のタビタ

### 六 ジャファ(ヨツバ)及テラザイヴ

天氣が非常によくなつたので急にパレスチナの他の部分を今の中に旅行しようと思ふ考を起し、午後の汽車でジャファ(聖書にはヨツバとなつて居る)に向つた。汽車は素來た道を走りリツダにつきそれから間もなくジャファアについた。プラットホームに下車して馬車屋に友人から紹介された宿屋の名を云つてもそんな宿屋は知らないと思ふ。他の人々にきいても知つて居ないらしい、不思議な事もあるものだと思ひ且つ夜になつたので一切見當が分らずまご／＼して居る間に宿引が来て獨逸語で自分の宿に来る様に話しかけて来た。止むを得ず其の男と共に馬車を走らせた。馬車は大きい新しい立派な通りを走つて行く。元來ジャファは最も古い町の一つであり、かゝる新式の街路があるうとは夢にも思はなかつたので何だか狐に撮まれたのでは無

ジャファ(ヨツバ)及テラザイヴ

いかと云ふ様な心持がして来た。やがて馬車は大きいホテルについた。處がホテルの看板にはヘブル語(ユダヤ語)の文字でホテルバルフリアと書いてあり、英語では何も書いてない。それで是は猶太人専門の宿屋である事が分つた。食堂に入つたら十人程の男女が一處に食事をして居る、其の會話に耳を立て、きいて居ると時にはユダヤ人の通用語を用ゐて居るかと思ふと、忽ち佛語に變じ、又は獨語を用ゐ、中には英語やギリシヤ語伊太利語までも使ひ出し殆んど一座の連中凡てが何語でも用ゐ得るらしい様子であつた。ユダヤ人が其の本國を失つて各國に流浪して居る結果かゝる有様となつたのかと思ふとそゞろに哀れを催して来る。全然ユダヤ人のみの中に飛び込んだのは是が始めてでありいよゝ奇妙な心持がして来た。併し歐洲人一般の如くにユダヤ人に對する先天的憎惡の心を自分は持ち合せて居ないが爲めに別に不愉快の感を持つた譯では無かつた。從てだんゝ話の糸口が出て来て種々の

問題について語り合つた。試に「何故歐洲人がユダヤ人を嫌ふのであるか」と問ふて見た。そしたら印度に居つたと云ふ元氣な婆さんは即座に答へて「歐洲人ではない基督者が我等を嫌ふのである、其の理由は嫉妬より外に無い」と云つて居つた。そして他の連中に「貴方はどう思ひますか」ときいて居つたけれども他の連中は笑つて胡麻化して居つた。勿論同感なのである。此の婆さんの言はユダヤ人一般の確信であり、そして半面の眞理は確に存在して居る。恐らく半分以上の眞理を持つて居るであらう。

ユダヤ人の歴史は人類の始祖アダム。エバまで遡つて居り其の信仰の祖アブラハムはユダヤ人の誇りである。此の數千年の歴史の間非常の浮沈があり、現在は其の國土を失つて世界の各地に流浪して居るけれども、而も尙其の國民性を失はず、其の信仰を維持し、其の自負心を保有して居る。ユダヤ人の數は全世界を通じて二千三百萬人とも云ひ又千五百萬人とも云ふ、此の間

にあるものと見て間違は有るまい。二十億の世界の人口に對し百人に一人の割合に過ぎない。而も其の勢力は驚く可きものがある事は何人も之を認めなければならぬ。英、米、佛、獨の銀行家の多數富豪の多數（ロスチャイルドの如きも其一人）が猶太人である事は周知の事實であり、又現代に於ける政治經濟上の大革命を起したレニン、トロツキー其他露國改革政府の大部分が猶太人であり、其の元祖カールマルクスも猶太人である。即ち政治上經濟上の主要の原動力が彼等に因て占められて居ると云ふ事が出来る。嘗にそれのみではない彼等を迫害して得意になつて居る基督者も實を云へば其の經典たる聖書は皆猶太人が書いたたのである事を忘れようとして居るのである。其他スピノザ、ベルグソンの如き哲學者、ハイネの如き詩人、メンデルソンの如き音樂家、アインシュタインの如き理學者を始め大小の學者藝術家の中に猶太人が如何に多いかは之を調べて見て何人も驚く程である。

凡ての國民が皆夫々自負心を有すると同様にユダヤ人も自負心を有して居る事故是等の國民的優越が彼等に取つて殊に大袈裟に見える事は當然であり彼等は神の選民であり世界中最優の人種である事を確信して居るのも尤もな事である。食堂の婆さんは之を露骨に云つたわけ他の人々は黙して語らななければいけません。皆同じ思想を持つて居ると見て間違は無いであらう。

ユダヤ人を惡み嫌ふのは歐洲人では無く基督者であると云ふ見方も面白い見方である。實際歐米の基督者程其の信ずる教義と反對の行爲をして居る國民はあるまい。敵をも愛せよと教へられしキリストの教は全然之を反故にしてしまつて互に敵を憎む事の競争をやつて居り、若し敵を憎む心が其の國民に不足して居ると思ふと、態々虚構の事實を捏造して迄も敵を憎ましめて居る。歐洲戰爭中獨逸が敵の死骸から油を取つて使つたとか、白耳義で掠奪をし強姦殺人をやつたとかの事實は、眞赤な偽か大部分虚構の事實であるのみ

ならず米國が宣戰の原因となつたルシタニヤ事件の如きも、ルシタニヤに軍需品を積んで居つたから起つたのだと云ふ事は今は殆んど周知の事實で米人すら之を認めて居る位である。赤十字病院攻撃の如きも赤十字病院中に軍需品を納めて置いたからださうである。是等の事は予が英國滯在中戦地に居つた英米人からの直話で聞いたのであつて獨逸人から聞いた話では無い。以て其の事實である事を知る事が出来る。かゝる大きい虚偽を造つて迄も敵を憎ましめんとして居つたのである。此の憎敵の心は無智の階級や頑固の階級や婦人連中には餘程深く入つて居ると見えて、今でも英、佛、獨相互の憎悪は到底日本では思ひもよらない強さと深さを持つて居る。是が所謂基督教國民である。矛盾も此位大きくなれば所謂言語道斷唯唯然たるのみである。嘗に國際關係のみでは無い金持と貧乏人との間も全様である。金持は大きい土地とか澤山の株とかを一人で持ち切れない程持つて居り、朝は十二時過迄も

寢坊をして夜は芝居やダンスで二時三時迄も夜深しをし大きい家に住んで御馳走を澤山に食へて居り、日曜には立派な着物を衣て自動車で教會に出掛ける。男はシルクハット女は大きい團體に恐ろしく大きい毛皮の外套を着、其上に毛のショールなどを巻きつけて居るので一人で三人前位の席を取つて居る。其の恰好は實に堂々たる者である。そして貧乏な基督教者は穢いから己の教會には來るなと云つて彼等を排斥して居るのである。富者と貧者との間、資本家と労働者との間にはかくして劃然たる區別が出來、階級が出來て居るのである。基督教の宣教師等はよく印度の悪口を云ふ時に印度教は印度人に階級を作つて非常な弊害を起して居るから早く印度を基督教にしなければならぬと云つて叫んで居り、英國人も之を信じて居る。是も事實であらう。併し夫より先に歐洲殊に英國の基督教が階級を作つて平氣で居る事をもつと氣がつく可き筈である。

話は横に入つてしまつたが、かゝる偽の基督教國は同様に其の教を生み出したユダヤ人を迫害して居るのである。夫故にユダヤ人は、自分を迫害するものは基督教徒であると思ふのは事實に叶つて居ると云はなければならぬ。日本人を排斥するものも基督教國である。自分等の棉花商や鐵商の利益の爲に印度人やエジプト人を壓迫し、アフリカ人を奴隸に使つて自分等の富を爲して居り乍ら今更彼等をリンチして居るのも皆所謂基督教國である。現在の世界に於て最も悪い事を平氣でやつて居るのは基督教國である。

何の機かユダヤ人の中に飛び込んでしまひ。今更ら逃げる譯にも行かずに其まゝ其ホテルバルフォリヤに泊つてしまつた。翌朝夕食を終へてジャファアに行く可く歩き出した。街路は立派に石で敷きつめた大きい道路になつて居り時には並木まで植えてある。兩側の家も皆新しく立派な家ばかり、そして看板や廣告は皆へブル文字（ユダヤ文字）で書いてある。左に折れて海岸に

出て見ると寫眞で見たジャファアは遙か南、二三哩の處にあるのを見附けた。茲で始めて昨夜以來狐につまゝまれた理由が分つた。自分はジャファアに下車するつもりで一停車場手前のテラヴィグに下車したのであつた。是で凡ての謎はとけてしまつたのである。

テラヴィグについては古い案内記には何も書いて無い、是は全然新しいユダヤ町である。紀元七十年エルサレムが破壊されて以來純ユダヤ人の市は是が始めてあると人は云つて居る。歐洲戦争前には僅かに三百人しか居なかつたのが、今は三萬五千の人口を有し、前には一面の砂地であつたのが今は立派な市街になつて居る。其附近は殆んど寸地も餘さず皆賣り切れて居ると云ふ事である。此の町は自治であり市長も役人も巡查迄もユダヤ人で、住民も殆んど全部ユダヤ人のみであるとの事である。ユダヤ人が其本國を失つて以來、諸國に流浪して迫害を受けつゝも其本國即ちエホバの神の約束し給へる

エレッツ・イスラエル(イスラエルの地)に歸り度い希望は非常に強かつた。土耳其政府の下には是が禁じられて居つたけれども歐洲戦争の後英國政府の下に其歸國が許可される様になつたので、ユダヤ人は非常に英國政府を徳として居る。テラヴィヴの大道路の一つにはアレシビー街と云ふのが有る英將軍アレシビーに因んだ名である。予の泊つたホテルバルフォアは英首相バルフォアに因んだのである。又ユダヤ人の富豪でユダヤ人の歸國に對し援助を與へて居るロートシルド(ロスチャイルド)に因んだロートシルド街と云ふ大通りがある。凡ての點に於て歐洲最新の技術と都市計畫とを應用して出來て居るので恐らくテラヴィヴは地中海東岸に於ける最初の新式都市であらう。海岸から遙にジャファアを望んで自分の誤りを見出し、それからポツク、砂濱を歩き乍らジャファアの方に向つた。港には六艘の大型汽船が遙に沖の方に淀泊して居る。港が悪いからであらう。ジャファハは極めて古い港で今から二

ジャファ

千九百年前にソロモン王がエルサレムに神殿を建てる時にも其の材料としたレバノンの香柏をソロの王ヒラムに乞ひヒラムは之を筏に組んでヨツバ(ジャファの事)に送つたとある(歴代誌下二〇一―一六)。又傳説によればヨナが鯨に吞まれる前に此港から船出したのだと云はれて居り、又希臘の神話のアンドロメダは此處の岩に鎖で繋がれたのだとの傳説がある。成る程海岸には澤山の岩がある。ジャファは小高い山の上に建てられた町であり遙に之を望めば至て美しく見える。

製革工

海岸を歩いて居る間に驢馬の骨か羊の骨かよく分らないけれどもあまり大きくない獸の骨が澤山に散在して居つた。あまり清潔でないのみならず何となし氣味悪い心地がした。サムソンが驢馬の腮骨を以てペリシテ人千人を殺したと云ふのも此の様にして落ちて居つた骨を拾つたのであらう(士師記十下)。少し行くと遙か遠方に海岸の砂の中に十數本の杭を立て、何物かをそれ

ジャファ(ヨツバ)及テラヴィヴ

に吊し瀕りに何かやつて居るのが見えた。近付いて見ると、屠られた羊の皮を剥いで居るのであつた。羊を後足で杭に倒に吊して其皮を剥ぎ取る手際は實に巧なものであつた。皮は之を鞣すのであろう、肉は小僧の連中が其まゝ之を肩車にかけ自分の頭から肩にかけて脂肪だらけになるのを至つて平氣で運んで行く。多分此の種の製革工は古くより此附近に存在したのであろう、ペテロは久しくヨツバの海岸に近き皮工シモンの家に居つた(使徒行傳九章十章)事が記されて居る多分彼の皮工シモンも是と同様な方法で製革の仕事をして居つたのであろう。

是から皮工シモンの家の跡を見に行かうと思つて地圖をたどり乍ら古いヨツバの町の中に入つて行つた。皮工シモンの家はペテロが茲に久しく住んで居り、ある日其の家屋の上で祈つて居る間に幻象を見てユダヤ人と異邦人と區別を取り去つてしまふ可しと教へられた處である(使徒行傳十)。基督教が

ユダヤ人の宗教より世界的人類的の宗教に變つた其の轉機を劃するものとして最も意味深き場所である。併し此の家が今存在して居る譯ではない、此の家の跡と稱せられて居る箇所が二つある。一は現在羅馬教會經營の僧院兼旅舎(カサノバ)のある場所であり一は燈臺に近く回々教寺院が建つて居る場所である。此の町の舊い部分は山の上に建つて居り、道は極めて狭く多くは石の階段から成つて居り。兩側の家は極めて穢く何者が飛び出して來るかも分らず頗る薄氣味の悪い町であつた「カサノバ」は辛ふじて是を見出した、ア、此の邊にペテロが居つたのであらう位に想像するだけで其の當時を偲ぶよすがも無い。今一つの場所を見出さうとしてあちこちさまよつたけれども遂に道に迷つて之を見出し兼ねた。穢い狭い道を歩いて居る間に急に二階の上から下水が瀧の如く道路の上に落ちて來て將に之を浴びんとした。是では到底叶はないとあきらめて廣い道の方に出てしまつた。



町の要所であるアラビヤ人の市を見た。狭い通の両側に一杯に諸種の物品を販賣して居るのである。是等は多く純粹のアラビヤ人で、彼等は決して愚かな顔付はして居ない。日本で見ると云ふ顔はあまり見付からない。只眉毛と睫毛が飽迄も黒く、眼は歐洲人の様に凹んで居り、眼玉の色が黒いので、何となし意地の悪そうな泥坊顔をして居る事は前にも云つた通りである。此方からニッコリ笑つて挨拶すれば彼等も笑顔をして之に答へる。其時だけは可愛らしい顔になるのを見た。

それからエルサレム街道に沿ふて約二十分ばかり郊外の方に歩みを進めタビタの墓を訪ふた。此の街道は昔からエルサレムとヨツバの間の物資運搬や交通の爲めに使はれたのであらう。リツダ(ルツダ)に行くのも此の道でありペテロ其他の使徒も度々此の道を往復した事であらう。今此のタビタの墓の附近はロシア人のコロニーになつて居る。タビタはペテロの女弟子であり

「多くの善事と施濟とを行へる者」(使徒行傳九〇三六)であつた。彼女が死んだ時ペテロはルツダに居つたので、使を遣してペテロに来て貰つた。ペテロは愉快やつ来て彼等を悉く外に出し、跪きて祈り又屍に向ひて「タビタ起きよ」と曰ければかの婦眼を開きペテロを見、あきて坐しぬ(四〇)と記されてある。

其邊に働いて居る二三人の男にタビタの墓は何處かときいても知らない。そして佛蘭西語で君の同國人が居るからつれて行くといつて予を引張つて行つた。こんな處に日本人が居るのかと思つて不思議に思ひ、自分のさゝちがひかなど思ひ乍らついて行つた。玄關で其の家の人が出て来て来たけれども露西亞語で通じない。其の中十二三歳の可愛い、女の子が出て来て立派な佛語で話し出した。そして日本人はヤマザキと云ふ書家で長く茲に住んで居るけれども今外出して居ないと云ふ、そしてタビタの墓は何處かと云つてさいたら其の女の子が先に立つて案内してくれた。小さい白く塗つた墳墓である。

其の附近にタビタの紀念の爲めの寺院が立つて居る。それは新しい建物でペテロやタビタの繪が澤山掲げられて居つた。此寺院の塔からは有名なシヤロンの野を見下す事が出来る。「荒野とうるほひなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花の如くに咲きかゞやかん、盛んに咲きかゞやきてよろこび且つよろこび且つうたひ、レバノンの榮を得カルメル及びシヤロンの美しきを得ん」(イザヤ書三五〇二)とイザヤが云つたのは此の野である今でも此の邊は他のパレスチナの地方よりは遙かに肥沃であり。獨逸人のテンブラー派の植民地も此の附近にある。

パレスチナの面影

七 リシヨンの野 (ユダヤ人の最初の植民地)

晝食の爲めに先のホテルに歸つた、例のジューの婆さんが予に向つてしきりにリシヨンに行く事をすゝめて止まない、ユダヤ人式の押の強い婆さんである、リシヨンはユダヤ人のコロニーの中最も古いので有名である。「チオニスト運動」は埃太利のユダヤ人ヘルツエルによつて唱へ始められたのである。此の運動は一方ユダヤ人が各々に於て迫害され輕蔑され嘲弄さるゝのは其の故國が無いからであり、其荒れた故國に歸つて其處を耕し自主獨立の國を建て度いと云ふ希望が起つて來たからであり、他方舊約聖書の豫言が無數に此のユダヤ人の歸國とパレスチナの復活とを豫言して居るので之に刺激されて居るからである。

エホバかく云ふ汝の創は愈す汝の傷は重し、汝の訟を理す者なく汝の創

リシヨンの野

を包む膏藥あらず、汝の愛する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の愆の多  
 さと罰の數多なるによつて我仇敵の撃つがごとく汝を撃ち殿しく汝を懲せ  
 ばなり……然るごとすべて汝を食ふ者は食はれ、すべて汝を虐ぐる者は皆  
 とらはれ、汝を掠むる者は掠められん凡て汝の物を奪ふ者は我これをして  
 奪はるゝ事にあはしむべし。エホバいふ我汝に膏藥を貼り汝の傷を醫さん  
 そは人汝を棄てし者とよび尋ぬる者なきシオンといへばなり。……エ  
 ホバいひたまふ其時われはイスラエルの諸の族の神となり、彼らは我民と  
 ならん、……イスラエルの乙女よ我再び汝を建てん汝は建らるべし。汝  
 ふたゝび鼓をもて身を飾り、歡樂者の舞にいでん。汝また葡萄の樹をサマ  
 リヤの山に植ん、植る者は植てその果を食ふことを得ん(エレミヤ記) 彼等は  
 ひさしく荒たる處をつくり、上古より廢れたる處をおこし、荒たる邑々  
 をかさねて新にし、世々すたれたる處を再び建つべし……曩に受けし恥

にかへ信じて賞賜をうけ、凌辱にかへ嗣業をえて樂しむべし(イザヤ)。

其他此の種類の豫言は聖書の中至る處に散在して居る。皆イスラエルの罪を  
 責むると同時に、若しエホバに對する信仰に立ち歸るならば再びイスラエル  
 に歸る事が出来、荒れ果てた其の祖國が再び榮へる時が来るであらうとの豫  
 言であり、ユダヤ人の或者は此の状態を實現しようとなつて居るのであ  
 る。彼等は其の神エホバよりアブラハムに約束せられし此の土地が他民族の  
 爲めに荒廢に歸せしめられて居るのを見るに忍びず、茲に移住して其地を新  
 に開拓せんとして居るのである。此の目的を以て一八八二年に始めてパレス  
 チナに移住したのが此のリシヨン・ル・シオンであつた。今では立派なコロニ  
 ーをなし植林、耕作、牧畜をなし殊に葡萄酒の搾取が主要の事業で其の酒倉  
 はパレスチナに於ける最大のものであり、其の葡萄酒は世界中に販路を持つて  
 居る。其他此のコロニーからはアルモンド、密柑、オリーブ等を産して居る。

人口一千四百皆立派な石造の家に住みシナゴクあり、學校、圖書館、公園、郵便局、電話等を持つて居る。此の附近は植民以前は一體に砂原であつたのが、今は立派な青々とした田野と村落となつて居り、其の周圍の砂地とは著しい對照をなして居る。

此のラシヨンの成功に刺激せられて各地にユダヤ人のコロニーが出来、殊に其後英國政府がユダヤ人を體よく英國より放逐する目的を以て其の歸國を奨励し且つ容易にしてから、此の種のコロニーは非常に増加し、目下八十以上人口一萬八千に及び、尙日々月々に増加しつつあるとの事である。そしてそれがユダヤのみならずサマリヤ、エスドロン平原よりガリラヤにまでも及んで居る。パレチチナを旅行する人は、汽車の窓から四方を眺めるならば、處々に二三十戸乃至百又は夫以上大小の家が一群をなし新しい壁と赤い屋根とを以て美しく建てられた整頓せる村落を發見するであらう。之がユダ

ユダヤ人のコロニー

ヤ人の植民地である。其中のあるものは稍古く其の樹木も繁茂して居り、他のあるものは未だ家が出来たばかりである。今後十年二十年を経たならば見ちがへる程の發達を來すであらう。

聖書の豫言、ユダヤ人問題、其の悲哀と努力等を考へ乍ら宿に歸つて食卓についた。前の婆さんが予に向ひ「どうだつた面白かつたか」と問ふ。「面白かつた」と答へたら「そうだらう。私に御禮を云ひなさい」と。何處まで押が太いか分らない婆さんである。此時新に食卓に顔を出した若い落付いた青年が居つた。獨逸コンスタンツに生れたジュエでドクトルピツカードと云ふ。地質學のドクトルでありフライブルグで勉強したとの事である。互に獨逸語で話しを始めた。此のビ氏もユダヤ人の植民事業の爲めに働いて居るのであるとの事である。そしてアフレ驛に近い處に面白いコロニーが二三あるから是非見に來いと云ふので翌々日を期して行く事に約束しシヤロームと

リシヨンのシオン

シヤローム

云つて別れを告げた。

一體ユダヤ人は逢つた時も別れる時も共に「シャローム」と云ふ挨拶の言葉をかはすを例として居る。「平和」と云ふ意味のヘブル語である。馬太傳十章十二に「人の家に入らば平安を祈れ」とあるのは原語には「人の家に入らば挨拶せよ」とある。十三節に「その家もし之に相應しくば汝の祈る平安はその上に臨まん、もし相應しからずばその平安はなんちに歸らん」とあるけれども原語は「汝の祈る平安」ではなく「汝の平安」であり「その平安」ではなく矢張り「汝の平安」である。即ち此の二節を原語の通りに譯しかへて見れば「人の家に入らば挨拶せよ、その家もし之に相應しくば汝のシャロームはその上に臨まん。もし相應しからずば汝のシャロームは汝に歸らん」となるのである。ユダヤ人の挨拶の習慣をよく知つて居つたならば此の日本譯もかゝる誤をせず又原語通りに譯してもよく意味が通ずるのである。他の食堂の

連中にもシャロームと云つて別れて室に歸つた。

八 ハイファアとカルメル山

カイザリ

テラヴィヴを一番の汽車で早朝出發し、丁度昨夜のピツカード博士と同車してハイファアに向つた。ピ氏は汽車の窓からしきりに兩側を窺いて居る。多分其の地質を研究して居るのであらう。ハイファアに達する前に途中下車をしてカイザリヤの遺跡を訪はうとしたけれども丁度雨が降り出し道路が悪いで計書を抛棄してしまつた。カイザリヤは汽車の停車場を去る西三哩の海岸にあり紀元前十年にヘロデの建てた港で、カイザルアウグストスの名に因んで命名された町である。此の町はイエス自身には關係が無かつたけれども使徒等には深い關係の有つた處でピリポはカンダケの大臣にバプテスマを施して後此のカイザリヤに行き(使徒行傳八〇四十)又ベテロをして異邦人傳道を思ひ立たしめた動機となつた百卒長コルネリオは、此の地に住み(同上十一)バウロは屢々

ハイファ

此の地と關係が有つた(同上九〇三十)のみならず最後にバウロがエルサレムで捕へられ護送せられて此の地に行き茲に二年間幽閉せられてフェストの時に及び遂に上訴してローマまで送られたのである。二年間の幽閉、たとひそれが寛大な幽閉(使徒行傳廿四〇二三)であつたにしても、バウロの傳道の生涯の中で短い時間では無い。それ故に此のカイザリアは充分一見の價値があるのであつたけれども雨に妨げられて果さなかつた事は返すくも遺憾である。此の町は今に至るまでローマ時代のヒツポドローム及劇場等の残りが淋しく立つて居るのみであるとの事である。

午前十一時頃汽車はハイファアにつきピ博士にシャロームを述べて下車し馬車を雇つて獨逸舊教のホスピツについた。

ハイファアの町はカルメル山脈が地中海に少しく突出した尖端から、東北の方に海岸に沿ふて立つて居る町である。其の東部は主に舊い市街で何處に

ハイファアとカルメル山

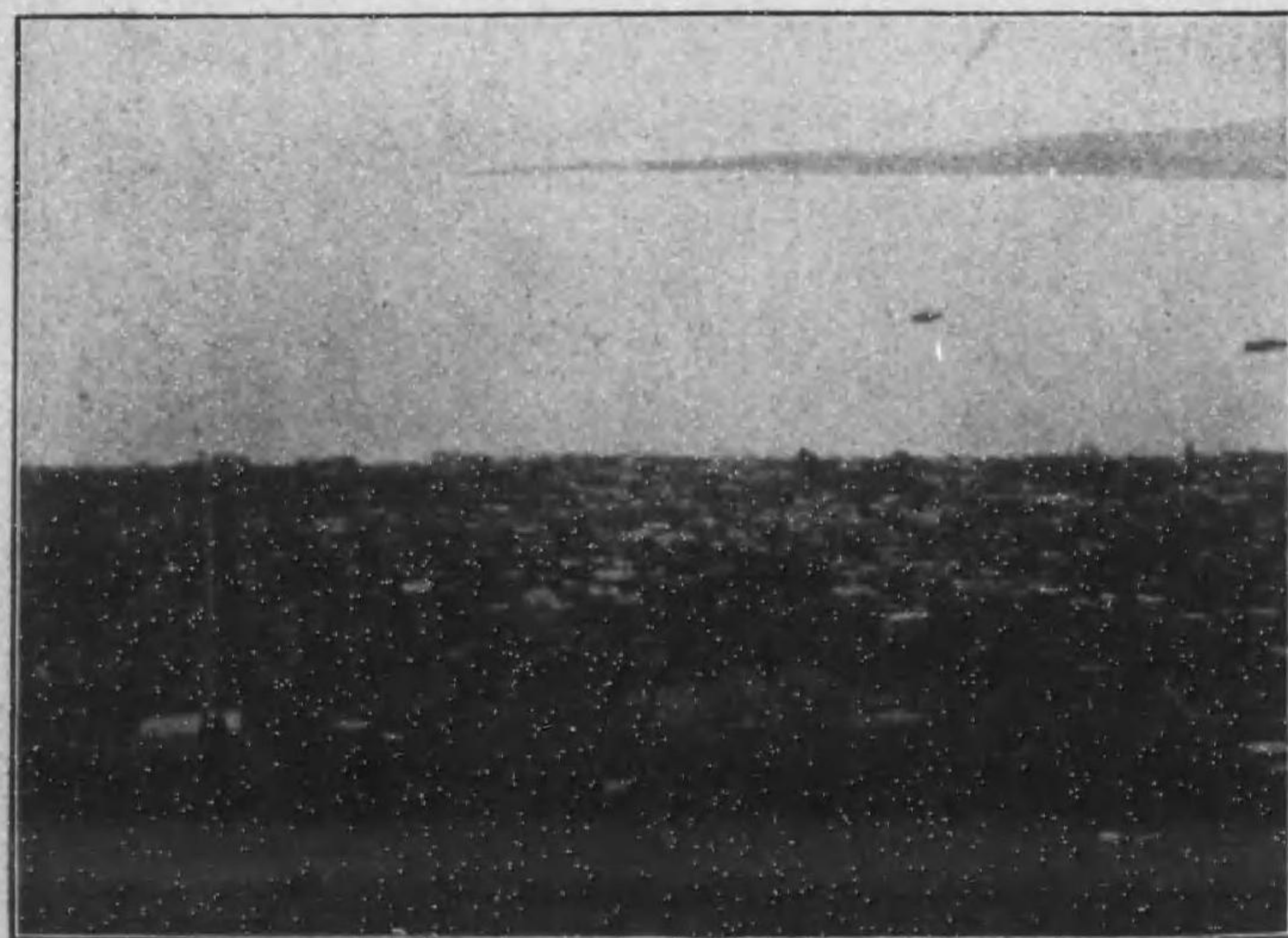
も見る事が出来る狭い汚い不規則なアラブ町であり、其の西部には獨逸人のコロニーがあり市街も整頓し、道路も清潔で樹木も豊富に植え付けられて居り見た處頗る氣持のよい市街になつて居る。基督教の小さい一派であつた獨逸のテンプラー派が一八六八年に始めて茲に殖民をしたのが發達して今日に至つて居る。日本でも殖民の問題が八釜しく且つ困難になつて居る此頃である事故、日本の御役人達は勿論此の種の殖民地を視察研究して居る事であらうと思ふ。日本から殖民を送る位ならば支那街の様な汚ない街を作つて全市の厄介物になる様な事はなる可く無い様にし、出来るだけ綺麗な氣持のよい殖民地を作る可きであらうと思ふ。此の小さい殖民地などは夫が爲めにはよい參考になる事と思ふ。

午後カルメル山に登る、カルメル山の名は舊約聖書の讀者には種々の意味に於て親しみの多い山である。レバノン及シヤロンの野と並び稱せられて美

はしい風景の三幅對になつて居り（イザヤ書三五〇二）ソロモンの雅歌に其の愛する乙女に對して冠せる數多の美はしい形容詞の中に「汝の頭はカルメルのごとく汝の頭の毛は紫の如く王その垂れたる髪に繫がれたり」とある（雅歌七〇五）。此の時代の人の目にカルメルは殊に美はしく見えたと異なる。管に風景の點からのみでは無く、イスラエルの信仰の點から見てカルメルは非常に重要な地位を持つて居る。イスラエルの王アハブ（紀元前九世紀）が異教徒の女イゼベルを娶り、其の感化を受けてバアルに仕へて之を拜し、又アシラ像を作つたりなどして、「其の先に在りしイスラエルの凡ての王よりも甚だしくイスラエルの神エホバの怒を激す事を爲した」（列王上十六〇三三）。是故にエリヤはアハブをしてイスラエルの凡の民とバアルの預言者四百五十人とアシラ像の預言者四百人とをカルメル山に集めしめた。そしてエリヤ一人立ちて彼等偶像を拜する豫言者と之に従へる民々を責め、彼等の神とエリ



院僧のヤリエは物建の上山、山ルメルカ



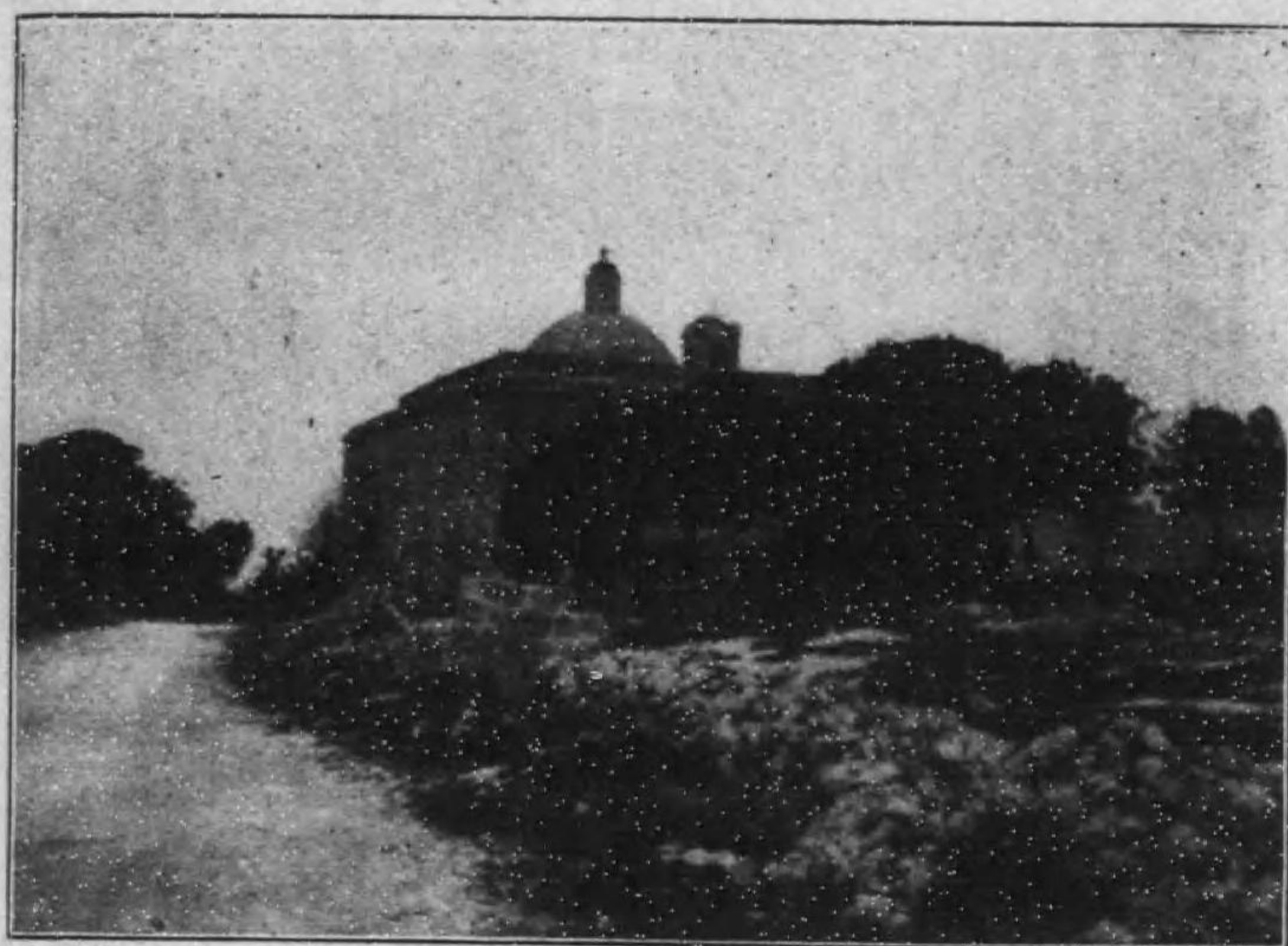
港のアフィハるせ見望りよ山ルメルカ  
城地民殖人逸獨は近附路道大の方左

パレスチナの面影

ヤの神エホバとの何れが眞の神なるやを定めんが爲めに、各一疋の犢を屠り、之を薪の上に置いて天よりの火を呼んだ、バアルの豫言者が其の全力を盡して呼べども火は来らず、エリヤが之を呼ぶに及んで天より此カルメル山の頂に火が下つて犢も薪も皆之を焼き盡してしまつた。エリヤは是によつて其の神が眞の神なる事をイスラエルの民に示しバアルの預言者四百五十人を皆此の山に於て殺してしまつたのである。

此の時は實際イスラエルの信仰の危機であつた。イゼベル女王の威力を以てイスラエルの民が皆エホバを離れんとして居る時に、此の危険よりイスラエルを救ひ出したのはエリヤであり、其の場所は此のカルメル山である。若し此カルメル山に於けるエリヤの奮闘が無かつたならばイスラエルは永久にエホバより離れてしまつたかも知れない、それ故に此の山はイスラエルの歴史上、從て世界の歴史上に重大なる地位を持つて居るのである。





院僧のヤリエの上山ルメルカ



ヤリオフルバ地民殖人太翁の近附レフア

す容收を兒孤人太翁のドンラーボ

カルメル山は一の山脈であつてメギドの山から西北に走つて居る。そしてハイファから約十二哩の處が其の最高點であり千八百十尺の高さを持つて居る。夫故に日本の山などに比しては勿論至て低い山であるけれども唯氣候の關係上、此邊には霧が多いので、此の山は一年中綠色を呈して居る點が全パレスチナに取つて一の例外であり、此の山をして有名ならしむる所以である。併し日本の嵐山等を想像しては到底之を綠の山と稱する事が出来ない。矢張り石山と稱すべきであらう。ソロモンの時代にはもつと美しかつたかも知れない、若し此の山に樹木が繁つて居つたならば、嵐山を延長した様な山になる譯であり、殊に海に突き出でて居る點から非常に美しいに相異ないと思つた。此の山も二千年來の政治的紛亂の爲めに伐採されたまゝ植林されなかつたのでかゝる貧弱な山になつたのであらう惜しい事である。

ハイファとカルメル山

北端である。丁度獨逸コロニーの眞上の部分に新しい建物がある。之は政府の建物で農事試験所の様なものであつた。そして此の附近には植林を始めて居るのを見る事が出来た。四五年を経過したらしい松などは中々よく發育して居る此の順に發育するならば百年の後に此の附近は昔のカルメルの様になる事であらう。そうしたならば聖書の句が再び生きて眼に映るであらうと云ふ様な事を夢の様に思ひ廻らしつゝ喜と望とを以て此の植林地帯附近を暫く彷徨した。

一體パレスチナに於て第一に感した事は植林の必要である。勿論二千年間放棄せられた土地を十年や廿年で復活せしめる事は不可能であらう。殊に此の長年月の間毎年の雨で土壤は洗ひ流され、凡ての山が白い石灰石ばかりを露出して居る處に今に至つて植林をしようと云ふ事は一寸何人も手を出し兼ねる點であらう。殊に夏期二三月月は全然雨が降らない此のパレスチナ地方で

## 植林の必要

苗圃を濕ぼすだけの水が無いのは第二の困難であらう。又森林が収益を生むに至る迄には、短くとも五十年、多くは百年後を期しなければならぬ、此の間唯資金を注入するだけである事故、あまり有望にも見えないパレスチナの土地にかゝる金を出すと云ふ人は多くは無き事であらう。植林の必要を感ずる事は皆感するのであらうけれども手を出す人が無いのでは有るまいかと思はれた。併し乍ら若し將來パレスチナの山全體が皆緑滴る山々となつたならば如何に美しい土地になるであらうか。北にヘルモンの白雪が全パレスチナの冠となり南に世界最低の水面を有する死海が横はり、ヨルダンの谷は緑の毛氈を布きつめた様になり、エスドレロンの野には麥の穂が黄金の浪を打ち、此のカルメル山は眞に乙女の頭の如くに見え、氣候も調節せられ、雨量も増し水源は涵養せられ、荒野とうるほひ無き地と沙漠とは樂しみ喜び、番紅の如くに咲きかゞやくに至るであらう。かく考へると植林がイスラエル

の土地に取つての第一の必要事である事を思はざるを得ない。そして今からでも之に着手して居る政府の着眼は多とす可きである。

此の建物から別れて山を下りカルメル山の西北端、海に近い處に歩を向けた。三方に海を望み、右にハイファの町を見下し、遙に灣をへだて、アクレの町を望み、地中海の浪が足下を洗つて居る處にエリヤの僧院と云ふ大きい建物がある。舊教の僧侶が茲に住んで居り又巡禮者を宿らせる爲に多くの室を持つて居るそうである。此の僧院の祭壇の下に一つの窟がある。案内者は予を其處に導いて茲がエリヤの住んで居つた處であると説明して居つた。一體に此の山には各所に同様の岩窟があり十字軍の時代などは之を利用したもののらしい。或はエリヤの時代にも此の自然の岩窟が存在し、エリヤも其の一つに住んで居つたのは事實であらう。併し此僧院の中の岩窟が果してそれであるや否やは疑問である。唯多くの窟の中最も眺望のよい場所にあるのを選

## エリヤの僧院

んで其の上に住物を建立したものと思はれる。併し乍らかかる問題は小問題である。予はカルメル山の頂より地中海の美はしい風景を眺め乍ら豫言者エリヤの偉大なる人格と其の力とを追想した。エリヤは此の山に住んで屢々エホバに祈り、其の力を養つた事であらう。大家の覆る一僕の能く支ふる處にあらざるは事實であるけれども、時にエホバは其の力を豫言者に與へて將に覆らんとする信仰を彼等をして支へしめ給ふ。是れイスラエルの歴史上の著名の事實である。神に於て能はざる處なし。若し芥種程の信仰あらば此の山に命じて海の中に移れと云ふも其の通りになるであらうとキリストは言ひ給ふた。エホバを信すれば能はざる無きを信じて立つのが基督者の生活である。カルメル山の上に立つたエリヤは是であつた。そして能はざる事を爲す事が出来た。是れ實に自己の一人の力によらず全能の神の力に依つたからである。

僧院を出で、其附近を徘徊し周囲の風景を眺望して山を下つた。其の夜は前述せる獨逸コロニーの中の獨逸舊教經營のホスヒス（一種の宿屋）に投宿した。黒衣に白帽の尼さん等が凡ての仕事を受け居るのである。獨逸軍人上りの商人、獨逸種の米國人である舊教の牧師、伊太利人の商人の三人が同宿者であつた。談日米戦争に及び獨逸軍人上りの商人は日本が米國に勝つのは一擧手一投足の勞である事をしきりに主張して居つた。其の軍略は比立賓や布哇は一朝にして日本の手に歸し、それから日本がパナマ運河附近を攻略すればそれで米國は動けなくなると云ふのである。さすがは好戰國民の名に背かず名案であると感心して之を拜聴した。

翌八日汽車の出る前迄數時間の餘裕があつたので、ハイファアの町を散歩した。殊に其の舊市街の方を通つて見た。近頃は中々盛に貿易が行はれて居り、ジャファアと並んでパレスチナの二つの良港である。貨物船が二艘沖に懸つて

ハイファアの町

居つた。何處を見ても小さい汚い店とカフェ等の前にアラビヤ人が例の硝子壺の煙管を前に置いて、低い椅子に腰をかけ、吞氣そうに煙草を吸つて居るのを見るだけである。此の町には近頃ユダヤ工業學校が出来て居る。此の種の教育が次第に廣く行はれる様になつたらパレスチナも次第に發達するであらう。それ迄は矢張り支那や日本の様な貧乏な國で居なければなるまい。

午後二時ハイファアを立ち三時半アフリーレの停車場についた。ドクトルピツカードとの約束により茲で一二の猶太人殖民地を見るが爲めである。

今日ハイファアに到着する猶太人のコロニーは第一種と第二種とに分れて居る。第一種は、海軍部が建設したもので、第二種は、民間人が建設したものである。第一種は、海軍部が建設したもので、第二種は、民間人が建設したものである。

ハイファアとカルメル山

九 アフリーレの猶太人殖民地

エスドレ  
の平  
原

若いドクトル・ピツカード氏は停車場迄迎ひに出て居つてくれた。停車場から今目指して居る猶太人のコロニー迄は一哩餘もあるであらう。停車場と云つても唯平原の真中に立つて居るので別に他に人家があるでもなし馬車も自動車も勿論無い。従て其の殖民地まで歩かなければならないのである。丁度天氣の都合がよかつたので道も割合に良かつたけれども若し雨でも降つたらば到底歩行は困難であらうと思はるゝ程の泥の深い道である。我等は今エスドレの平原の真中に立つて居る。此平原は、全パレスチナに於て最も豊饒であり、且つ最も大きい平原で、悉く耕作せられて居り、多くの穀物を産出して居る。此平原は西北はアクレ及びハイファの海岸に達し東南はヨルダンの回地にまで及び長さ三十哩幅は十哩より二十哩に及んで居

る、北には海拔千六百尺の處にイエスが三十年の生涯を送り給へるナザレの町が見える。其の稍東には飯盛山とも稱すべき形を持つて居るタボル山が千八百五十尺の高さに聳えて居る。之れはイエスの變貌の山であると稱せられて居る。東北には近く小ヘルモンが聳へ、頭を回らして東南を望めば其處にはギルボア山が目の前に見える。此の山はサウルがベリシテ人と戦て敗れ其の三人の子と共に討死した場所である(サムエル後書三十一)。ダビデは之を聽いて非常に悲しんで之を弔ふ爲めに六の歌を作つた其の一節に「ギルボアの山よ汝の上に雨露降ることあらざれ」(サムエル後書二〇二一)と云つて居る。西南の方にはメギドの山が最も秀でゝ見える。メギドを中心として此の平原は古來からパレスチナに戦はれた大戦争の中心地であつた。バビロンとエジプトの王は茲に戦ひ、シセラとバラク(士師記四)の戦も此の地に行はれ歴山大王(サラチン)、ナボレオン等も皆此の平原で戦つて居り歐洲戦争の際も英

アフリーレの猶太人殖民地

軍が此の平原を占領する事によつて勝利を博した。或る學者の説によれば、  
默示録にあるハルマゲドンの戦(黙示録十六)は矢張り此處を意味したもので  
あろうとの事である。蓋しハルは山を意味するからである。メギドの山より  
西にはカルメル山脈が續いてハイファにまで及んで居る。此の一體の景色は  
非常に美はしい一の繪巻物であり、それに加へて三千年の歴史を思ひ起させ  
る澤山の山野や都市の跡が残つて居るので或は北或は西より東、南と頭を回  
らしつゝしばしの間此の平野の中央に立つて飽かず眺めて居つた。

ピツカード氏は予を伴つて第一にクツアールのコロニーにつれて行つた、  
是は主として露西亞又はポーランドの猶太人の若い人々が一の理想を以て結  
合して移住した村であり、一の團體を形成して共に働き共に衣食し、全然共  
産的組織の下に生活し、之によつて一方猶太人の祖國を其の荒廢より救ひ、  
其人民を他人種の迫害から免れしめ、同時に自分等相互が理想的社會を組織

クツアールのコロ

しようとの考でやつて居る。かゝる人々であるから皆理想家である。猶太人  
の新しい村とでも稱したら適當であらう。團員も多く若い青年男女で是迄は  
相當の暮しをして居つた人々も多數にあるとの事である。員數は四十餘名と  
か云つて居つた様に記憶する。移住してから未だ幾年にもならないそうであ  
る。

理想は美はしいけれども實際は中々そう容易に行かないのは洋の東西を簡  
ばない。彼等理想に燃えた青年男女はやがて此の平原の真中に殖民して見る  
とそう中々容易にはやつて行けず、多くの困難が之に伴つて居るらしくあつ  
た。先づ第一に多くの疫病殊にマラリヤが彼等をなやました。併し今は種々  
の設備をして之に打ち勝つたとの事である。水の不足には非常に苦しめられ  
遠方の井戸から鐵管を引きポンプで水を送つて居る。又是迄鋤鍬を手にした  
事の無い連中が始めて之をやり出した事故、其處には大なる困難が伴つて來

アブーレの猶太人殖民地

る。牛馬の飼育、養鶏等もやつて居るけれども是も不慣れの仕事で成績が不  
充分である。女子は女子相當の仕事を受持つて居るけれども是も材料の不足  
やら交通の不便やらで非常に悩まされて居る。凡ての點で此の仕事は中々容  
易で無く一時悲觀的氣分が非常に多かつたそうである。殊に財政上の困難は  
最も甚だしいらしい。それで多くはユダヤ人の有志の寄附によつてやつて居  
る様子であつた。併し近來は次第に經驗も積み、成績もよくなり次第に有望  
になつて來たので一時は殖民した人々か又其の元の國々に歸つて行くのが中  
々多かつたそうであるけれども、近頃はドシク渡來して來るそうである。  
そしてユダヤ人の殖民地が非常に勢で増加しつゝあるので又アラブ人との間  
の問題などが起りかけて居る様子である。

ユダヤ人の殖民地が非常に増加して居る事は汽車でパレスチナを通つて見  
れば直に之を知る事が出来る。現に此エスドレロンの野だけでも汽車の沿線

に處々に此の新しい白壁赤屋根の家の四五十の一團が認められる。是は皆ユ  
ダヤ人のみの殖民地であり最近二三年間に急速の發展をなしつゝある事實を  
見る事が出来る。ユダヤ人の殖民とアラブ人の村とは非常なコントラストを  
なして居る。アラブ人の村は古い不規則な汚い村で、石と土とで固めた四角  
な箱を地上に置いた様な家ばかりであり、道路も狭く、耕作法も原始的であ  
る。之に反しユダヤ人の村はパンガロー式の洋館で家並も整頓し、道路も廣  
く作り中には運動場を造つて青年や子供がフットボール其他の遊戯等をして  
居るのを時々見受ける。給水の設備其他凡てが新式であり、歐洲の技術と經  
験とを茲に持つて來ようとして居るのである。

其晩はピツカード氏とホテルで物語つた。ホテルと云つても團員中の一名  
が其の家の一室を提供して旅人を宿泊せしめて居るのである。ピ氏は地質學  
専攻で今度ユダヤ人の殖民地事業の爲めに渡來し、各地を視察して地下水を

アフリーレの猶太人殖民地

鑿泉法によつて掘り當てようとして居るのの由である。現にアフリーレ停車場の稍北にも一の試掘をして居つた。それが甘く成功したので非常に喜んで居つた。パレスチナの耕作植林に對する最大の困難は勿論水の欠乏である。夫故に若し此の試みが成功したならば是はイスラエルの殖民事業に取つて一大福音を持來す事であらう。氏は民家の一室を借りて其處に下宿して居つた。一室と云ふても玄關の横を幕で仕切つてあるだけである。若し獨逸で働くらばもつと多くの生活上の贅澤と快樂とを得る事が出来る事は勿論であるけれども氏は之を犠牲にして其の國民の爲めに東奔西走して居るのであつた。若い愛國者の意氣と悲哀とを彼の顔の上に讀む事が出來氏の成功を望まざるを得なかつた。

翌九日は早朝バルブローリヤのコロニーを見に行つた。是は又一種變つたコロニーで主としてポーランドの孤兒の爲めに建てられたのである。十二三か

ら以上の孤兒が男兒五十幾名女子三十幾名總計八十四名を茲に收容して居る。是等の孤兒は一日中半分は教育を受け半分は勞働をして居る。教育は普通教育殊に農業の方面に力を入れ、其のコロニーの所有地中に試験所を作り小さい子供等が其の教師から教へられた方法を以て試作をやつて居るのを見せられた。中には一尺四方位の硝子の箱を作り日光温室にして居る可愛らしい試などもあつた。是等の子供は將來は有望な農業者になる事であらう。又稍大きい男兒等は風呂場に湯を送る鐵管の接合をして居るのを見た。丁度瓦斯會社や水道の職工がやる様な事をやつて居るのである。是等も一應は教師が手本を示して見せ。其後は彼等に獨立にやらせるのだとの事である。此殖民地の經濟はアフリカに居る猶太人の寄附によるとの事である。孤兒一人につき一ヶ月四パウンドの寄附が來るそうである中々經濟は容易ではあるまいけれども農作物等の収入もあり何とかやつて行くとの話であつた。將



來行くは自給自活にする方針であるとの事である。此のコロニーに屬する土地の購入、又教室、住居、厩、其の他の建物も皆此の寄附金を以て購入したのだそうである。將來凡てが成功する様になれば是等の土地も價格を増加する事であろうし農作物も豊富に生産される事であろうし、是等のコロニーの將來はそう悲觀す可きでは無いだらうと思はれた。

ユダヤ人が將來パレスチンに歸來するであろうと云ふ事は聖書に處々に預言されて居る事實である。歐洲戦争前迄はかゝる事は全然考へる事すら出ない夢物語に等しかった。故に聖書の預言を信じて居る人々は多くの非常に愚かな盲信家の様に思はれた。然るに戦争始まつてから僅かに十年、戦争終つてから僅かに六年の今日既に多數の殖民地が出来、學校が出来、ユダヤ人の大學迄が出来上つて居るのを見て誰しも聖書の預言が驚く可き方法を以て實現せられて來るのを認めない譯には行かなくなつたのである。

聖書の預言とパレスチナの將來

乍併パレスチナの將來の運命は果して幸福と希望とを以て充たされて居るであろうか、其の事は非常な疑問である。聖書の預言は寧ろ其の反對であり、メシアなるキリストを信ぜざるまゝに諸國より歸り來るユダヤ人も他の不信の諸國民と同様に非常な苦難の時代を経過しなければならぬ事を教へて居る。折角其の故國を回復し沙漠の如くに荒れて居るパレスチナの地を乳と蜜の流るゝ地たらしめんが爲めに努力して居る是等の殖民の運命が結局患難と辛苦とであるならばあまりに可哀そうにも思はれる。併し此の様な將來は決して不可能では無さそうに思はれた。何となればパレスチナは將來益々世界に於ける最も重要な土地となり世界交通の中心となる可き傾向を有して居るからである。

希臘、羅馬、アツシリヤ、バビロン及埃及等が世界の文明國で有つた時代にはパレスチナは是等の諸國の中心に立つて居り從て幾回となく是等の諸國

アフリーレの猶太人殖民地

の侵略を受け代る——是等の中の何れかに征服され又隷屬した。其後と雖も或は土耳其の下に屬し又は英國の支配の下に置かれてある。是皆其の位置が重要な政治上的の意味を有した事が禍したのである。作し乍ら最近四五世紀の歐洲文明、侵略文明の潮流に對してはパレスチナは比較的關係が稀薄であつた。其理由は多分近世文明の第一歩はコロンブスやバスコダガマ等によつて創められた海運が基となつたので從て良港に乏しく又産物の少ないパレスチナは此の海運文明から除外されて居つたからである。

併し乍ら今日の著しい傾向は飛行機の利用である。飛行機が更に大仕掛に且つ一般的に旅客運送のみならず貨物運送をなす時期が来るのは決して遠い將來の事では無いであろう。然のみならず埃及は覺醒しつゝありアフリカは發展しつゝあり波斯、印度、支那等の發達も亦目睫の間に逼つて居る。若し亞細亞、亞弗利加、歐洲の三大陸が將來其の經濟的關係が益々密接にな

り、且頻繁になる様な時が来るならば、パレスチナは再び是等三大陸の交通の中心となり、貨物集散の中心となり、勢力爭奪の中心となり、世界の諸國が皆此パレスチナに其の權力を振ふ事を希望する様になるのでは無いかと思はれる。そうすれば將來の世界の大戦争がハルマゲドンに於て戦はれる事も可能であり、又ユダヤ人が再び此の大災禍の中に巻き込まれる事も可能であり、東西洋、白禍黄黒の諸人種が一大争鬭の渦中に巻き込まれ世界歴史上最大の禍が起る事も亦可能である。

十 チベリアス

サマク  
ギルボア  
山  
メイサン

停車場でビ氏に別を告げて汽車でサマクに向ふ。此の汽車はギルボア山の下を通つてメイサンに停車する。メイサンは舊約時代のベテシヤンでサウルの時代にも尙カナン人の領に歸して居つた土地である(士師記)。此の町は既に海面以下四百三十尺の處にあり、汽車は海の底を走つて居る事になる。汽車はメイサンより更に進んでヨルダンの川を横切る。此の鐵橋は海面以下八百十五尺の處にあり世界に於ける最低平面にある汽車の鐵橋である。やがて汽車はサマクについた。サマクはガリラヤ湖(チベリヤス湖、又はゲネサレ湖)の南端にあり停車場から直に湖面を眺める事が出来る。是より自動車で湖の西岸に沿ひて走りヨルダン川の出口(此邊は水が水晶の様に澄んで居る)を横切つて北に進み走る事約八哩にしてチベリアスの町についた。

チベリアス

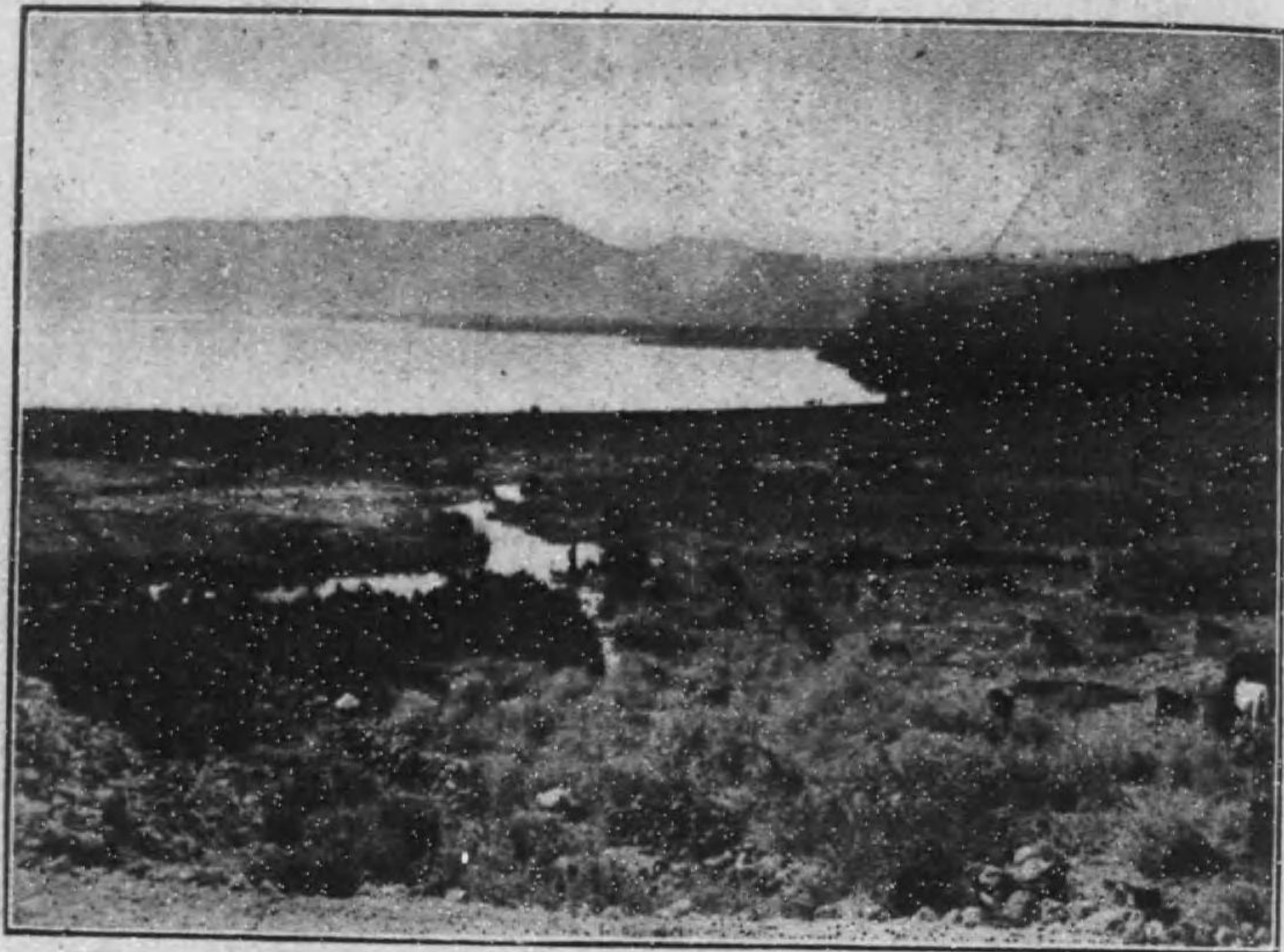
チベリアスはガリラヤの主府であつた。ガリラヤは預言者イザヤが「こゝくに人のガリラヤ(イザヤ書)と云つた地方でユダヤ人が多數住んで居つたけれども尙他の人種も多く混合して居つた。ローマ時代には此の地方にはギリシヤ、ローマの勢力が入つて居りユダヤ人も自然之に影響せられずには居なかつた。此のガリラヤ湖の周囲は今もパレスチナの他の地方よりは豊饒に見えるけれども、以前は非常に沃土に富み牧場、森林が殊に著しく目立つて居つた。従つてローマ時代殊にキリストの時代に至つて此附近は其の繁華の頂點に達したるものらしく、今日も尙其の當時の遺跡を至る處に發見する事が出来る。チベリアスは勿論、カペルナウム、ベテサイダ、コラジン及び對岸のガララの地、其他にも大きいローマ都市の跡を發見する事が出来、又キリストが二千足の豚を海の中に逐ひ落したと云ふ話等より見るも當時多數のローマ人其他の外國人が此の附近に住んで居つたと云ふ事が分り、(ヘブル人は豚を

チベリアス

食はない、又キリストが四千人、五千人を少しのパンと肴を以て養ひ給へる話等より見て多数の人間が容易にキリストの教を聴く爲めに集まつた事を知る事が出来る。然るに今は此の湖畔で四五千人を集める事は不可能であり、唯チベリアスの町のみが稍多くの人口を有するだけで他は皆落莫たる寒村か又は純然たる廢墟となつて居るに過ぎない。

チベリアスの町はガリラヤの國守ヘロデ・アンテパスが建てた邑で、チベリアス皇帝の名に因んでチベリアスと命名したのである。紀元前十七八年頃に邑の建設を始め紀元二十二年に完成したので丁度キリストが傳道を始められた頃はやうやく出来上つた新しい町であつた。然るに此の邑は墓地の上に建てられたと云ふので、墓地を汚れたものとして居るユダヤ人は此中に住む事を肯せず、極めて少數の外は此の中に住まなかつた。従て主として外國人が住み其の住民は雜然たる種類の人民であつた。夫故にかゝる著しい新しい

町であるに關らず新約聖書には一二回其の名が出て居るだけであり(ヨハネ傳二三、廿)聖書とは至つて關係が少い町である。乍併後に至りエルサレムがローマ軍に亡ぼされてから後は、此チベリアスがユダヤ人の中心地となり、ユダヤ人の經典タルムツドの研究をする學校も茲に出来、ミシナと稱する經典も茲で發行され、又ヘブル語の舊約聖書に母音符を附したのも此チベリアスであり、又聖書全體をラテン語に譯したジエロームは、茲で其のヘブル語の勉強をしたとの事である。其後十字軍と回々教徒との争奪の中心となつて居つた。ある人の紹介でパレスチナに何十年來住んで居るスコットランド人の老學者クリスチー博士に逢つた。近代の諸國語は勿論ヘブル語アラブ語の大家であり、是等の國語で其の土人に説教をして居る人の由である。「日本語も出来る」と云つて得意な顔をして居るので、本當かと思つたらそれは戯談であつた。博士が云ふには「いつか日本人が二人此の町に來た時其の人々に演説を



、原平のヤラリガと(湖スアリベチ)海のヤラリガ  
 處るな饒豊も最りあに北西の水潮は原平の此



幕天の種の此、活生のンサキウドベ  
 す在散に所各のナチスレバ

パレスチナの面影

して貰つた。一人は英語でやつたが他の一人は獨逸語しか出来ないで獨逸語  
 でやつた。それで自分は此の二人の演説をアラブ語に通譯した。翌日の新聞  
 にクリスチー博士は英語と日本語の演説をアラブ語に通譯したと云ふ事が載  
 せてあつた、其の記者が獨逸語を知らないで日本語であると思つたのであつ  
 た」と是が老博士の日本語が出来た所以だそうである。

博士の家はチベリアス湖岸に立つて、極めて美しい眺望を恣にして居  
 る。其のヴェランダの上に立つ時はガリラヤ湖一面を見通し北方遙にヘルモ  
 ンの山が眞白に雪を載いて其の美しい姿を湖面に映じて居る。博士は其の湖  
 畔に點在する故跡を予に示指してくれた。北岸にある右の村はコラジン左は  
 ベテサイダ、其の間に見えるのがカペルナウム、其の近くにあつて今は舊教  
 の尼僧院が頂上に立つて居る小高い丘がキリストの山上の垂訓をなし給ひし  
 山(是は博士の推測である。山上の垂訓を爲し給ひし場所は或はヘルモン山



ガリラヤの魚、イエスの食膳に上れるものも此の類ならんか



夫漁の上湖ヤラリガ  
ふ想をブコヤ、ネハヨ、ロテベ

(九千尺)であるといふ説と、又チベリアスとナザレの間にあるハツチン山(二千尺)であるといふ説とがある、それからチベリアスに近くマダダラがあるけれども是は一寸近い丘にかくれて見えない是がマダダラのマリヤの生れた處、對岸即チベリアス湖の東岸にはガダラの地(ルカ傳八〇)があり、ローマ時代即ちキリスト御在世の頃には此邊は多くの人口があつたに相違ない事を話して居つた。其の遺跡が今も發掘中で古い事實が次第に明るみに出されつゝあるとの事である。又其附近にイエスが五千人を養ひ給へる場所をも指摘して教へられた。

年齢約三十にしてナザレを出で給ひバブテスマのヨハネよりヨルダンの川に於て洗禮を受け、荒野の試を終え給へる後、イエスの三年の公生涯の大部分は此のガリラヤ湖畔に於て過された。此の湖に於て漁つて居つた漁夫等がペテロ、ヤコブ、ヨハネ其他の弟子であつた。マタイも此の附近の收稅吏で

ガリラヤ  
湖畔

チベリアス

あつた。七つの悪鬼を逐ひ出されて後イエスに従ひ其の終生イエスを愛し、其の復活の最初の目撃者となつたマダラのマリヤも亦此の附近の産であつた。多くの奇蹟は此の附近に於て行はれ、多くの教は此の湖畔に於て述べられ、イエスの足跡は普く此の湖畔に印せられたのである。此事を追懐して誰か追慕の念に打たれないものがあるか。此の山も此の水も皆イエスの目にふれ、其の御足の下に喜び躍つたのであつた。嵐に命じて之を静め給ひしも此處であつた。常に祈りの爲めに登り給ひしも是等の山々であつた。神の靈が常にイエスの上に上り下りしたのは此の場所であつた。千九百年の昔此の附近は實に天と地、神と人との交通の場所であつたのである。

クリスチー博士は更に後方の山を指してヘロデ・アンテバスの居城の跡を示し、バプテスマのヨハネの首を茲に持つて來たのであらうと説明して居つた。又有名なラビ、アキバや哲學者マルモニデスの墳墓の地位等をも示して

貫つた。予は是等の歴史的の背景を持つて研究に従事して居る博士を羨んだ、乍併人生の問題、信仰の問題は對人の關係でなく又對土地の關係でもない、我等と父なる神との靈的關係である。此關係に入るが爲めには必ずしもガラヤの湖を見る事を要しない、又必ずしも多くの地名を知るを要しない。唯復活し給へるイエスを見る事を要するのみである。而して、我等の靈の眼は彼を仰ぎ見る事が出来、之によりて時と處とを超越して眞の信仰と永遠の生命に入る事が出来るのである。

其の晩は丁度満月の前夜で大きい圓い月が東山から昇つてガラヤの湖水に其の光を投げた。電車とか汽車とかの様な騒々しいものは一つも無く全宇宙が靜肅其物である様な場所で、イエス御在世の當時を追想するに適する多くの材料を手にし乍ら此の美しい月を眺める事は予に取つて忘れ難い記憶である。イエスも幾度か斯る月を眺め給ひし事であらう。又幾度かかゝる月

光を浴び乍ら騰り給ひし事であらう。

翌十日朝チベリアスの南一哩半の處にある温泉に行き其の湯の湧出する處を見た。小さい温泉であつて日本に於ては珍らしくも何とも無い。ガリラヤ湖畔には此他にも一つベテサイダの近傍にもあり死海の岸にも數個の温泉が湧出して居る。要するにヨルダン川の流域ガリラヤ湖より死海に至る迄は火山とも見る可きもので何時噴火するか分らない状態にある。エルサレムには歴史上數度の大地震が有つた。ソドムとゴモラが東京の様に亡ぼされたのも其の罪の結果であつたが噴火的の天變によつたのであらうと云ふ事は死海の附近の地質を調査した學者の一致する點である。

チベリアスは是で切り上げて舊ベテサイダの跡タブカと云ふ處に行き獨逸カトリックのホスピツに投宿した。

十一 タブカの三日(カペルナウム)

マグダラ

タブカに行くにはマグダラの町を通過する。マグダラは今小さいアラブ町に過ぎず。見るに足るものは一つも無い。若しマリヤが生れなかつたならば此の村は全然忘却されてしまふ運命にあるであらう。

タブカ (ベテサ イダ)

タブカはベテサイダの町が有つたと稱せられて居る場所のアラブ名である。今は村らしい村は無い。唯ベドウィンが少數天幕を張つて住んで居るのみである。茲にある獨逸舊教のホスピツに落付く事にした。同宿者約十人中々にぎやかな會合である。茲に到着した日は丁度満月であり、美しい月が再びガリラヤ湖の東から昇るのを眺めた。湖面は鏡の如くに静かであり。岸を洗ふ漣の音が却て其の静けさを増すのみである。漁夫は月明に乗じて網を卸して漁つて居り、其の薄黒い船の影が或は近寄り或は遠ざかつて見えて居る、

タブカの三日



此の美しい景色を眺めて居る間に急に東の山から強い風が吹いて來、漁船は  
槍檣岸につき今迄静かであつた海面が急に浪立つて來た。空には黒い雲の塊  
が飛び散つて時々月は其の陰に隠れてしまつた。かゝる急變はガリラヤ湖畔  
の特徴であるとの事である。イエスが浪を静め給へる記事を思ひ出し、其時  
も多分かゝる種類の嵐が急に吹き出したのであらうと想像して多大の趣味と  
教訓とを感じた。

翌十一日は幸か不幸か雨が降り出して終日家中に蟄居するを餘儀なくせ  
しめられた。併し是は自分に取つて非常に幸福であつた。何となれば自分は  
新約聖書を取り出して、終日四福音書を耽讀する事が出來たからである。是  
迄福音書を幾度讀んだかは自分は記憶して居ない。併し乍ら此の時ほど福音  
書の事實が生々として自分の目に映じて來た事は未だ嘗て無かつた。其  
中に顯はれて來る土地の名稱等は皆明かに之を腦中に畫く事が出來るのみな

らず、ガリラヤ湖及び其の附近の土地は皆之を目前に指摘する事が出來るの  
である。嗚呼エス様は彼處で此の奇蹟を行ひ給ふたのであつたが、又此處に  
て此の教訓を垂れ給ふたのであつたかと一々明瞭に其の當時の出來事を追想  
し、之を眼前其の場所に當てはめて考へ乍ら福音書を讀んだ時の其の心持は  
決して終生之を忘れる事が出來ないであらう。此の一事丈けでもパレスチナ  
に來た價値は充分に有つたと云ふ事が出來る。他の方面の見物、殊に舊教が  
凡ての古跡に一々立てゝ居る寺院を見物する事は、寧ろ面倒であり、あまり多  
くの趣味を覺えなかつたけれども、かゝる自然の中に靜かに聖書をよみ、そし  
てその自然が皆此の聖書の中に表はれて來る舞臺そのものである事は何と云  
つても深い感動なきを得ない。此の靜かなタブカの一日は予のパレスチナ旅  
行中に於ける最も意義あり且つ最も愉快な一日であつた。

一昨年予が伯林に勉學中の事である、パレスチナ行きの心準備をして居つ  
タブカの三日

たので、新約聖書學者ダイスマン教授を訪問してパレスチナ旅行の注意を求めた、予の下心は同教授は此の地方に旅行した経験もある事故、宿屋や旅程や又視察すべき場所等についての注意を與へられる事であろうと思つて之を求めたのであつた。然るに同教授はかゝる詳細は何も示されずに唯ガリラヤ湖畔にて静かに聖書を讀む可き事を唯一の注意として予に與へられた。予が昨年エチンバラに居つた時米國人でパレスチナを旅行した人に出逢つた。そして其の人に參考になる様な事を教へて貰ふ様に頼んだ。處が其人は宿屋の名から宿賃、距離、滞在日數、視察個所迄極めて詳細に之を示して呉れたので之によつて旅行に多大の便宜を得た。此の二人の注意は獨逸人と米國人との差を示すの一端であつて面白いコントラストを爲して居る。双方とも有益であつたにしてもダイスマン教授の注意は殊に有り難い注意であつた事を今更乍ら深く感じた。

パレスチナの旅行で一番不愉快な事は、案内人其他にバクシシを強請さるゝ事の外、澤山の舊教の大伽藍が建つて居り凡ての故跡が其原形を止めないで皆建物の下になつてしまつて居ると云ふ事實である。夫故に若し米國の旅行者等がよくやる様に短時日の間にパレスチナの各所を自動車で駆け廻り、是等の寺院等を見物して廻るのみであるならば、パレスチナの印象は至つてまらなれない難然たるものになつてしまふのである。パレスチナ旅行の要諦は成る可く長く一ヶ處に滞在して其の地の自然に接し、之を自分の心の中に強く印象すると云ふ事である。是がイエス御在世の當時及其以前の舊約時代の歴史等をよむ時に多くの利益を與ふるのであつて之れなくしてパレスチナ旅行は其の效果の大部分を失つてしまふのである。

十二日雨霽れて外出に適する日和となつた。併し悪路を恐れてカベルナム行きを午後迄延ばし、午餐後カベルナムに赴いた。タブカから約一時

間許りにしてカベルナウムがある。海岸に沿ふて建つた邑で有つたらしく、今は全然荒廢に歸して一軒の人家も存在して居ない。總じてパレスチナ全體を通じてローマ時代の殷賑の跡を見る可き材料は無盡蔵に存在して居り、之に比して今日の衰頹を見る時は實に歴史的盛衰の甚だしいのに物の憫れを覺させられる事が屢々である。アシケロン、カイザリヤ、エルサレム、パールベック其他今日小寒村として残つて居るに過ぎない様な處にもローマ時代の城壁の跡、大小邸宅、宮殿の跡等を見る事が出来るに關はらず、今日のパレスチナは全然荒廢に歸して何等見る可きものも無い。實に驚く可き變化である。倫敦も巴里も紐育も伯林も或は東京も將來かゝる廢墟となつて徒に考古學者の頭腦を痛める材料になるであらうと云ふ事を誰か否定する事が出来ようか。

カベルナウムも其の一例である。イエスが茲に住み給ふた其の當時は可成

り大きい町であつた。然るに今日は人家が一軒も残つて居ない全然の廢跡になつたのである。近頃一の舊いシナゴグが獨逸發掘協會によつて發見され目下フランシスカン派の監督の下に其の發掘をつゞけ之を出来るだけ原形に近い様に復建する事を計畫して居る。此のシナゴグは間口五十九尺奥行七十九尺、其の用材になつて居る石も可なり大きい立派な石であり中々堂々たる建物であつた事は明かである。此のシナゴグは多分イエスが路加傳八章五節以下の種蒔の譬を述べられた場所であらうとの説である。イエスはガリラヤを徧く巡り其の會堂にて教をなし天國の福音を宣傳へ給ふた事が馬太傳四章二十三節に記されてある。此のシナゴグは其中の重なるものゝ一つであつた事は略確實であらう。かゝるシナゴグに出入して居つた頑固なパリサイ人等は自分等の行爲は律法に叶へる正しき行爲であり、イエスは一種の反逆者、革命家であつて危険人物であり之を除き去る事が必要であると考へた事であ

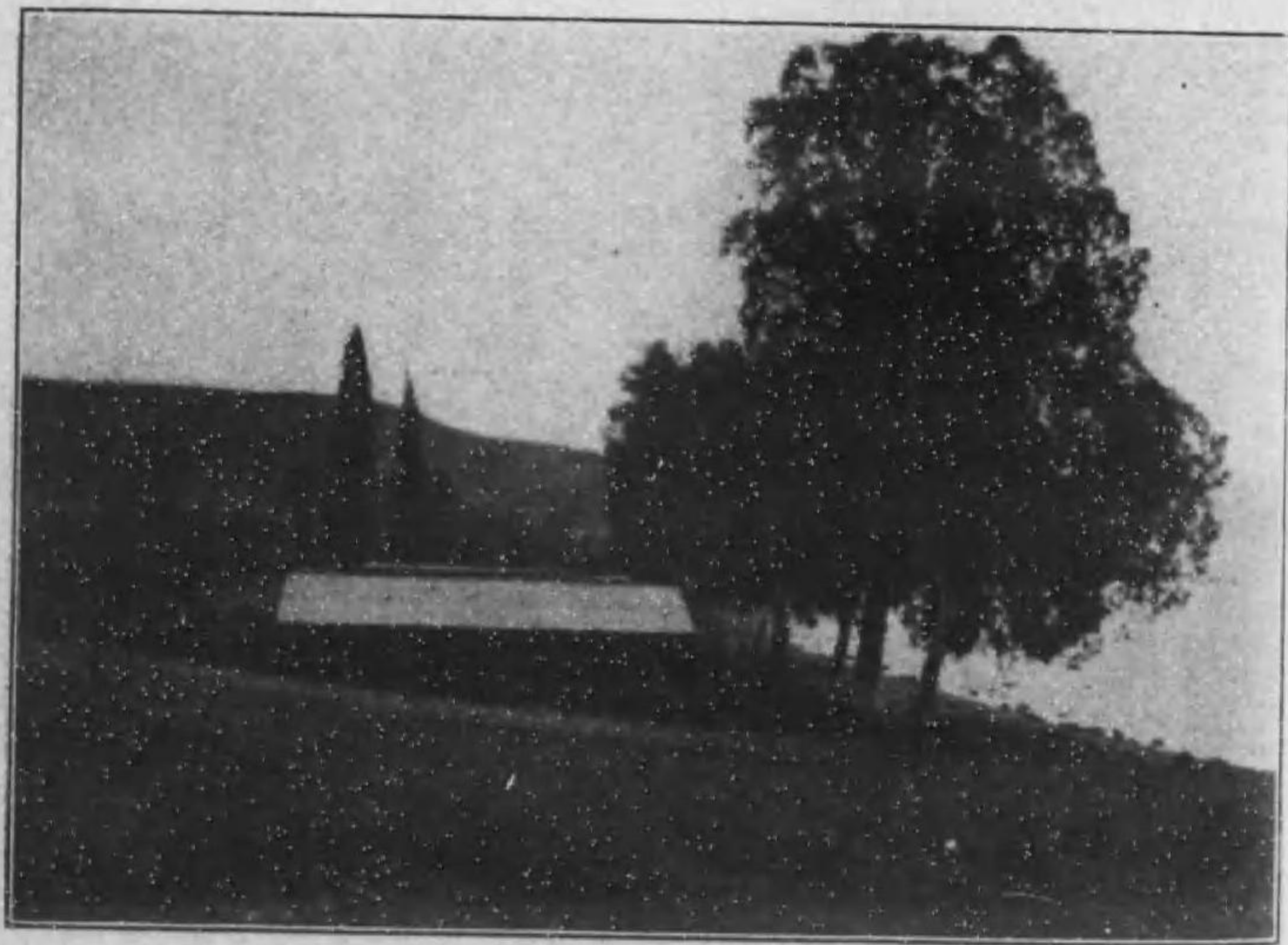
ろう。そして自分達の誇りである此會堂が將來一の廢趾として其殘骸を止め自分等の生命は時と共に永遠の忘却の中に陥つてしまふに關らず、風前の燈火の如くに見えたイエスの生命と其の感化は二千年の後の今日に迄及び地球を一周して地の極にまでも及び、今日日本人の子が其の廢墟を弔ふ様になるうとは夢にも思はなかつたであろう。人間は誰しも永遠に生きん事を欲し乍ら現在の生命に支配せられてしまふのである。其の生命を失ふ者のみ眞に永遠の生命に入る事が出来るのである。キリストの生命は永遠である。彼は父の御旨に従つて十字架の上に其の生命を棄て給ふた、斯して彼は永久に生き給ふに至つた。我等カペルナウムの荒涼たる風景を見、而も自分の心の中に脈博つて居るイエスの愛を思つて眞に永遠なるものゝ何處にあるかを明かにする事が出来てうれしかつた。

歸途クリスチー博士が垂訓の山であると想像して居る小高い山に登つた。

カペルナウムとベテサイダの中間にある丘である。「高き山」とは云ふ事が出来ない。併し至ガリラヤ湖を見下し、且つ山上は平坦になつて居り、多數の人を教へるには好適の場所である。果して是がそれであるかは何人も保證する事が出来ない。併し乍らガリラヤ地方の何處かでイエスは彼の不朽の説教をなし給ふたに相違ない。そうすれば此の處を其の候補地の一として考へる事も決して不適當では無いだろうと思はれた。夫故に暫く茲に腰を下して「福なるかな心の貧しき者、天國はその人のものなればなり、福なるかな哀む者云々」から以下を読んで見た。是等の言葉がイエスの口から出でた時は、恐らくガリラヤの山水草木は其の聲と共に振動して聽者の心を打つた事である。今日も尙幾千萬の基督者の心を動かして居る其の聲は始めて此のガリラヤ湖畔に發せられたのであり、或は此の山の上で發せられたのかと思ふと、茲に腰を下してガリラヤ湖を眺望する事の限り無き趣味ある事を一層深く感じ



跡掘發の堂會の人ヤグユのムウナルベカ  
中舊復下目



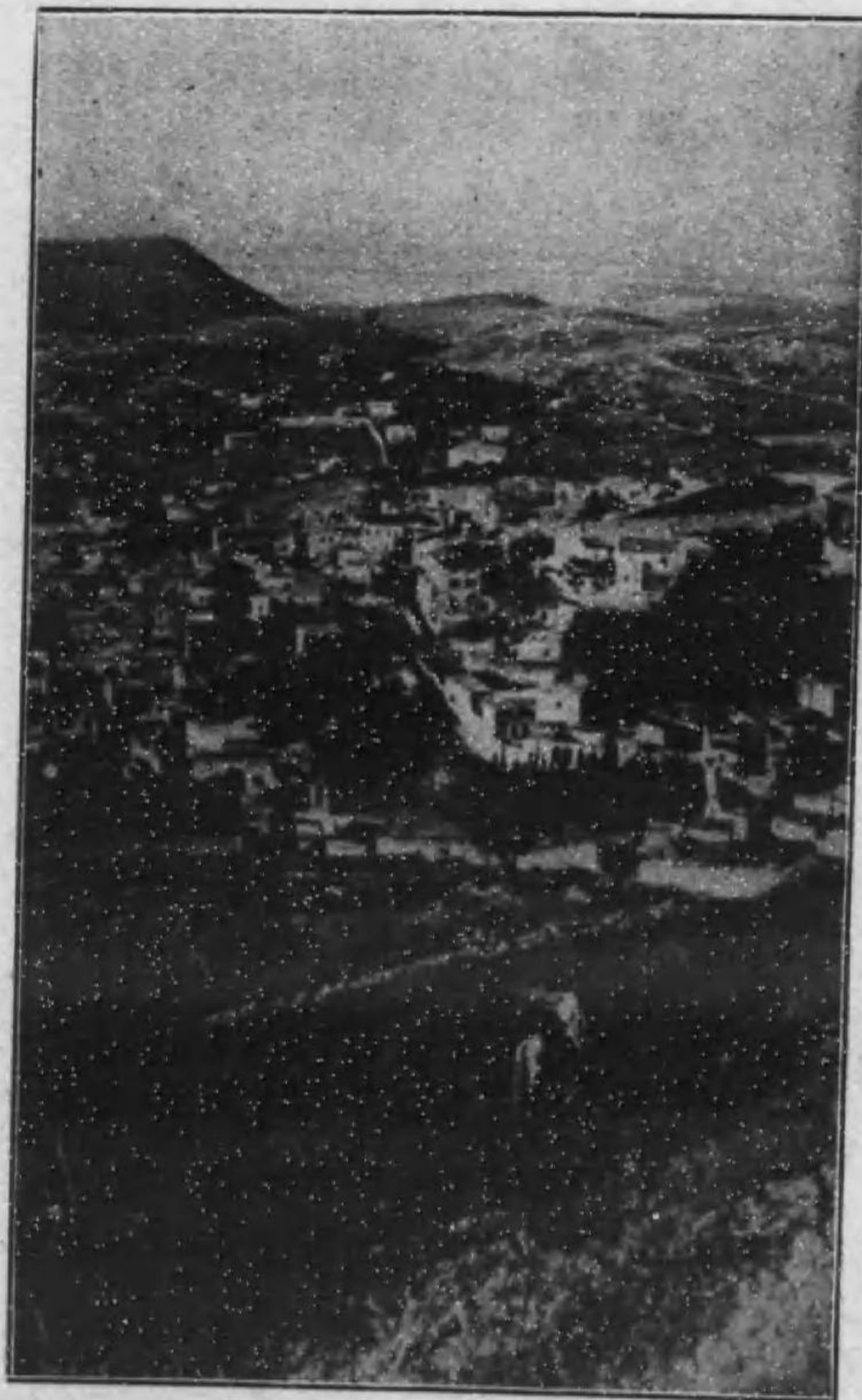
方左湖ヤラリガの近附(ダイサテベ)カブタ  
處るあ説のとりの山の訓垂は山の

水汲女

た。

パレスチナの面影

かく考へつゝ山を下りた。附近の高みに住んで居るベドウィンの女達が数人揃つてガリラヤ湖迄水を汲みに行くのを見た。此邊には(パレスチナ一體に)井戸と云ふものが非常に少ない。皆水を湖水か又は遠方の井戸から汲んで來るのである。中には風雅な形をした素焼の陶器を頭に載せて水を汲んで來る者もあり、中には無風流にも石油罐を使つて居る者もある。是は經濟上止むを得ないのである。陶器は誤つて落せば割れてしまふけれども石油罐は中々割れない。是等の草味の人種も此の經濟關係には勝てないのである。又彼等の衣服が殆んど一度も洗濯したらしい形跡が見えないのも恐らく水が少いからであらうかと考へた。



景光るたし下見りよ上山の方後なレザナ  
原平のンロドスエはるせ展開に方前

## 十二 ナザレ及びヒカナ

山  
ハツチン

十三日は折悪しく雨天である。午前はヴェランダで聖書の復讐に費し午後自動車でナザレに向つた。自動車はチベリアスの町から山を西の方に登り始めた。是がナザレとチベリアスとの間の道であり、主イエス御在世の頃には度々此の邊を往來せられた事であろうと思ふ、途中ハツチン山を望む事が出来る。此山は前に一言した通り主が山上の垂訓を述べ給ひし山であるとして居る。山頂に広い平面があるので此の想像を生むのに適して居るのである。併し乍ら山上の垂訓が一ヶ處で述べられたので無い事は馬太傳と路加傳とを比較して見れば分る事であるのみならず、それが何處で述べられたにしても其の價値は場所の如何に超越して居る事は明かである事と思ふ故、斯の如き火元争ひの様な事は困難を冒して迄探索するの必要は無いと思ふ。

ナザレ及びヒカナ

自動車はカナを通過した。今は小さい村になつて居り一瞬にして飛び去つてしまひ、何等の印象をも残さない。かくして間もなくナザレにつき、埃太利のカトリックの經營して居る僧院に宿泊する事にした。此の僧院はナザレの町の東の方の高處にあつてよくナザレの全町を見下す事が出来る。美しい植木が繁つて居る庭を持つて居りパレスチナにしては珍らしく潤ひのある僧院であつた。

雨が止んだのでナザレの町の方に出かけて行く。ナザレの町はシク山の頂上より南への傾斜面に建つて居り、其位置が高いのと、遂にメギド、カルメル等の山脈を見下す事が出来るのとで、一見誠に心持のよい町である。たとひ後にはキリストを受けなかつたとは云へイエスが其三十年の間の準備時代を茲に暮し給へる事を思ふと、ナザレはパレスチナの地の何れの町にも優つて居る誇を持つて居るのである。そして實際ナザレは此の誇に値打して居る

事を感じしむるに充分である。山に登つて平地を見下す心持は誰しも經驗がある事であろう。ナザレ殊に古いナザレは此の心持を春夏秋冬味ふ事が出来る町である。かゝる町に生育し給へるイエスは決して不適當な土地に其の生命を養ひ給へるものと考ふる事が出来ない。「ナザレより何の善き者出でんや」と云はれて居る所以は、取るに足らない小村であつたからであらう。乍併神が其の御旨を行はんとし給ふ時、必ずしもエルサレムの祭司を用ゐ給はない。又希臘、羅馬の文明人を以てし給はない。寧ろ山上の一寒村に人と爲り給へる大工の子イエスを選び給ふた。而も今にして是を思ふ時、是れ最も適當の場所を選び給へるのである事を知るのである。

町の北端に近くマリヤの井戸がある。是はナザレに於ける唯一の泉であり従て終日水を汲んが爲めに茲に来る老幼の女子は絶える事が無い。マリヤも亦幼きキリストを伴ひ乍ら此の井戸に水を汲みに来たであらう。夕方にな

ると殊に多くの女子が頭上に水瓶又は石油の空罐を載せて水を汲みにやつて来る。可成り重い水瓶を頭上に載せて腰に調子を取つて歩く工合は中々巧みなものである。中には裸足のものも澤山にある、着物も大體に汚いものを衣て居る。併し容貌は中々美しいのが多い。聖母マリヤの繪も皆美しい姿に書かれて居るけれども是あながち事實無根と云ふ事は出来ないであろう。二三の少女に乞ふてカメラの前に立たせようとした。併し彼等は決して無報酬では之を承諾しない直にバクシンを要求する。再び得難い機會なので小額のバクシンを與へて寫眞を撮す事が出来た。

●ガブリエル寺は此マリヤの井戸の北にあり、天使ガブリエルがマリヤにイエスの降誕について告げた場所であるとされてある。「慶たし恵まると者よ、主なんちと偕に在す、汝は女の中にて福なる者なり」マリヤは懼るゝ勿れ汝は神より恵を得たり、汝孕みて男子を生まん其の名をイエスと名くべし、かれ

大なる者となつて至上者の子と稱へられん、又主たる神その先祖ダビデ王の位を彼に與ふればヤコブの家を窮りなく支配すべく且つ其の國終ること有らざるべし」(二八以下)此の詩の様は美しい物語の場所が茲であるとされて居る。相變らず祭壇と禮拜堂が建てられて居りかゝる美はしい光景を想像する事が困難にされて居る。マリヤの井戸に通ずる水が此の寺院の下に湧き出でゝ居る。丁度雨が降り出したので宿に歸つた。

十四日終日雨天で一步も家を出る事が出来ない。時には風も加はつて外は強い嵐である。此の旅行は元來一年中の最も悪い時期であつたそうである。最もパレスチナ旅行に適した時期は三月から四月であつて十二月一月二月の半迄は雨期で一年中最も雨量の多い時であるとの事である。併し其の割合には幸運であつて、是迄タブカで聖書を読み爲めに費した日の外は雨に困らせられた事は無い。今日は是で二度目であるけれども一日友人宛にパレスチナ



よりのハガキを書き又は此の日記の後れを取り返し又は讀書などをして一日を暮した。此の僧院の坊さんの一人が専門の接待役であるので、食事の持ち運びから室の掃除迄皆やつてくれ、時々室に来て日本の話をきき、又日本の文字などを習つてよろこんで居つた。全然野心がなく世間離れした點が舊教の坊さん達の持つて居る可愛らしい性質である。

翌十五日午前カナに行く、一時間餘の道を歩行するのである。今は此の村をケンナと稱して居りイエスの時代よりも遙に小さい村になつて居る。チベリアスからナザレに通ずる道の途中にあつて前に一度通過したけれども、自動車で一瞬間に飛び去つてしまひ殆んど印象が残つて居ないので再び其處に出かけた。是はイエスの行ひ給へる第一の奇蹟即ちカナの婚筵に於て水を酒に變じた場所である。カナは山の傾斜面に建てられた小さい美しい村落で、其の婚筵の時の事を想像するに相應しい場所である。

カナの婚筵に於て水を葡萄酒に變ぜられたイエスの心持を思つて見る時、其處にイエスの自然の姿が髣髴として顯はれて來るのを思はざるを得ない。イエスは徹頭徹尾自然の子であつた。イエスの心には修飾は一つも無い、虚偽は一つも無い、死んだ道德律は一つも無い。彼は無理に禁酒禁煙を唱へなかつた。彼は律法の文字を他人に強制しなかつた。彼は食前に手を洗ふ事、其他斷食、安息日等の規則を強て守らず又弟子等にも守る事を強制しなかつた、彼には唯一つの新しい律法があるのみであつた。即ち心を盡し精神を盡して主なる神を愛する事と、己の如く其の隣人を愛する事である。之に反しない限りに於てイエスは人と共に喜び人と共に悲しんだ。其處に何等不自然な細工は無かつた。夫故にイエスは知人の婚姻の席に列して彼等と共に喜んで充分自然なる心を持つて居つた。酒が欠乏した時に之を供給する事を以て其喜びを助くるの道と考へた。中世の僧侶の如く婚姻を以て止むを得ざる

罪惡とは見なかつた、又近世米國式基督者の如く飲酒夫自身を罪惡視しなかつた。其處にイエスの天真があり。其處に基督教が終始一貫して自然の宗教であり、議論や思索や虚構や人工の微塵だにも存在しない理由がある。

水甕

道傍から十歳位の女の子が出て来て英語で話しかけ、案内をして呉れると云ふので其の後に付いて行つた。第一に小さい希臘舊教の寺院に行つた。其處には二つの石の甕がある。六つ有つたの中四つは紛失して此の二つだけが残つて居るのだそうである。此の甕に満された水を葡萄酒に變へたのがイエスの行はれた第一の奇蹟であつた(ヨハネ傳三)。此の石甕はあまり澤山の水は入りそうにも見えないがそれでも聖書にある通り四五斗位は入るであろう花崗石で出来て居り丸く細長く日本の神社の前にある手洗の石鉢の様な形である。

奇蹟の跡

それから羅馬舊教の寺院に行つて見た。茲には非常に古くから教會堂が有

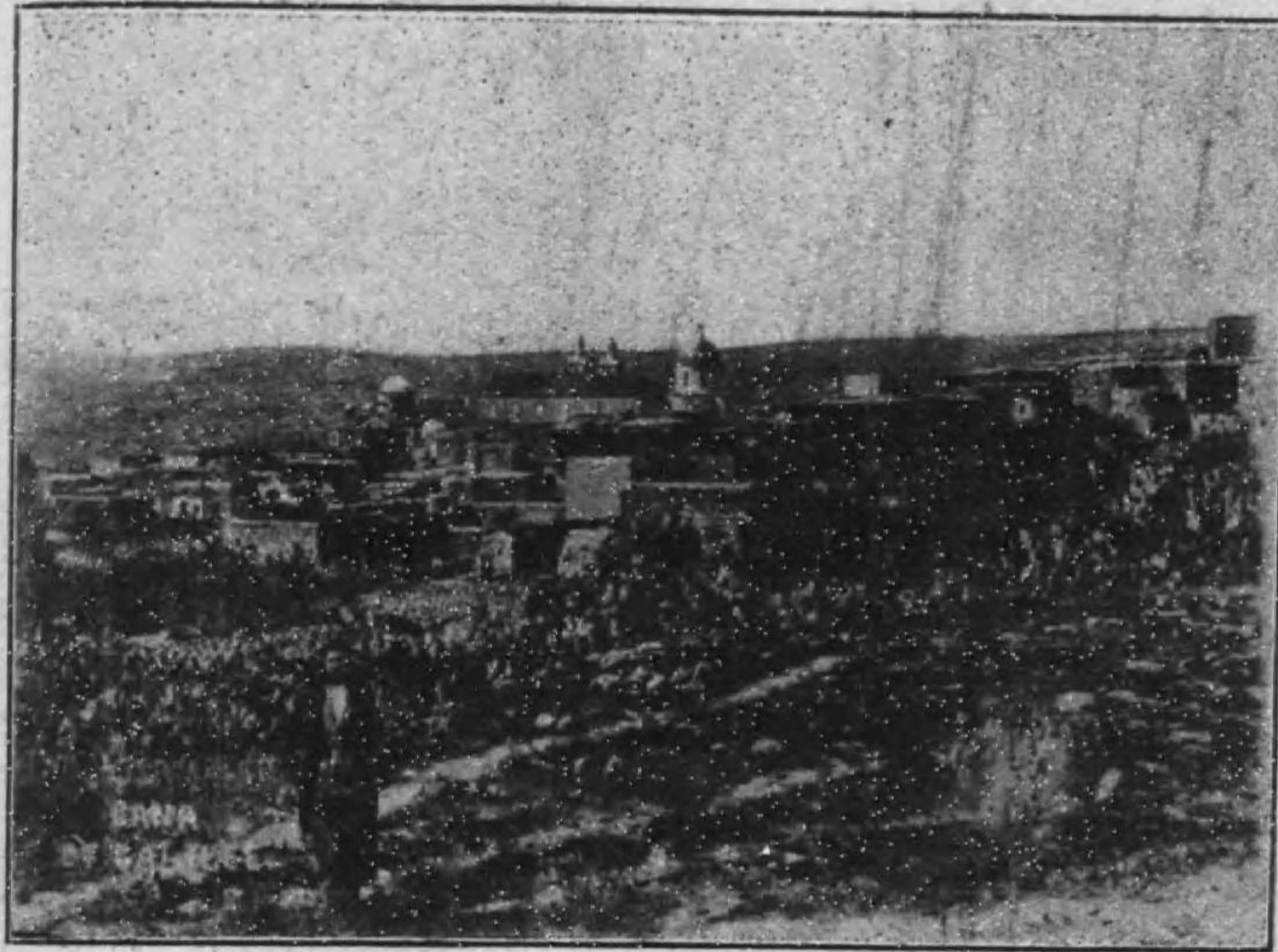


に様有るゝかもヤリマ、戸井のヤリマ  
供子るゝかもスエイリ來にみ汲な水て  
がらんなるへ給れ戯と等

つた事がモザイックの鋪石に書いてあるヘブル語の文字により證據立てられて居る。即ち三四世紀頃にナベリアスのヨセフ伯と云ふ人が寄進したのである。尙其以前は茲に猶太教の會堂があつた事も事實である。そして茲でイエスが水を葡萄酒にしたのであると言ひ傳へられてある。今日から彼の石壁や此の場所が果してそれであつたか否やは證據立つる方法は無けれども、又之を否定する材料も無い。要するにカナの村は此の附近にありそしてイエスが此の附近で奇蹟を行ひ給へる事のみが永久に動かない事實であらう。

此他ナタナエル(ヨハネ一〇四五)の家であつたと云ふ場所にフランシスカン派の寺院が立つて居る。以上がカナで見える事が出来る凡てのものであるけれども、要するに是等は其の當時を追想せしむる材料にならないばかりで無く、却て之を妨げる材料になるだけである事は甚だ遺憾な事柄である。舊教の信徒は一々是等の寺院を参拜し石壁に接吻し賽銭を上げて御利益を求めて廻つて居

ナザレ及びカナ



所場の筵婚のナカに院寺の央中、邑のナカ  
のもるたれらて建に



木の果花無りあに上逾る至にレザナリよナカ  
(しな葉後頃月一)

るのであつて、是等の寺院は其の人々達の爲めに建てられたのである。此の點はパレスチナ全體に亘つて存在する幾百の寺院皆然らざるはなしと云へるであらう。唯此のカナの周圍の山と谷は二千年の昔も今日と變る事無くイエスが此の附近を往來し給へる時に彼を送迎せると同じく今日予を送迎してくれる事を思へば他の凡ての障害も不愉快も雲霧消散して此の旅行の價値が十二分に味はれるのである。

予を案内してくれた此女の子は不思議にバグシシを要求しない。夫故此方から其の持つて居る小さい土製の甕を買つてやつた。是は記念品として旅客に賣りつけるのである。女の子は家に走り込んだ、そして間もなく予を呼び戻して、「御父さんが一寸来て下さい」と云つて居る。と云つて予を招いた。入つて見ると此の邊にしては一寸立派な家で主人はサフーリと云ふアラビヤ人で基督者であるとの事である。前にエルサレムでホテルを経営して居り、又製

粉所を持つて居つたのが、歐洲戦争の餘波でパレスチナに戦争があつたので今は昔ほどには行かないと云つて居つた。大きい二人の娘と一人の息子とはペールトにあるアメリカのカレーチに入れて居ると云ふ事を話して居つた。日本人と見ると呼びよせて親しく話すらしい様子である。前にも某海軍大佐が茲に寄つた事があるとの事で其の名刺などを示して居つた。アラビヤ人の中の有識者であらう中々立派な顔付きをして居り話し工合も至つて落付きがあり常識がある事を認められた。

ナザレに歸つて午後には又市内の見物に出かけた。地圖を手にし乍ら一人で町を歩いて居ると英語や佛語を學校で習ひ覺えた小供が案内をしようと云つて附いて來るので五月蠅い事限りが無い。辛うじて夫等を切り抜けて御告の寺を見に行く、茲も前のカブイエル寺院と全しくマリヤが天使ガブリエルから神告を受けた處であるそうである。全じ事が二度あつたので無い。從て

此の二つの中何れか、間違つて居るか、又は双方とも間違つて居るのである。双方とも直しい事は有り得ない筈である。前者は希臘正教會に屬し、後者は羅馬教會に屬して居るのが此の二つの場所を占めて居る理由である。此の方が内容は豊富であつた。地下の岩窟を利用して其處に禮拜堂を澤山に作つて居る。天使の禮拜堂と云ふのがあつて祭壇が右と左にあり右は天使ヨアヒム左は天使カプリエルに献げてある。其奥が神告の禮拜堂であり其の壇の下に大理石の敷石があり丁度ベツレヘムの誕生寺と全じ様な形式に造られて居つて其處にラテン話で「茲に言肉となり給ふ」と記されて居る。又此禮拜堂の左方に直徑二尺程の花崗石の柱が二本立つて居る。之はマリヤとガフリエルとが居つた位置を示して居るのだそうである。即ち此の場所がマリヤの家であつたと云ふのが古い傳説である。是も今は寺院になつて此の寺院の近くにヨセフの細工場と云ふのがある。是も今は寺院になつて

しまつて細工場の跡だにも無い。茲でヨセフはイエスに其の仕事を教へ、茲でイエスは三十歳になり給ふ迄其の仕事を手傳ひ給ふたのであるとの事である。若し其の家が其のまゝに残つて居つたならばどんなにか趣味多い事であらうと想像されるけれども、今は唯何處に行つても全じ様な寺院を見る許り、不満足此の上無しと云ふ可きである。

茲から稍坂を上つて行くと、一の古いシナゴグがあるルカ傳四章十六節以下にある物語は此のシナゴグで行はれたのだと云ふ事である。

「偕てその育てられ給ひし處のナザレに到り、例のごとく安息日に會堂に入りて聖書を読まんとて立ち給ひしに、預言者イザヤの書を與へたれば、其の書を繙きてかく録されたる所を見出し給ふ「主の御靈われに在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我を遣はして囚人に救を得ること、盲人に見ゆる事を告げしめ、壓へらるる者を放ちて自由を與へし

め、主の喜ばしき年を宣傳へしめ給ふなり」。イエス書を巻き係りの者に返して坐し給へば、會堂に居る者みな之に目を注ぐ、イエス言ひ出でたまふ「この聖書は今日なんぢらの耳に成就したり」人々みなイエスを譽め又その口より出づる恵の言を怪しみて言ふ「これヨセフの子にあらずや」………  
…また言ひ給ふ「われ誠に汝らに告ぐ「預言者は己が郷にて喜ばるゝことなし………」

此のシナゴグは非常に古い建物を幾度も修繕して補足したものである事は其壁に表はれて居る石の層を見れば明かである。之がイエスの座し給ひしシナゴグである事も或は事實であるかも知れぬ。肉に於けるイエスを知れば知る程靈のイエス、神の子としてのイエスを知る事が困難となる事は、其の當時と今日と少しも變る處が無い。イエスの三十年の生涯を毎日目前に見て居つた其同郷人は、彼を神の子としメシヤとして受け入るゝ事に困難を覺えたの

であらう、今日も人としてのイエスをのみ見んとする人の中に、神の子としてのイエスを見失ふ人が少く無い、ルナンの如きは其の一人であり今日多く存在する所謂新派神學者も此の種類である。

最も親み深き其の故郷に於て受納れられなかつたイエスは憤然として怒り給ふた。茲に於て「會堂に在りし者共之を聞きて憤怒に満ち起ちてイエスを邑より逐ひ出し、其邑の建ちたる山の崖に曳き往きて投落さんとせしにイエス彼等の中を通りて去り給ふ」(ルカ傳四〇二) 此の崖であるとされてある山がナザレの東南の方に見へて居り之を「嶺を落しの山」と稱して居る。北面は至つて平坦であるけれども南方は之より衝き落されたら到底叶はない位な峻な崖になつて居る。此點から見たら或は此の傳説が本當かも知れない。併し乍らナザレの邑から此の崖の頂迄は徒歩で約二十分を要する點から考へて見ると茲までイエスを引いて行つたかどうか疑はしくなる。因にナザレの

ナザレ及びカナ

町はづれには澤山の崖がある。

終つてナザレの後方の山に登つて四方を眺めた。地中海の方からカルメル  
メギドの連山、タポール山、ヘルモン山、エスドレロンの平原が見え又ダボ  
ル山の南にはサウルが口寄の婦を訪ねたと云ふエンドルの村が（サムエル前  
見 一七）見え、又其の近くにイエスが或る寡婦の獨子を死より甦せ給へるナインの村  
が見える。（ルカ傳七〇）そして足下にはナザレの邑が一望の下に展開して静に  
往時を偲ぶに最も應はしい場所であつた。日漸く西に没せんとして居るので  
倉皇宿に歸つた。

エンドル  
の村  
ナインの  
村

十三 タポール山（キリスト變貌の山）

タポール  
山

ナザレの邑の見物は是だけにして切り上げ翌日はタポール山に登る事にし  
た。昨日迄あまり快晴とは言はれない天候であつたのが今日は拭ふが如くに  
晴れ渡つて道路も乾燥し登山には理想的の日であつた。朝七時迄に約束して  
あつた馬が来ないので止むを得ず又馬を雇ふ爲めに邑迄出かけた。別當の名  
前も聞き取つて置かなかつたので約束した相手方を捜す譯にも行かず止むを  
得ず別の馬を雇つた。此邊の人間は偽を云ふ事を何とも思はない。殊に旅客相  
手を業として居る連中は此點に於て全然無道德であると云つてもよい位であ  
る。タポール山迄は可なり遠いので早朝出かける事を計畫したのであつたが、  
美事に此の計畫ははづれて八時半頃やうやく適當の馬を見付けて出發した。  
非常に悪い石と岩と泥との山道を歩く事二時間餘にしてやうやくタポール

タポール山

の麓に達した。是からは車道の立派な道である。登ること一時間弱にしてタポールの頂上に着いた。

「六日の後イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率きつれ人を避けて高き山に登り給ふ。斯て彼等の前にて其状かはり其面は日の如く輝き、其衣は光の如く白くなりぬ。視よモーセとエリヤとイエスに語りつゝ彼等に現はる。ペテロ差出で、イエスに曰ひけるは「主よ我等こゝに居るは喜し、御意ならば我茲に三の廬を建り一つを汝のため、一つをモーセのため一つをエリヤの爲にせん」彼なほ語り居る時光れる雲かれらを蔽ふ、また雲より聲あり曰く「此は我が愛ひ子わが悦ぶ者なり汝等これに聴け」弟子たちこれを聞きて倒れ伏し懼るゝこと甚し。イエスその許にきたり之に觸りて「起きよ懼るゝな」と曰ひければ彼等目を舉げしに唯イエスのほか誰も見えざりき」(マタイ十七)

此タポール山の頂が此の事實が起つた場所であるとされて居るのである。是も勿論一の傳説に過ぎないので之を證明する材料も無く又之を否定する材料も無い。併し乍ら若し此の重大なる事實が茲で起つたとすれば、それは非常に適はしい場所である事は誰しも認めるであらう。

タポールは此の附近の山々から離れて單獨に聳えて居り其形は日本ならば飯盛山と名付けるに相違ない形状をなして居り、高さは千八百四十三尺、周圍の山々の中に特に異彩を放つて居る。詩篇八十九篇にエホバの大能を讃へて居る處に、北と南とは汝之を造りたまひタポール、ヘルモンはなんぢの御名によりて歡びよばふ(十二節)とあり、ヘルモン山の高さに比すべくも無いにしても兎に角パレスチナの地に於ける際立つた山である。四世紀の頃ジエロームは此のタポールを以て變貌の山であると記して居り、其後今日に至つて居る。或人はイエスの時代には此山はローマの城壁があり又人家もあつた



ので變貌の山では有り得ないと云つて反對して居る。何れが真であるかは唯神のみ知り給ふ。

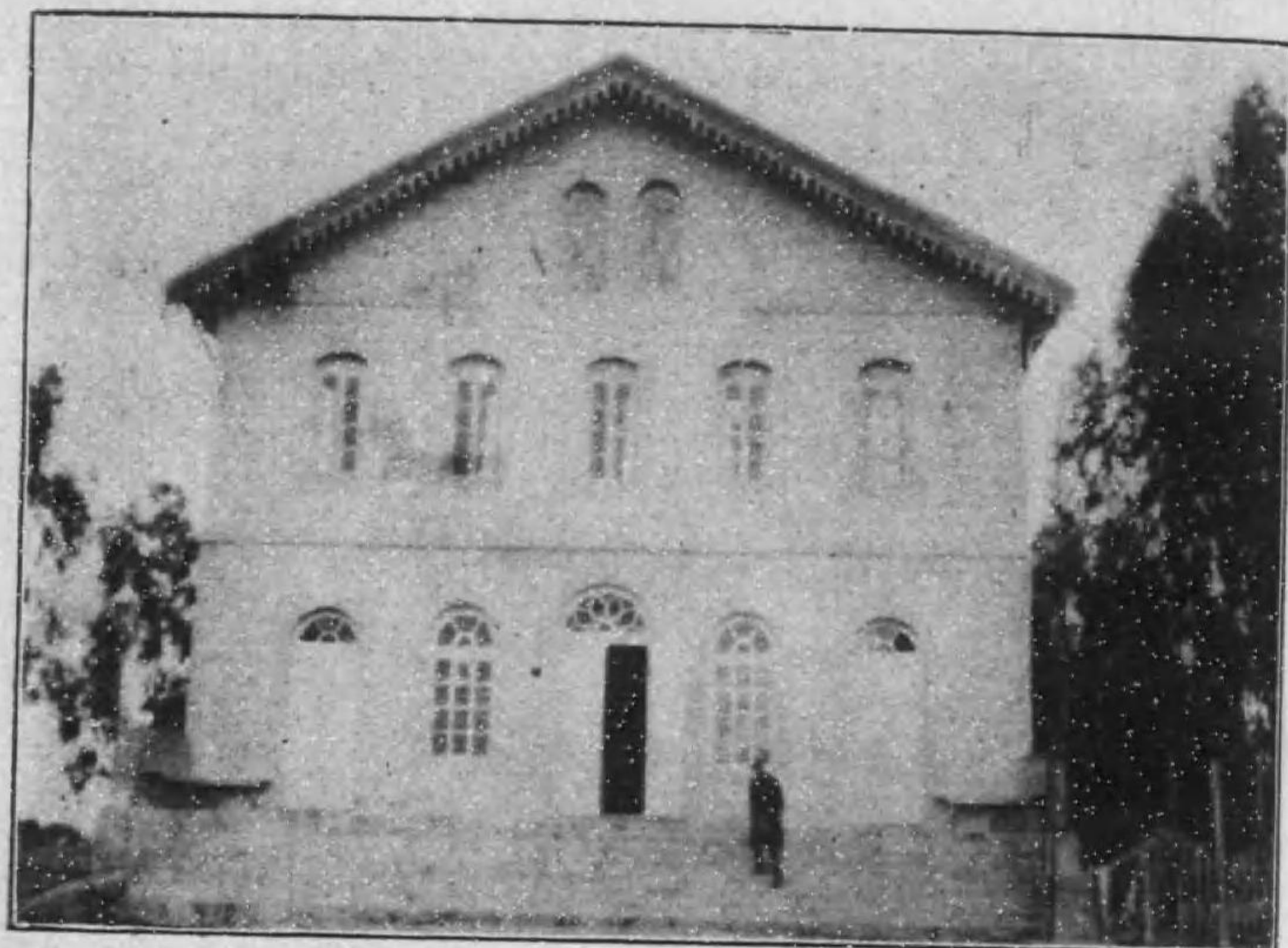
山の眺望

タボール山の頂上から四方を眺望する時は北ヘルモンより南サマリヤの山々に至り東はキレアデ、モアブの連山より西はカルメルを越えて海に至る迄之を一望の下に置く事が出来る。若し此山の上に一つの家もなく、唯イエスと三人の弟子とのみ静に祈つて居り乍ら此變貌の事實が起つたものと假定して見るならば、此の山頂は完全に之に適した場所である。其の壯麗、其の神秘、恐らく之に匹敵する場所と場合とを考へる事が出来ないであろう。此の山に登つたものは誰しも此の山が其の場所であつてほしいと望まないものがあるまい、ジエロームが之を云ひ出したか否やは不明であるけれども、此の傳説が何人かによつて唱へ出された理由は決して想像するに難くは無い。然るに茲にも矢張りローマ教會とギリシヤ教會が寺院を建て居る。そし

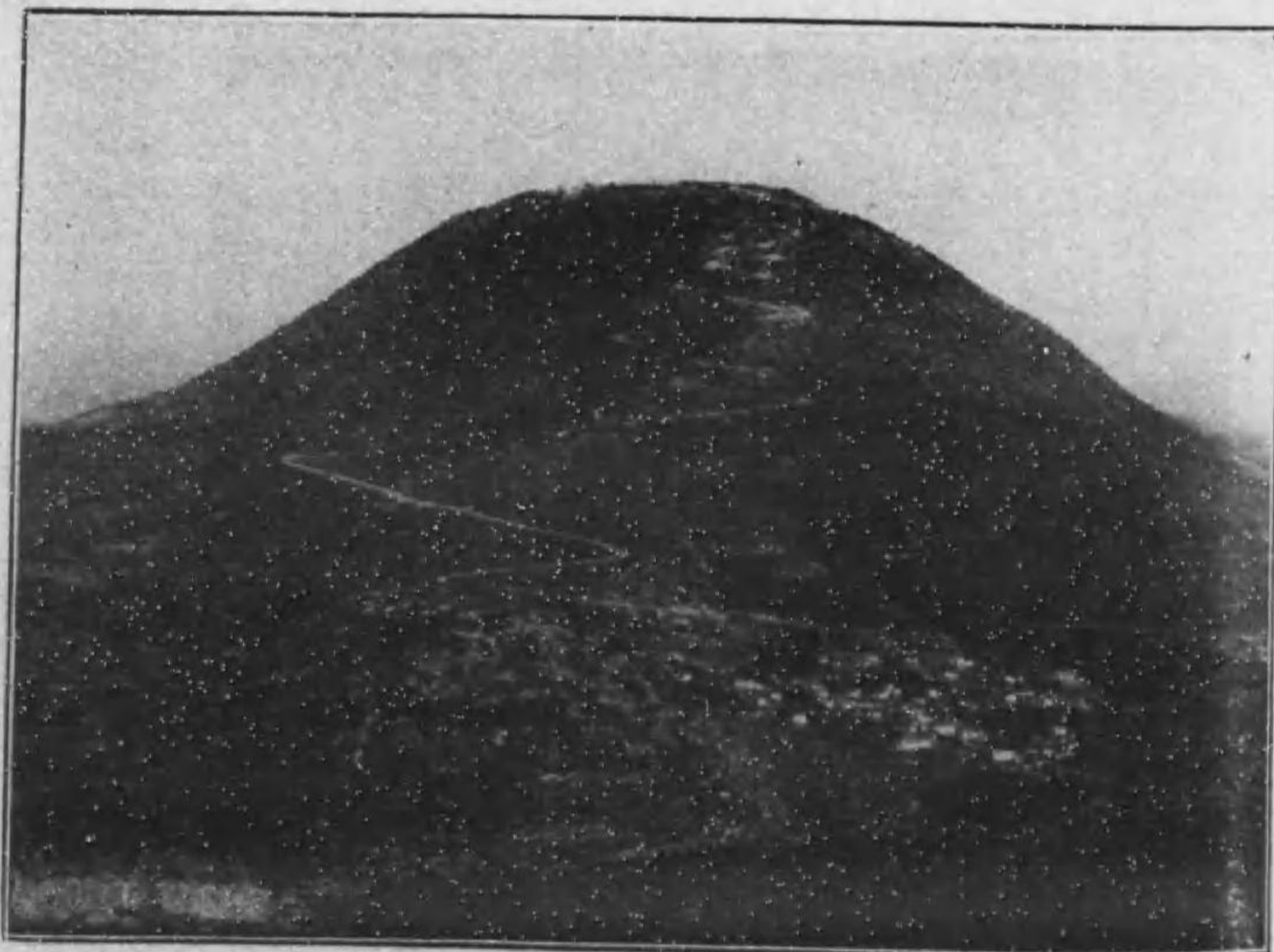
三つの窟

て各々自分の寺の建つて居る場所がキリスト變貌の場所であると主張して居るから可笑しい。殊にローマ教會は今又新に宏大な伽藍を新築し略落成して居つた。立派な大建築であり其のモザイク其のステンドグラスの窓等は中々壯麗なものである。此の山の上には是だけの伽藍を建てるのは中々小々の費用では出来ないであろう。此の金は皆愚夫愚婦の財袋から出て來るのだと思ふと彼等にとつて氣の毒になつて來る。夫のみならず此建物の中央はキリストの爲めの窟であり、入口の左右にはモーセとエリヤの爲めの窟が出来て居る。元來キリストが山上にて其の貌を變へ給へる事の意味は弟子達をしてキリストの神の子たる事、及死して甦り時やつて再び顯れ給ふべき事を信ぜしめんが爲であつた(ヘテロ後書二〇)始めにモーセとエリヤが共に在りて後にイエスのみ残つて居つた事は、彼等も亦イエスに仕へ彼を拜す可きものである事を示して居る。ペテロが三つの窟を造らん事を言ひ出したのは「其言ふところ

タボール山



スエイは央中此院寺しれらせ築新に上山ルーボタ  
りな廬のヤリエミセーモは右左の口入廬の



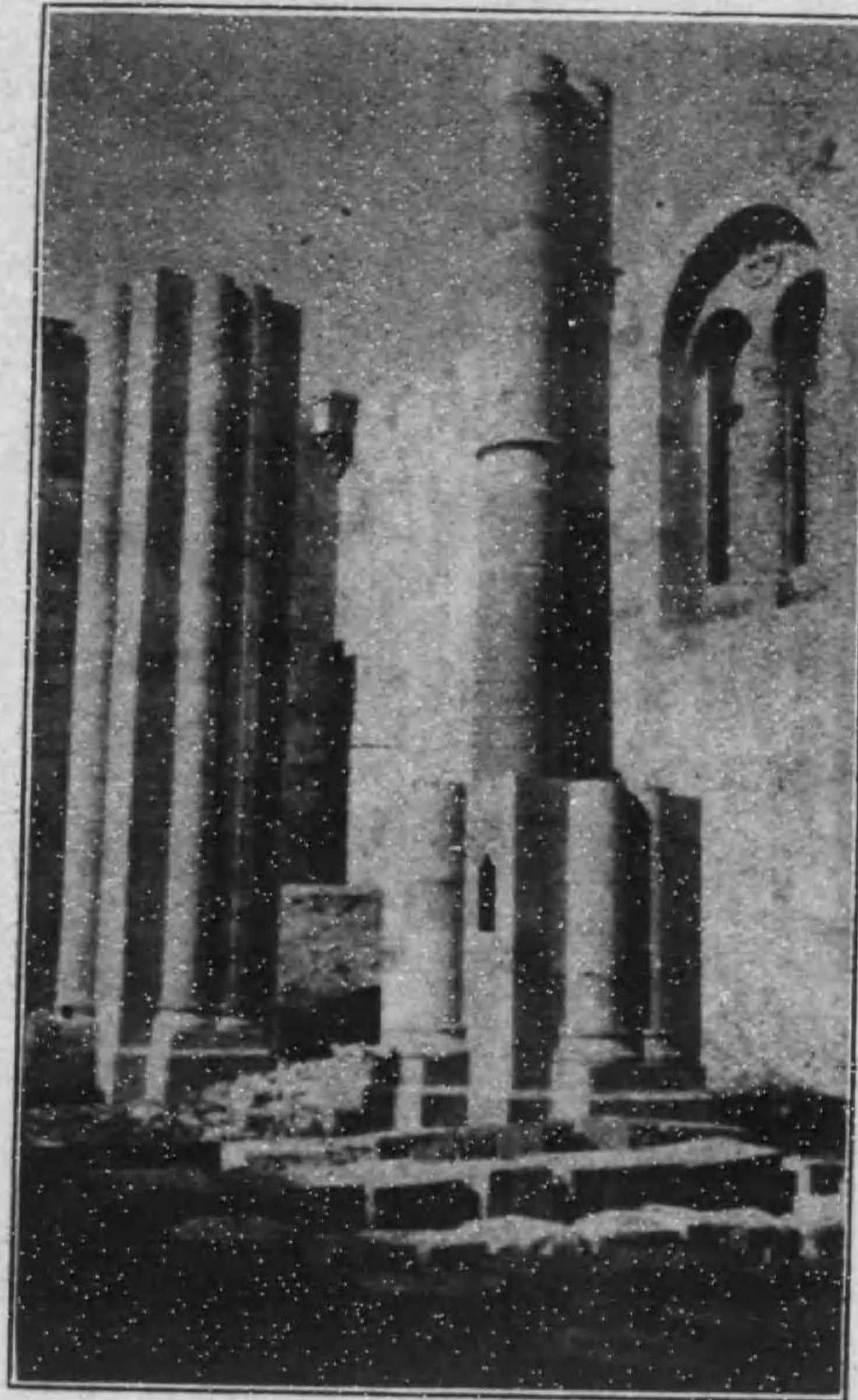
村のルードンエは村の麓山、山ルーボタ

人と馬

ボレスチナの面影

を知らざりし」(ルカ傳九)が故であつた。言ひ換へて見ればペテロは其の榮光に驚き懼れて口から出まかせを言つたのである。イエスは到底山上の廬にモ「セやエリヤと住むべきでは無い。彼は復活して神の右に座し給ふ可きである。然るにローマ教會やギリシヤ教會の人々がペテロの出鱈目を引繼いで態々三つの廬を茲に建てたと云ふのは御苦勞千萬な話であつて基督教が生命を失つて形式的禮拜に墮落した最も善い一例であらう。

天候は最上であり馬も幸非常に活潑な馬で長く長い坂道を上り下りする事が出来たけれども、馬子の小僧が頗る圖々しく性質の悪い奴で、往復ともシタ、カに困らせられた。人間よりも動物の方が優つて居る事は哲學者に云はせたら多くの場合に事實であるかも知れないけれども、今日の様な場合には哲學者を俟たずして明瞭に馬の方が此小僧よりも優つて居る様に見えた。かゝる人間を愛し之を救ひ其の罪を赦すと云ふ事は随分困難な仕事であると思



ヤコブの井戸の側に新築中の寺院。未完了



び及スールブナリよ腹中の山ムシリゲ  
む望な山ルバエ

ふ。之が完全に出来たイエスが神の子キリストで無い筈は決して無い。  
豫定より後れて四時頃宿に歸り、後れ乍ら晝飯を済まし、直に自動車でナ  
ブルースに向つた。自動車代六圓と云ふ言ひ値を四圓に引かせて是で馬鹿を  
見ずに済んだ事と思つて居つたら、同行のアラブ人は二圓五十錢拂つて居る  
のを後で見た、矢張り遠來の孤客は此の地では騙されるのが當然の運命であ  
るらしい。夜ナブルースにつきホテル・パレストアインに投宿した。

十四 ナブルース(シケム)

(サマリヤ人、ケリジム山、エバル山、ヤコブの井戸等)

ナブルース

ナブルースに着いたのは夜であつた。

ナブルースは昔のシケムでサマリヤの主府である。アブラハムがエホバより「汝の國を出て、汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。我汝を大なる國民となし。汝を祝み、汝の名を大ならしめん。汝は祝福の基となるべし。我は汝を祝する者を祝し、汝を誣ふ者を誣はん。天下の諸の宗族汝によりて福祉を獲ん」との約束を得てハランの地を出で、カナンカナンの地に行き、始めて達したのが此シケムであつた(創世紀十二)。そしてアブラハムのみならずヤコブも其の子等も一時茲ココに生活して居つた。ヨシエアはイスラエルの地に入り四方の敵を征服して後イスラエルの一切の支派を茲

サマリヤ人のシナ

に集めて訓辭をした事がある(廿四〇一節)。其後イスラエル王國の時代になつても此土地は一中心點として重要な地位を占めて居り、聖書にも時々顯はれて來る事は舊約聖書を讀んだ事のある人は知つて居る筈である。夫故に此の地はイスラエルの歴史に取つて重要な邑の一つである事は争はれない。のみならず今日も中々大きい町で産業も想應に賑つて居る。

ホテルで夕食を認めて居る時、隣の食卓にユダヤ人らしい顔をして居る連中が五六人食事をして居り、佛語やら獨語やらで話し合つて居つた。其の中の一人が食事を終へてから予に話しかけ「明日は土曜日で朝六時からサマリヤ人のシナゴグに禮拜があるから、若し希望があれば自分が案内しよう」と云ふ事であつた。全氏はユダヤ人で、當地のサマリヤ人の學校の先生であると云つて自分を紹介した。朝六時は少々つらいとは思つたけれども丁度善い機會でもあり、且つ一種變つた禮拜であるに相違ないと思ひ全氏に同伴を依

ナブルース